



みやぎの先人集第二集 未来への架け橋

みやぎの先人集 第二集

未来への架^かけ橋

みやぎの先人集第2集「未来への架^かけ橋」

発行 宮城県教育委員会

〒980-8423

宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号

平成30年3月発行

宮城県教育委員会



みやぎの先人集 第二集

未来への架け橋

みやぎの先人集第二集「未来への架け橋」は、大正時代や昭和時代に活躍した宮城県にゆかりのある人たちの生き方をまとめました。

道徳の時間やそのほかの時間に読んで、先人の生き方を学びましょう。

自分の地域の先人や興味をもった先人について調べてみましょう。

調べた先人について家族の皆さんと話し合ってみましょう。

みやぎの先人集第二集「未来への架け橋」

目次

● 相澤 幸四郎	― 郷土の自然を守る ―	1
● 石ノ森 章太郎	― まんがの王様 ―	5
● 及川 平治	― すべての子どもたちに新しい教育を ―	9
● 小野寺 久幸	― 仏像修理一筋に歩んだ人生 ―	13
● 加藤 きん	― 国境を越えて命を救う ―	17
● 神永 昭夫	― 東京オリンピックの銀メダリスト ―	23
● 後藤 桃水	― 民謡を育てる ―	27
● 小室 達	― 伊達政宗公騎馬像をつくる ―	31
● 齋藤 眞	― 脳神経外科の道をひらく ―	35
● 佐藤 忠太郎	― 伝統の復活と発展をめざして ―	39
● 佐藤 忠良	― 技を磨き続けた職人彫刻家 ―	43
● 佐藤 基	― インシュリンを発見する ―	47
● 白鳥 省吾	― ふるさとを愛した詩人 ―	51
● 鈴木 哲朗	― 新しい漁業への挑戦 ―	55
● 園部 秀雄	― 女性剣士、薙刀を通して心を磨く ―	61
● 高橋 英吉	― 夢を追い求めて ―	65
● 高橋 長十郎	― 地域の幸せを願って ―	69
● 只野 文哉	― 電子顕微鏡の研究開発 ―	75
● 千葉 あやの	― 藍染の技術を守る ―	79
● 千葉 亀雄	― 新しい文学の発展のために ―	83
● 永澤 才吉	― 安全な水を人々に ―	87
● 日野 藤吉	― 梨の栽培で村を救う ―	93
● 布施 辰治	― 弱い立場の人々のために ―	97
● 星 泰三郎	― 一日も休まない図書館長 ―	101
● 牧野 富三郎	― 元年者を支えるために ―	105
● 松山 京子	― 無医村を救った慈愛の医師 ―	109
● 水上 不二	― 海と子どもを愛した詩人 ―	113
● 宮城 新昌	― 新しいかき養殖を求めて ―	117
● 谷津 はつね	― 生命の誕生を見守る ―	121
● 吉野 作造	― 本当の幸せを求めて ―	125
（資料）		
先人ゆかりの地域		129
先人が生きた時代		131



相澤 幸四郎 (相澤家提供)

(また、あのふるさとの自然の中で暮らせるのだ。)

昭和二十八(一九五三)年、相澤幸四郎は、五十五歳の時に遠田郡北浦小学校校長として教員生活を終え、生まれ故郷である新田村(現在の登米市迫町)に戻って来ました。三十年ぶりのふるさとでの生活です。幸四郎の心に子どもころの思い出がよみがえってきました。

幸四郎の家は、伊豆沼の近くにありました。そのため子どもころの遊び場は、もっぱら沼と、その周りの大きな林でした。そこでトンボやチョウを追いかけたり、夏の暑い時期は、沼に入って水泳をしたりしたのです。お腹が空いた時には、ハスの若い芽をとって、食べました。米や野菜がとれない時期は家族が魚やヌマエビをとって売り、生活の足しにしていました。貧しかった子どもころ、まさに伊豆沼からたくさん恵みを受けて育ったのです。幸四郎にとってこの沼は、生活の一部であり、かけがえのない大切な場所でした。

ところが、三十年ぶりに見た伊豆沼の景色は、すっかり変わっていました。林の木々がたくさん切りたおされ、沼の浅瀬が干拓されて田畑になっていたのです。戦時中の食糧不足や戦後の人口増加のため、田畑を増やす必要があったのでした。

(人間の都合で、沼や林がどんどん小さくなっている。このままで、いいのだろうか……。)

人々が生きていくためには仕方がないことだと思いつつも、幸四郎の心にはもやもやとしたすっきりしない思いがわき上がってきました。

それから十年もの年月が流れた、昭和三十八(一九六三)年。幸四郎に大きな転機が訪れました。近くの小学校

で、環境問題についての講演会が行われたのです。講師は、この問題についてくわしい大学の先生でした。新田の住民を集めてこのような講演会が開かれたのは、初めてのことです。幸四郎は、その話にすっかり引きこまれました。聞いているうちに、新田に戻って以来十年間、ずっと心にあつたもやもやが何であつたのかに気づかされました。

(新田の人たちの暮らしはもちろん大事だ。しかし、自分たちの暮らしの豊かさだけを求め、自然や動物がぎせいになるようではいけない。この伊豆沼の自然を守り、そこに住む人たちと生き物たちがともに幸せに暮らせるふるさどにしたい。そのためにも、今、何か行動しなければ。)

幸四郎は講演を聞いてから、ふるさとの自然を守るために自分ができることは何か、必死になって考えるようになりました。

そんな中、ある新聞記事を目にしたのです。それは、青森県で行われている白鳥のえさまきの様子が紹介されたものでした。

(白鳥か……。そうだ。白鳥ならば、伊豆沼にもいくら飛んでくるではないか。新田でも、白鳥にえさをあたえることができるかもしれない。)

当時の伊豆沼は、数羽の白鳥が一時的に羽を休めに来るものの、すぐに飛び立つ状態でした。

(えさをまいて、伊豆沼にたくさん白鳥を定着させるんだ。白鳥がたくさん来るようになれば、関心が集まる。人々の目も伊豆沼の生き物やその自然に向けられていくにちがいない。……よし、今自分にできることが見えてきたぞ。)

幸四郎は、早速白鳥のえさにするために近所の人にたのんで茶がらを集めました。そして日の出とともに、ツルハシと茶がらを積んだリヤカーをひき、伊豆沼に出かけました。片道一キロメートルほどの道のりです。

当時の伊豆沼は現在よりも冬の寒さが厳しく、水面が一面凍っていました。水鳥は水中でえさを食べるため、えさまきのためには、氷をくだいて水面を出す必要があります。これが大変な作業でした。いつしか、登校途中の中学生数名といっしょに作業をするようになりました。彼らもまた、白鳥に関心をもっていったのです。

氷の上に立ち、凍える手でツルハシをにぎります。厚さ十五センチメートルほどの氷を少しずつくだき、まずは小さな穴を開けます。そしてその縁をけずって少しずつ広げ、直径三メートルほどの大きな穴にするのです。

伊豆沼：
現在の栗原市と登米市にまたがる沼。

干拓：
沼や湿地から水をぬき、田畑などにすること。

ツルハシ：
農機具。硬い土を掘り起こすのに用いる道具。鉄製で両端、または片方だけをつるの口ばしのような形に作り、柄を付けたもの。
リヤカー：
荷物を運ぶために自転車につないだり人が引いたりする二輪車。

「さあ、食べてくれ。」
やっと出てきた水面に、幸四郎が持ってきた茶がらや中学生たちが持ち寄ったモミヌカをまきます。

しかし、警戒心が強い白鳥たちは、まったく見向きもしませんでした。それでも、幸四郎たちは根気強く毎日えさまきを続けました。

雪が降り風の強い日などは、伊豆沼は本当に身が凍るような寒さです。幸四郎は奥さんから、「こんな日はかぜをひきます。やめてください。」と、いく度となくお願いをされました。しかし、決して行くのをやめようとはしませんでした。氷をくだいているうちに沼に落ち、全身ずぶぬれになってしまうこともありました。えさまきを終えて帰るころには、着物はすっかり凍ってしまいました。



えさまきのために、伊豆沼の氷を割る様子
（『白鳥の世界』川嶋保美氏撮影）

そんなことを一か月も続けたある日、ついに、一羽の白鳥がおそろおそろ近寄って、えさをついばみ始めたのです。すると、他の白鳥もつられるようにえさに口ばしをのばし始めました。

「食べたぞ。」

生徒たちが小さく声をあげました。かたをたたき合って喜ぶ中学生たちの様子を、幸四郎も目を細めて見つめていました。

その後も、幸四郎たちはえさまきを続け、えさをもとめて伊豆沼に来る白鳥の数は少しずつ増えていきました。この様子が迫地区の広報誌でも紹介され、人々の関心が伊豆沼に少しずつ向いていきました。こうして、幸四郎は二十数名の仲間を集め、新田に「白鳥愛護会」を発足させたのです。新田での講演会の翌年、昭和三十九（一九六四）年の暮れのことでした。

愛護会の会長となった幸四郎は、地域の人々とともにえさまきをするようになりました。最初は愛護会の発足に

しびい顔をしていた人々も、いつしか一生けん命えさ集めに協力してくれるようになりました。新聞でえさがまだまだ必要であることを訴えたところ、全国からもたくさんの方が送られてくるようになりました。こうして、新田全体に白鳥愛護の輪がどんどん広がっていきました。昭和五十九（一九八四）年には、白鳥愛護会のメンバーは、なんと二百名をこえていたといえます。

幸四郎たちの活動がもとになって、昭和六十（一九八五）年、伊豆沼、内沼はついにラムサール条約の登録湿地に指定されました。伊豆沼の周りには、白鳥愛護だけでなく沼全体の自然を守りたいという人たちがたくさん集まってくるようになりました。

そして幸四郎の「ふるさとの自然を守りたい」という思いは、亡くなった今もその人たちに引き継がれ、伊豆沼の自然環境全体を本来の姿に戻そうとする取組が行われています。周辺でたくさん沼が干拓されて無くなっていく中で、伊豆沼は、豊かな自然を残しています。この沼とそこに住む生き物たちは、今も守られ続けているのです。

今でも、伊豆沼にはたくさん白鳥が遠くシベリアからわたって来ます。幸四郎が愛した伊豆沼は、今や世界有数の水鳥の飛来地としてだけでなく、貴重な動植物の生息地として世界的に知られるまでになっています。



伊豆沼に集まる観光客の様子
（塚博氏撮影）

モミヌカ：
もみぐら。もみの
最も外側にある皮
の部分。

発足：
団体が作られ
活動し始めること。

ラムサール条
約：
正式名称「特に水
鳥の生息地として
国際的に重要な湿
地に関する条約」。
湿地に生息・生育
する動植物、特に
国境を越えて移動
する水鳥を中心に、
国際的な保護・保
全を目的としてい
る。

相澤 幸四郎
相澤 幸四郎は、明治三十（一八九七）年、新田村（現在の登米市迫町新田）の農家に生まれた。校長職を退職した後、二宮尊徳の「報徳の道」をもって、郷土の再建をしようとした。晩年は、「迫町白鳥・ガン愛護会長」「伊豆沼湖畔群の自然を守る会長」として、伊豆沼でえさをまく姿が多くのマスメディアで紹介された。

二宮尊徳：
江戸時代後期の農
政家。

「僕は一体、誰のためにまんがを描いているのだろうか。このまま流れに任せて描き続けていいのだろうか。」
 大人でも子どもでも、「変身!」と聞けば、『仮面ライダー』を思い出す人が多いことでしょう。『仮面ライダー』は、石ノ森章太郎の描いた作品です。数々の作品を作り、「まんがの王様」と呼ばれた章太郎にも、仕事への迷いを抱える日々がありました。

石ノ森章太郎(本名・小野寺章太郎)は、昭和十三(一九三八)年、石森町(現在の登米市中田町)に、五人兄弟の長男として生まれました。子供のころは太平洋戦争の影響で物が手に入らず、子ども用の本などをなかなか買ってもらったことができませんでした。本が好きな章太郎は、父親の本棚にある本を片っ端から読みました。また、自分で絵を描き、「おもしろブック」と名づけた本を作った楽しみました。章太郎が九歳の時、「まんがの神様」と呼ばれる手塚治虫が『新宝島』というまんがの単行本を発表しました。それを読んだ章太郎は、映画のように今にも動き出しそうな絵の一つ一つに心を奪われ、まんがのすばらしさに夢中になり、自分でもまんがを描くようになりました。章太郎が描くまんがを、いつも誰よりも喜んでくれる一番の読者は、小さい頃から病弱だった三歳上の姉由恵でした。

中学生になると、『毎日中学生新聞』に四コマまんがを投稿して入選するようになり、毎月作品を送りました。章太郎に勉強をしてほしい両親は、まんがを描くことに大反対でしたが、章太郎はまんが雑誌にも投稿を始めました。宮城県沼沼高等学校に入ると、美術部や音楽部、新聞部、文学部、柔道部などをかけ持ちしながらまんがを描き、『墨汁一滴』という同人誌を発行し、出版社や手塚治虫へも送りました。このことがきっかけとなり、高校二年生の時には、手塚治虫からアシスタントを頼まれ、たびたび東京に行くようになりました。



幅広い年代に人気の『仮面ライダー』
 (株式会社石森プロ所蔵)

同じ年、手塚治虫の紹介で、『漫画少年』という雑誌へ章太郎の作品が掲載されることになりました。高校在学のまま、プロデビューを果たしたのです。デビューにあたり、ペンネームを出身の「石森」にちなみ、「石森章太郎」としましたが、誰にも正しく読んでもらえず、「石森章太郎」と呼ばれるようになりました。このころ、大学入学を目指して勉強をするように父親に何度も言われましたが、受験勉強をしないでまんがばかり描く日々が続きました。章太郎は、新聞記者や映画監督、小説家にもあこがれていましたので、まんがを続けながら生活費と学費を稼ぎ、それから大学を目指そうと考えていました。章太郎の姿勢を父母はよく思っています。ただ一人、姉だけが、「上手ねえ、章太郎、すごいわねえ。好きなことをするのが一番の幸せなのだから、章太郎がまんがを描きたいならそれが一番いいと思う。東京に行きなさいよ。」そう言って、章太郎の背中を押してくれました。



石ノ森章太郎の生家(登米市中田町)
 (石ノ森章太郎ふるさと記念館提供)

昭和三十一(一九五六)年、章太郎は上京し、「トキワ荘」というアパートに引っ越しました。「トキワ荘」には、まんが家の卵(「ドラえもん」の作者藤子・F・不二雄、「天才バカボン」の作者赤塚不二夫など)がたくさん住んでいました。章太郎のまんがを描くスピードはとても速く、他のまんが家の三、四倍の量の原稿を描くことができてきました。また、もともと好奇心旺盛でしたので、描く分野もとても幅の広いものでした。編集者からまんがの執筆を頼まれると断りきれず、いつも原稿の締切りに追われ、まんがを描くだけで精一杯の生活になり、間もなく大学受験をあきらめてしまいました。

章太郎は姉に病気の治療を勧めるため、東京に呼び寄せました。姉は、章太郎の良き理解者であり、いつも最初の読者でした。しかし、姉は上京して一年後、突然発作を起こして病院へ運ばれました。発作が収まり一時落ち着いていたため、章太郎は病院を後にしましたが、姉の容態は急変し、急いで病院に戻った時には、亡くなっていました。姉を一人ぼっちで死なせてしまったことを、章太郎は何年もの間後悔し、自分を責め続けました。

手塚治虫:
 日本のまんが家、アニメーター、フィクション監督、医学博士。戦後日本においてストーリーまんがの第一人者として活躍した。主な作品に鉄腕アトム、「ジャングル大帝」、「火の鳥」などがある。

同人誌:
 目的などを同じくする人たちが作品発表の場として編集・発行する雑誌。

好奇心旺盛:
 珍しいことや未知の事ごとに、興味関心を盛んに抱くさま。

姉の死後、心に大きく開いた穴を、仕事をすることで紛らわそうとしました。しかし、

(毎日締切りに追われてばかりだ。それも、何の努力もしないで、編集者に言われるまま描き流したようなものばかりが通用するとは。自分のしたかったことは、こんなことだったのだろうか。まんがを描くのは好きだ。でも、このままでは僕の人生はすっかりまんがに飲みこまれてしまうのでは……。)

もともと多くのことに興味をもっていった章太郎は、自問自答を繰り返すようになりました。

(ああ……、もう限界だ。まんがからきつぱり足を洗うことにしよう。)

章太郎は世界旅行に行くことを決心します。二十三歳のときでした。当時は海外旅行が自由にできず、観光のために出かけることは、ほぼ不可能でした。「記者」という肩書きで各出版社から旅行の資金を借り、帰ってきてから働いて返す約束で出発しました。アメリカ、イギリス、フランス、オーストリア、ドイツ(当時は西ドイツ)、オランダ、スペイン、イタリア、ギリシャ、エジプト、香港、マカオと約三か月の一人旅でした。初めての海外旅行に夢中になる一方、まんがのことは頭の中からまるっきり消えていきました。見るもの、聞くもの、すべてが章太郎に新鮮な感動を与え、日本での生活を思い出すこともありませんでした。

帰国して自分の部屋に戻ると、いつも使っていた机やペンなど、目に映るものが、何か前とは違う景色のように見えました。

(そういえば、三か月もまんがを描いていないんだなあ。姉さんが僕の作品を読んで喜んでくれればそれでいいと思っていたけれど、本当にそのために描いていたのだろうか。勉強から逃げ、親から逃げ、姉さんの苦しむ姿から逃げ、趣味から仕事に変わり、苦しくなってきたまんがから逃げ……。自分が本当にやりたいことは何だろう。自分のよさを生かす仕事とは、一体何なのだろう……。よし、どこまでできるか、やってみようじゃないか。)

章太郎は、ぐっとペンを握りしめ、『サイボーグ009』を描き始めます。九人のサイボーグはそれぞれ国籍や能力に特徴をもたせました。それは、旅行で立ち寄った国の影響を受けたものでした。サイボーグを主人公にしたのも、旅行中に読んでいた科学雑誌に掲載されていたからでした。旅行中はまんがのことを忘れていたはずでしたが、実は世界旅行は、作品作りに大きな影響を与えていました。『サイボーグ009』は、読者から予想を超える反響があり、様々な雑誌に連載されるようになりました。後に章太郎はこの作品を、自分の意思でまんがを選び、プロとして再

出発を果たした記念すべき最初の作品、と振り返っています。

様々なことに興味のあった章太郎の感性は、創り出すまんがの中で大いに発揮されます。章太郎が「まんがの王様」と呼ばれるようになったのは、多くのすばらしい作品を生み出したからです。シリアスなSF長編、どたばたギャグ、大人向けの時代もの、変身ヒーロー、日本の歴史など、様々なテーマに果敢に挑戦したその作品数は、世界一とギネス記録に認定されました。また、ずっと、ふるさとを大切に思い続

けた章太郎は、初心に戻る意味をこめ、四十八歳の時、ペンネームを生まれ故郷の地名である「いしのもり」と読んでもらえるように「石ノ森章太郎」に改名しました。そして、

「萬画は万画です。あらゆる事象を表現できるからです。」
という『萬画宣言』をし、その死の直前まで精力的に多くの作品を作りました。章太郎の作品は、亡くなった今も、世代を超えて愛され続けています。



石ノ森章太郎
(株式会社石森プロ所蔵)

石ノ森章太郎(本名・小野寺章太郎)

石ノ森章太郎は、昭和十三(一九三八)年、現在の登米市中田町石森に生まれた。高校二年生の時にプロのまんが家としてデビューし、生涯に描いたマンガのページ数は十二万八千枚、生み出された作品は七百七十作に及ぶ。登米市中田町には、「石ノ森章太郎ふるさと記念館」が、生前「第二のふるさと」と話していた石巻市には「石ノ森萬画館」が建てられ、全国各地から大勢の人が訪れている。



代表作となった『サイボーグ009』
(株式会社石森プロ所蔵)

自問自答：
自分で問いを出して自分で答えること。

足を洗う：
今までの(よくない)仕事をきっぱりとやめること。

肩書き：
その人の職業や身分、地位など。

反響：
あることからの影響がほかのことにおよびること。

果敢：
決断力に富み物事を思いきつてするさま。

事象：
表面に現れた事から、現実の出来事。



及川 平治
(栗原市教育委員会提供)

及川平治は、明治八（一八七五）年、栗原郡若柳村（現在の栗原市若柳）に農家の次男として生まれました。十二歳の時に父親を亡くしたため、暮らしぶりは貧しく、小学校の授業料を支払えずやんでいました。勉学にはげみたいという思いは強かったのですが、残念ながら平治は小学校を中退せざるを得ませんでした。

平治は、勉強を続けたいという思いを、小学校の先生であった細川牧之助に話してみました。

すると先生は、
「私の自宅で勉強を続けてはどうだろうか。」
と声をかけてくださったのです。

再び勉強ができると喜んだ平治は、毎日のように細川先生のもとへ通いました。細川先生は学校の勤めを終えた後、夜に自宅に無償で勉強を教えました。そんな細川先生の親身になっての計らいに、平治はただただ感謝し、いつそう勉強にはげみました。細川先生は、平治の熱心さに心を打たれ、全力で支えました。

一年が過ぎたころ、細川先生は平治にこんな話をしました。

「君は、これからの新しい時代の教師として十分な素質がある。若柳の大目小学校で働いてはどうだろう。家計の支えにもなると思う。」

平治は、細川先生の思いがけない話に驚きつつも、目を輝かせながら大きくうなずきました。ここから平治の教育に携わる人生が始まったのです。平治、十六歳の春でした。

当時の大目小学校は若柳小学校の分教場になっていて、児童は一年から四年までの八十名ほどで、先生は二人か

三人でした。（すべての子どもたちが勉強にはげむようにしたい。そのために、私のすべてを注ぎたい。）平治はこの思いを胸に、教員の補助という立場で、子どもたちと親しく深くかわっていききました。幸いにもここに細川先生が勤めていました。そして先生から以前にもまして教育についての理論や技術などを熱心に学び、細川先生が驚くほど、すばらしい授業をするようになっていきました。細川先生の頭の中には平治の将来についての真剣な願いがありました。それは「平治にとって最もふさわしい仕事は教師の職だ。」「教師を養成する宮城県尋常師範学校に入学させたい。」ということでした。この師範学校は宮城県が授業料を無料にするなど、貧しい家庭の子どもを優遇する仕組みが整えられていて、教師を目指す平治の進学先として最適の学校だと考えたのです。

こうして十九歳の四月、平治は念願の宮城県尋常師範学校に入学し、卒業後は宮城県内で教師として働きしました。

三十三歳の時、平治は、「文部省中等教員検定試験」に合格し、兵庫県明石女子師範学校附属小学校（現在の神戸大学附属小学校）へ主事（校長）として赴任しました。

そのころ、ほとんどの子どもたちが、家の労働力として手伝いをしたり他の家に雇われて子守をしたりして、勉強をしたくても学校に通えませんでした。細川先生の教えを思い出しながら、平治は、その子どもたちのために出張授業を行うことにしたのです。同僚とともに町内各所に出向き、太鼓を鳴らし、笛を吹いて、子守をする子どもたちを集めて、青空のもと、授業を行いました。平治は、知識を与えるだけでなく、子どもたちの「勉強したい」という思いを大切にしたい教育をしていました。

そして、明石附属小学校においては、「子どもたちが自分から進んで学ぶ学校としました。子どもの多様性と個性を生かし、真理の探究法を授ける」という方針を立てました。この当時は、先生が子どもたちに知識を教えこむ授業が多かったのですが、平治は、「分団式動的教育法」という子どもたちが自ら学んでいくグループ学習や教え合い学習、体験学習等を取り入れました。この教育法は、今では一般的ですが、当時としては大変先進的な授業だったため、その反響は大きく、平治の授業を見学しようと全国各地から、年に一万人を超えるほどの参観者が訪れました。やってみたい、できるようにしたいという子どもたちの気持ちを満たしながら、試行錯誤



小学校を中退：
今の小学校とは異なる。尋常小学校（3〜4年）卒業後高等小学校（2〜4年）があった。

無償：
人のためにしたことに対して、見返りを求めないこと。無料。

素質：
生まれつきもっている性質や才能。

分教場：
本校の他に設けられた教場。現在は分校という。

多様：
いろいろな変化に富んでいる様子。

個性：
その人、またはその物だけがもっている、ほかとはちがった特別の性質。

真理：
正しい考え方や知識。

探究：
物事の本当の意味や、あり方、すがたをさぐり、明らかにしようとすること。

方針：
物事を行うときの目指す方向や、やり方。

先進：
進歩の段階が先に進んでいること。

反響：
あることからの影響が、ほかのことにおよぶこと。

試行錯誤：
失敗を繰り返しながら解決する方法を追求すること。

を繰り返させる平治の授業づくりには、参観者の多くが感心しました。

例えば、子どもたちがトンボをとりたいたいと思ったとき、まず手で捕まえようとし、でもなかなか捕まえられるません。そこで子どもたちは帽子をかぶせてとろうと考えました。しかし、この方法だとたまに捕まえられることはあっても、簡単ではありません。子どもたちは、何とか近づかないでとる方法はないか、と考え、竹の輪に帽子を引っかけてみましたが、風の通りが悪く、これもうまくいきませんでした。そして今度は、帽子の代わりに竹の輪に通しやすいうように網をつけてみたらどうだろうとやってみたら、とてもうまくいきました。トンボを捕るために、網を使えばよい、という知識だけを与えるのではなく、自分たちで試行錯誤して方法を考えさせながら、網を使うことのよさに気づかせたのでした。

また、ある日、平治は修身の時間に「病友を見舞う」という授業を行いました。

「病気で入院している小川君に、友達としてどういうことができるかな。」

と、平治は問いました。

「毎日見舞いに行ったらいい。」

「何かプレゼントしたらいい。」

平治は、子どもたちの考えにうなずきました。子どもたちの心に優しい気持ち広がっていく様子が、周りの参観者にも伝わりました。

「お見舞いの手紙を書くか、絵をかくか、あるいはおもしろいことをかいてなくさめることができるんじゃないの。」と話す、絵の好きな人は絵を、作文の上手な人は手紙をと、すべての子どもたちが進んで作業に取りかかりました。絵や作文等を小川君に届けた数日後、小川君は予想よりも早く回復し、学校に来ました。

「小川君の家族の看病はもちろんだが、みんなの友情の結果でもある。」

と平治が話すと、子どもたちから、

「喜びの歌を歌おうよ。」

との声があがり、子どもたちみんなで歌を歌って祝いました。

ところが、この授業の参観者からは、批判もありました。

「あなたの授業は、修身ではなく、図工、つづり方（作文）の授業ではないか。」

このような批判に対し平治は、

「子どもたちが友達を思い、自ら進んで考えた結果として、たまたま図工、つづり方になったにすぎないのです。大切なことは、小川君の手に渡ったときに小川君が喜んだか、はげまされたかということ。子どもたちの『真心』であり、それをどう考え、行動させるかです。」

ときっぱり説明しました。

平治の新しいやり方に批判的な人たちは少なくありませんでした。それでも平治は、授業への批判に対し、いつもまっすぐに前を見つめ、参観者たちに語りかけるのです。

「大事なことは、目の前の事実に基づいた教育をすることです。そして、子どもたち一人一人が社会の中で前向きに生きていけるように、自身自身の力で課題を解決する力をつけさせることです。」

平治には、恩師である細川先生の姿と、子どもたち一人一人の未来の姿がはつきりと見えていたのでした。

日本教育史に燦然とその名を残す偉大な教育者、及川平治の功績をたえ、大目小学校をはじめ、郷里の若柳、そして神戸大学附属小学校に胸像や顕彰碑等が設置されています。そこには、平治からほとばしり出た言葉が刻まれています。

新教育ノ幕ヲ開カン 凡テノ人ノ為ニ
凡テノ子供等ノ為ニ 私ノ凡テヲ捨テ、



及川先生初任地の碑（栗原市立大目小学校跡地）

修身：
今の道徳。

批判：
物事の良い悪いを一定の考え方や資料などにもとづいて判断し、のべること。

燦然：
きらきらと光りがやく様子。
顕彰碑：
個人をたたえて、広く知らせるために建てた石碑などのこと。

及川平治

明治八（一八七五年）年、栗原郡若柳村（現在の栗原市若柳）に生まれた。子どもの個性を大切にされた授業には、多くの参観者が訪れた。当時の教えこむ授業に疑問をもち、新しく「分団式動的教育法」（グループ学習や教え合い学習、体験学習等を取り入れた教育法）を主張するなど、その授業は先進的で、今日の教育の先取りといえるものであった。

小野寺 久幸 — 仏像修理一筋に歩んだ人生 —



小野寺 久幸
(小野寺家提供)

(このままここにいては、自分の夢はかなえられない。)

そう思った久幸は、二十歳の時、家族の反対を押し切って、それぞれの夢を抱いて親友と東京に行きました。ところが、現実にはあまくなかったのです。生活の貧しさや知り合いもいないさびしさは想像以上で、がまんできなくなつた親友はふるさとに帰ってしまいました。それでも久幸は夢はあきらめられず、一人でがんばろうとしました。「あのお、こいつは、なじよしたらいいんだべ。おしえてくだはりせ（これはどうしたらよいか、教えてください）。」「ははは、今なんて言ったのかな。なまり（方言）が強すぎて、意味が分からないよ。」東京の人に方言を笑われ、言葉が通じないのです。久幸は泣きたくなり、だれとも話をしなくなっていきました。それでもなお、歯を食いしばって一人東京に残りました。

日雇いの仕事をしながら、美術を学ぶ道を探し続ける生活が二年ほど続きました。ある時、久幸の一人旅の気持を知った人が仏像修理をしている職人を紹介してくれました。その人から「仏像修理の仕事を手伝ってほしい。」と頼まれ、久幸は喜んで引き受けました。しかし、仏像修理について何の知識や技術もありません。少しずつ教えてもらい、時にはどなられながらの作業が続きましたが、一日も早く仕事を覚えるよう必死に努力しました。少しでも知識を得ようと、仏像に関する本を夢中になって読んでいるうちに、気がつくとも朝になっていたこともたびたび

でした。また、忙しい中でひまを見つけては、寺社をめぐるって、独学で仏像の勉強をしました。

仏像についての知識が深まってくると、仏像修理の難しさだけでなくおもしろさも感じられるようになりました。それだけでなく、木で作られた仏像は壊れたり腐ったりしやすく、このままでは多くが失われてしまうことも分かりました。この仕事のやりがいや大切さを知った久幸は、

(私は、仏像修理の仕事を一生続けて、大切な文化財を守っていこう。)

そう心に決め、仕事に打ちこみました。そして、だれもが一目置くほどの優れた仏像修理の技術や深い知識を身につけました。そして四十六歳の時、その実力が認められて、美術院国宝修理所の所長に抜てきされたのです。

昭和六十三（一九八八）年、久幸は、奈良の東大寺南大門に立つ国宝金剛力士像（仁王像）の解体修理を頼まれました。鎌倉時代に天才仏師運慶、快慶らによって作られた仁王像は、高さ約八・四メートルもある日本最大級の木造彫刻です。あまりに大きすぎて、作られて八百年の間、一度も解体修理がされておらず、傷みがひどくてすぐにも修理が必要な状態でした。

解体前に、久幸は二体の仁王像を見上げてみました。門からちようど三歩のところまで立ち止まると、二体の視線が自分とぴたりと合い、鋭い目でにらんでくるのです。ものすごい迫力で、見る者を圧倒する力強さでした。久幸はその視線を受けながら、大きく身震いしました。

平成元（一九八九）年六月。久幸の指揮の下、総勢三十人のチームが、誰も経験したことのない難しい解体修理にいどみはじめま

小野寺久幸は、昭和四（一九二九）年、本吉郡小泉村（現在の気仙沼市）に

生まれました。幼いころから絵を描いたり木工作品を作ったりすることが好きで、絵描きになるのが夢でした。時間をみつけては、絵を描いたり木工作品作りをしたりしていました。

国民学校を卒業すると、近くの造船所につとめて木造船の造り方を一から学びました。でも、美術の勉強がしたいという気持ちをおさえることができませんでした。

国民学校：戦時中の義務教育を行う学校の名称。初等教育六年、中等教育二年。

日雇い：一日このやくそく働くこと。

一途：ただ一つのことを追い求め、他のことを考えない様子。

独学：学校に行ったり先生に習ったりしないで、一人で勉強すること。

一目置く：自分よりすぐれた人とみとめて尊敬し、一歩下がって接する。

美術院 国宝修理所：国や地方自治体などの依頼を受けて、国宝、重要文化財及び古文化財の修理を行ったり、修理技師を養成したりして、日本の文化財保存事業を実施している。

抜てき：大勢の中から能力のある人を選び出して重要な役目につけること。

国宝 東大寺南大門金剛力士像：「金剛力士」とは、「金剛杵（こんごうしよ）」、「硬いダイヤモンド」を砕ける武器を手にした仏教の守り神のこと。阿形と吽形の二体でペアになっており、「仁王像」とも呼ばれる。鎌倉時代に運慶が、快慶ら十八人の職人を率いて六十九日で作上げたといわれている。



東大寺南大門 (写真提供：奈良市観光協会)



東大寺南大門金剛力士像(左：阿形像 右：吽形像)
(写真：公益財団法人美術院所蔵)

した。鎌倉時代に作ったときの書物（設計書）などはなく、手探りで解体してみると部品は一体で約三千もあったのです。国宝である仁王像には、傷一つつけることも許されません。一つ一つを修理して元どりの姿にもどすことは、想像以上に大変なことでした。

責任者である久幸の仕事は、大勢の人達をまとめ、修理方法や手順を決め、必要な材料などをそろえ、修理の進み具合を見て必要な指示を出すことでした。すべての責任が、久幸の肩にかかっていたのです。仏像修理は、できるだけ作られた当時の材料を使って、当時の作り方に近い形で直す必要があります。きれいにするのはなく、今あるものをできるだけ残すことが、歴史を保存することになるからです。

ある時、仁王像の右手の薬指の欠けた部分を修理しようとする、なんと木目のうず巻き模様が指もんに見えるように生かされていたのです。

「これはすごい。さすが運慶ですね。」

「本当だな。でも、困った。これと同じ種類の木は、もう当時の産地には生えていないんだ。」

「どうしたらいいでしょうか。」

「なんとしても、同じような木目をもつ木を探し出すしかない。あきらめなな。」

作業現場には、修理のために全国から何百種類という木材が集められていました。地形や気候を調べ、より近い産地を探し回り、その一本一本の特性や木目を見ながら、修理に使える木材を必死に探し出したのです。そして、たくさん時間と労力をついやして、ようやくぴったりの木材を見つけ出し、みごとに指を修理しました。

また、八百年間部品をつないでいたくぎ類も、新しいものと交換することが必要でした。ところが、当時の技術は現代には伝わっていません。探してみると、同じ製法を受けつぐ刀鍛冶は、日本にたった一人しかいないことが分かりました。久幸は、広島に住む刀鍛冶の家を探しあて、八百年前と同じくぎを作ってくれるよう頭を下げて頼みこみました。

このように、作業は多くの困難や苦勞の連続で、頭をかかえることもしばしばでした。しかし、久幸はどんな時も強い気持ちであきらめずに取り組み、皆を引っばりました。そこには、運慶たちの技術のすばらしさに触れて自分の技術を高めたいという、職人としての強い願いもあったのです。だから、久幸はいつもこう思っていました。

（鎌倉時代の仏師たちの知恵と技術は、本当にすごい。私も負けられないぞ。）

解体修理から、五年もの年月が流れました。久幸たちが、技術と知識のすべてをこめて修理した仁王像は、無事に元の場所に戻されました。久幸は最後の確認をするために、解体修理前にしたように、門から三步のところまで立ち止まり、仁王像を見上げました。すると、二体の視線は、ぴたりと久幸をとらえて、にらみつけてきたのです。

（運慶さん、快慶さん、やり遂げましたよ……。）

平成五（一九九三）年、十一月、仁王像の落慶法要（完成を祝う式典）が、東大寺で盛大に行われました。その中で、人々の注目は「大仏師」の称号の授与式に集まりました。大仏師とは、もともとは奈良時代に仏師たちをしたがえて大規模な仏像制作に当たった責任者に与えられたもので、仁王像を作った運慶と快慶も授与された名誉ある称号です。久幸への授与は、東大寺としては江戸時代以来二百六十年ぶりという快挙だったのです。多くの人々の拍手と歓声の中、大仏師の称号を受けた久幸の顔は、輝いていました。

久幸は、四十五年にわたって三千体以上の仏像を修理し、日本の仏教美術の保存に努めるとともに、多くの優れた修理技師の育成にも力をつくしたのです。ふるさと気仙沼市にある峰仙寺（白雲山仏国峰仙禅寺）の山門には、久幸の彫った見事な仁王像が安置されており、今も訪れる人を迎えてくれます。



峰仙寺山門仁王像
(気仙沼市)

小野寺 久幸

小野寺 久幸は、昭和四（一九二九）年、宮城県本吉郡小泉村（現在の気仙沼市）に生まれた。幼い頃から美術に興味をもち、上京して仏像修理師となった。奈良東大寺の仁王像の修理を見事に成し遂げて、「大仏師」の称号を授かった。生涯に国宝をはじめ三千体以上の仏像の保存修理を手がけた。

刀鍛冶：
金属を熱して打ち
きたえ、刀などを
つくる職人。
頭をかかえる：
どうしていいか分
からずじつと考え
こむ様子。

快挙：
他からほめられる
ようなすばらしい
こと。
安置：
大切にすえ置くこ
と。

加藤 きん | 国境を越えて命を救う |



加藤 きん
(登米市歴史博物館提供)

「私がこの職に就いたのは明治三十七（一九〇四）年で、今までに社会や人に対して、これと言って特別の働きもせず、功績も残しませんでした。ただ、赤十字伝統の博愛の精神にしたがってきただけです。看護婦として当然の務めを四十年間行ってきた私に、このような最高の栄誉が与えられたことは、先輩方のすばらしい働きの賜物で、この光栄は私事にすべきではなく、本当に心苦しく思っています。今、何千万の看護婦さんたちが、毎日困窮と戦いながら事業に身をささげておられますが、そのような人たちこそ、この栄誉を担われる人々です。」

昭和二十八（一九五三）年十月、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した加藤さんは、受賞の喜びをこのように話しました。

大正三（一九一四）年、きんは救護看護婦養成所を卒業すると、日本赤十字社中央病院に勤務しました。このころ、ヨーロッパの国々では第一次世界大戦が始まり、非常にごんごんな戦いが行われていました。多くの死者や負傷者が出たことで、日本はフランスに看護班を派遣することになり、きんも招集されました。日露戦争などで救護活動をした経験豊かな看護婦や医者その他、優秀な看護婦が新たに選ばれました。きんは、選ばれたことをほこりに思い、他を愛し身をぎせいにしても弱者を助けるといふ日本赤十字社の精神を胸に、パリへ向かいました。

高い技術と経験をみとめられたきんたちが派遣されたフランスの日本赤十字病院は、戦争で傷ついた重症患者だけが運ばれてくる病院に指定されました。しかし、日本では、技術も経験も認められていた日赤看護班も、その実績はほとんど知られていませんでした。日本の病院に送られると聞くと、フランスの兵士たちはひどく失望したそうです。また、すぐに活動できるようにと船の中で覚えたフランス語も、地方なまりのある兵士たちには全く通じませんでした。そのため、目の前で血まみれになった患者が必死に痛みを訴えていても、どこがどのように痛いのが分からず、それに応じることができませんでした。「痛みも分かってくれない看護婦なんて話にならない。さわらないでくれ。」

次第に、『日本人は信用できない。』と言わんばかりに、治療をことわるフランス兵も出てきました。傷ついた人を助け、多くの命を救うためにフランスまでやって来たきんたちは、なすすべもなく立ちつくしました。「このままでいいのだろうか。自分たちがやるべきことは何なのだろう。」

きんたちは、血やほこりまみれになって戦場から運ばれてきた兵士たちに、一枚一枚手作りで日本の着物を縫い始めました。また、傷口の消毒やシーツ交かんも、毎日行いました。フランス人スタッフの力を借りて、患者に懸命に話しかけました。

「どこか痛むところはありますか。」
「もうすぐ、家族のもとへ帰れますからね。」

きんは、患者の手をにぎり、なれないフランス語で積極的に声をかけました。きんたちの心のこもった看護は、かこくな戦場で傷ついた兵士たちの心をとらえ始めました。日赤病院の技術も少しずつ認められました。中でも包帯のまき方はどんなに動いてもゆるまないということ、他の病院の医師たちも見学に来るほどでした。日赤病院は、次第に親切でしかも技術にすぐれている病院であると評判になり、傷ついた兵士たちの命のとりでとして、その役割を果たしていききました。

戦況は日に日に厳しくなりました。頭から背中にかけて砲弾のかけらがつきささった兵士、全身にやけどを負った兵士など、機関銃や毒ガスなどの新兵器の投入は、人間を人間と思えない姿に変えました。運びこまれる患者の数も、一か月に四千人以上となりました。

「人命が失われるのは、戦争災害の中で最も恐ろしいこと。最小限にとどめるために、わたしたちが力をつく

功績：世の中のためになすべく働いた博愛：すべての人を平等に愛すること。看護婦：今の看護師。困窮：苦しみやまずしさ。

フローレンス・ナイチンゲール記章：看護事業に一生懸命に働いた人におくられる、世界的な賞。

第一次世界大戦：大正三（一九一四）年から大正七（一九一八）年にかけて戦われた、人類史上最初の世界大戦。

派遣：役目を与え、ほかの場所に行かせること。

招集：多くの人をまねいて集めること。

日露戦争：明治三十七（一九〇四）年から明治三十八（一九〇五）年にかけて日本とロシアがおこなった戦争。

懸命：力いっぱい努力する様子。

かこく：厳しすぎること。ひごまき：包帯。

とりで：大切なものを守るためにつくった建物。

砲弾：大砲のため。

さなくては。」

きんたちは、日夜、寝る間もなく、看護を行いました。ある時、胸に砲弾の破片がささり、心臓にまで傷を受けた患者が運ばれて来ました。遠く離れた両親の到着まで、命がもつかどうか分からない危険な状況です。

「せめて一目、家族に……。」

看護婦たちは、家族が到着する九時間もの間交代で体を押さえつけ、止血を行い、その命をつなぎとめました。

「この患者は感染症のおそれがある。危険だ。急ぐぞ。」

手術は成功しても、細菌による感染症で命を落とす兵士も少なくありませんでした。化膿がひどく、助かるみこみのない兵士が運ばれると、どんなに忙しい中でも、消毒したシートで兵士の身をくるみ、日に3回はシートを交換し、傷口を常に消毒しました。日赤病院の懸命な看護は、失いかけた命をたくさん救いました。

戦況が悪化した大正四（一九一五）年の秋、救護班が危険になると判断した東京の日本赤十字本社は、「パリから撤退し、すぐに帰国せよ。」という命令を下しました。

「自分たちを必要としている患者がこんなにたくさんいるのに……。」救護班は本社に活動期間の延長を強く訴えました。フランス将兵たちの強い希望もあり、本社や国に願いが受け入れられ、その後も献身的な看護を続けました。

しかし、はげしい戦火は、パリ市街にまでおよぶようになりました。日赤病院からわずかのところにも攻撃を受け、きんたちの命も危ない状況でした。次々に運び込まれる重傷者。重傷者であふれ返る病室。大量に持ちこんだ薬品もすでに底をつきました。働き通しの看護婦たちの中には、たおれる者も出てきました。日赤病院は活動の限界に追いこまれ、とうとう、パリの病院を離れ、日本に帰ることになりました。

大正五（一九一六）年七月、最後まで守れなかった傷病兵たち、共に働いてきた病院のスタッフを残し、救護班は帰国のためパリの駅に着きました。すると、その時、倒れそうになりながらもゆっくりと救護班に向かって来る男たちが見えました。きんたちが救護をした兵士たちが見送りに来てくれたのです。

「ありがとうございます。……。」

そう繰り返す患者たちに、ただただ、手をにぎり返すことしかできませんでした。

きんは、帰国後もシベリアに渡り、傷ついた兵士を救護しました。昭和十二（一九三七）年の日中戦争の時

には、看護婦長として赤十字病院船に乗り日本と中国の間を十回も往復して、多くの尊い命を救いました。日本赤十字社を退職してからは、ふるさとの宮城県佐沼高等学校の養護教員として働き、親のように生徒を大切に思い、高校生の心身の健康を支えました。そして、昭和二十八（一九五三）年には、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞したのです。

加藤 きん

加藤 きんは、明治二十三（一八九〇）年、現在の登米市迫町に生まれた。第一次世界大戦やシベリア出兵の際、従軍看護婦として戦地に赴き、傷ついた兵士の救護にあたった。日中戦争の際は、病院船に乗り、日本と中国の間を十往復し、多くの尊い命を救った。この功績が認められ、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した。



エタンプにて 1915年10月23日
親愛なるマドモアゼル
エタンプでのあなたとのよき思い出をしのびつつ、あなたとの再会を願っております。そしてわたしの最大の感謝の気持ちをどうか受け取ってください。

リュ・ブリアン



フランスの兵士からのはがき
(登米市歴史博物館所蔵)

化膿…
膿をもつこと。

撤退…
軍隊などが陣地から離れること。

献身的…
自分を犠牲にして人のために尽くす様子。

マドモアゼル…
フランス語で独身の女性を表わす言葉。
「お嬢さん」

日中戦争…
昭和十二（一九三七年）から昭和二十（一九四五）年まで、おもに中国大陸で戦われた日本と中国との全面戦争。

従軍…
軍隊につき従って戦地に行くこと。

ナイチンゲール…
イギリスの看護師、社会実業家、統計学者、看護教育者。近代看護教育の母。病院建築でも才能を発揮した。

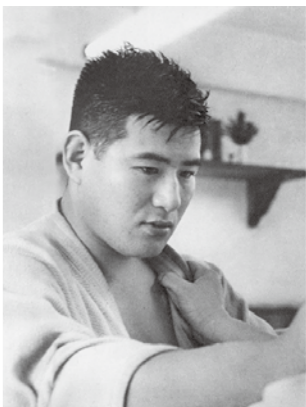


先人が守り、私たちが受け継いでい

る自然環境かんきょう（伊豆沼の白鳥：栗原市）

神永 昭夫

東京オリンピックの銀メダリスト

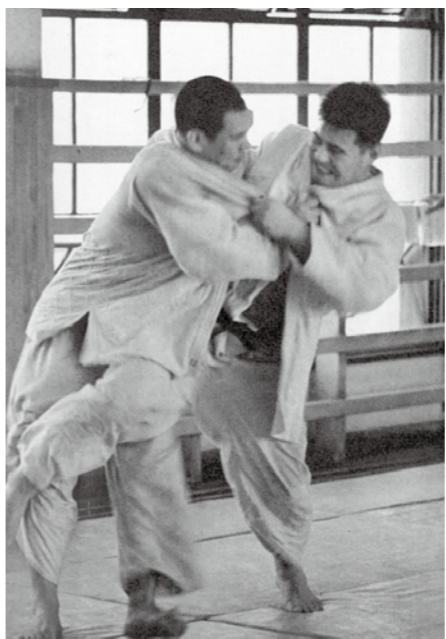


神永 昭夫 (現バナソニック)
(出典:ナショナル 販売店向け広報誌)

昭和三十九(一九六四)年十月二十三日。初めて日本で開かれたオリンピック。国技とも言える柔道の無差別級の決勝戦が行われました。決勝戦に臨んだのは日本代表の神永昭夫選手、そしてオランダ代表のアントン・ヘーシンク選手。金メダルへの国民の大きな期待が寄せられた一戦が始まりました。

昭夫が柔道を始めたきっかけは、高校一年生、当時はやっていた小説「姿三四郎」の大技『山嵐』にあこがれを抱いたからです。当時の日本は戦争に負け、柔道や剣道といった武道は学校で教えることが禁止されていました。ようやく武道の練習が解禁されたのが、ちょうどそのころでした。やっと始めた柔道も、華やかな投げ技は教えてもらえず、来る日も来る日も受け身の練習ばかりです。考えていた柔道とは違って、気持ちが悪くじけそうになったこともありましたが、何度か受け身の練習を重ね、受け身だけの練習から技の練習が許されたとき、基本が何より大事だということが分かりました。それから、練習の鬼となり、高校三年生になると宮城県大会で優勝するほどの選手となっていました。

その年、東京にある柔道の聖地、講道館で行われた紅白試合に腕試しのつもりで出場したところ、昭夫は次々と十九人も選手を破りました。これは講道館でも今までになかった快挙でした。この活躍に講道館は、初段から一つ飛びこえて三段に昭夫を昇段させました。翌日、大学での練習に参加させてもらい



母校で熱心に練習をする昭夫(右側)
(出典:ナショナル(現バナソニック)販売店向け広報誌)

ました。ところが、思うように技がかからず、昭夫は床が上か下か分からないほどに投げられ、ぼう然としてしまいました。昭夫は、「(上には上がいるものだ。ぜひ大学で腕をみがきたい。もっと強くなりたい。)」と、思うようになりました。後に、昭夫は、「勝負はいつでも負けから始まる。自分の弱さを知ったときから技の工夫が始まるんだ。」と語り、負けることを大切にするようになりました。

昭夫は九人兄弟の六番目で、東京の大学に進学することは、厳しい状況にありました。そこで、両親に学費のことで迷惑をかけないようにと考え、福祉施設に住みこみのアルバイトをしながら大学に通いました。こうして大学では勉強と柔道を両立し、施設では、子どもたちの世話をするという生活を四年間続けました。また、わずかな時間でも無駄にしないよう、電車ではつり革などにつかまらず、爪先立ちをしたり、手すりを利用したりして、体を鍛え続けました。そして、毎日こつこつと練習を重ね、柔道に打ちこんだ昭夫は、全日本学生選手権で個人・団体の両方で二度の優勝をするまでの選手になりました。

卒業して社会人になると、一日の仕事を終えたあとで練習します。そこで、昭夫は、誰よりも早く会社に出社して、仕事をきちんとして終らせてから練習に取り組みうと考えました。昭夫の仕事ぶりを見た同僚から「練習があるから、早く仕事を切り上げるといいよ。」と言われることがしばしばありました。しかし、決して途中で仕事を投げ出すことはありませんでした。仕事を終わるとすぐに、母校の大学に向かい、一心に練習に打ちこみました。

その努力が報われ、昭和三十五(一九六〇)年、三十六(一九六一)年、東京オリンピックの行われる昭和三十九(一九六四)年の全日本柔道選手権大会でみごと優勝を果たしました。

そして、オリンピック柔道無差別級の代表選手に選ばれたのです。柔道が正式な競技として加わった初めてのオリンピックです。昭



東京オリンピック ヘーシンク戦に臨む昭夫(右側)
(出典「神永昭夫の奇跡-ガンバレ柔道ニッポン-」全日本実業柔道連盟)

無差別級：体重による制限のない階級。

姿三四郎：富田常雄が書いた長編小説。柔道家として活躍する主人公が様々な対戦者との戦いを描いた。当時の小中学生は主人公が完成させた必殺技「山嵐」にあこがれた。

受け身：投げられたり倒されたりした時、けがをしないようにする方法。

ぼう然：あきれたり、びっくりしたりして、ぼんやりしてしまう様子。

同僚 職場の人。

夫は決勝戦に進出しました。決勝の相手は、オランダ代表のアントン・ヘーシンク選手。身長二メートル、体重百二十キログラムの巨漢です。昭夫との身長差は二十二センチメートル。昭夫と組み合うと頭一つ分の体格差がありました。会場につめかけた大勢の観客やテレビで観戦していた多くの人々は、(どんな大男が相手でも、昭夫ならきつとあざやかな一本勝ちで金メダルを取るに違いない。)と信じて、熱い声援を送りました。

最初のチャンスは昭夫にありました。するどい投げ技にたおれたヘーシンク選手を押さえこみました。しかし、ヘーシンク選手は場外にのがれ、試合は組み直すことになりました。一進一退の激しい攻防は九分も続きました。昭夫が技をかけに行ったところをヘーシンク選手に返され、反対に押さえこまれたのです。会場も監督やコーチも昭夫に大きな声援を送りました。必死に技を返そうともがく昭夫。それを上からしっかりと押さえつけるヘーシンク選手。無情にも三十秒がたち、日本中の応援もむなしく、一本負けとなりました。

昭夫は正座をしながら無言でゆっくりと乱れた柔道着を直し、ヘーシンク選手と向き合い「礼」をして、試合場を後にしました。悔しそうに涙を流す監督やコーチたちとは対照的に、昭夫は涙を見せることもなく、むしろ表情は晴れ晴れとしていました。

その表彰式です。表彰台の上で、昭夫はヘーシンク選手に握手を求めたのです。その表情に迷いはなく、笑顔で勝者に手を差し出しました。ヘーシンク選手も昭夫の手を無言でしっかりと握り返し、互いに見つめ合いました。

試合の翌日、昭夫はいつもと変わらず、誰よりも早く出勤して仕



東京オリンピックの表彰台で
(出典「神永昭夫の奇跡-ガンバレ柔道ニッポン-」全日本実業柔道連盟)

事をしていました。その姿は、まるでオリンピックの激戦などなかったかのようです。おどろいた上司は、

「今日くらい会社を休んでもよかったのではないか。」

と声をかけました。すると昭夫は、

「会社があるから柔道ができるんです。皆さんに迷惑はかけられません。」

と言って静かに机に向かいました。

昭夫は、選手を引退すると、会社員としても力を発揮し、赤字部門を黒字に変えるなどの活躍をして、会社に貢献しました。

その一方で、自分を育ててくれた柔道の発展にも力をつくしました。大学や全日本の監督を任せられ、後輩の育成にも力を注ぎ、多くの優秀な選手や金メダリストを育てました。

昭夫はいつも、「人並みにやっていただけでは、人並みにしかねない。」と部下や後輩に話しました。そして、自分自身もその言葉どおりに行動しました。後輩や部下などの多くの人々が昭夫の生き方にあこがれ、昭夫のように生きたいと思いました。迷ったり困ったりしたとき、「昭夫先輩だったらどうするのだろう。」と考えたと言います。

ヘーシンク選手と昭夫の友情はその後も国境を越えて続き、互いに終生のライバルとたたえ合いました。

神永昭夫

昭和十一(一九三六)年仙台市に生まれた。昭和三十九(一九六四)年に行われた東京オリンピックで柔道の無差別級に出場し、銀メダルを獲得した。昭和四十一(一九六六)年に選手を引退し、全日本柔道連盟の強化コーチやオリンピックのコーチ、監督として金メダリストを多数育てた。会社員としても製鉄会社の部長職の重職を任せられた。

巨漢：
体が特別大きい男。大男。

九分も続きました(試合時間)：
現在は五分の試合時間で行われているが、当時は十五分の試合時間だった。

一進一退：
進んだかと思うとあともどりすること。

赤字部門：
会社の利益を出せない部門。

黒字：
会社の利益。

人並み：
世間いっばんの人と同じ程度である様子。

終生：
死ぬまでずっと。



後藤 桃水
(多田龍吉氏提供)

松島の サーヨー
瑞巖寺ほどの
寺もない トーエー
アレワエーエー エント ソーリヤー
大漁だエ

みなさんはこの唄を知っていますか。

この唄は「斎太郎節」という宮城県みやぎけんの「民謡」の一節いちせつです。民謡とはその土地の生活の唄です。「斎太郎節」は松島湾まつしまわんの漁師りしやうしが大漁たいりやうのときに歌った唄で、後藤桃水が「大漁唄込み」としてまとめ、全国的に有名になりました。桃水は郷土きやうとに伝わる唄を掘り起こし、唄い手を育てました。また、初めて民謡と名のついた大会を開き、民謡を広める活動をしました。その功績こうせきをたたえ、「民謡育ての親」と呼ばれています。

桃水は明治十三（一八八〇）年、桃生郡大塚濱もものうぐんおつかはま（現在の東松島市大塚）に生まれました。父は野蒜村のびるむらの村長を務めるなど、由緒正しい家の長男として生まれました。きびしい父の教えもあり、桃水は幼いころから勉強にはげみました。小学校の時は歌うことが苦手で、音楽に興味はありませんでした。

中学校に進学したある日、温泉旅館おんせんで虚無僧こむそが奏かなでる尺八しゃはちの音色を聴きました。風の音のような心地よさ、底から響くような低音。桃水はすっかり聴き入ってしまいました。そこで桃水は中学校の勉強をしながら、尺

八で有名な先生に弟子入りし、練習を始めました。

桃水は第二高等学校（現在の東北大学）に進学し、父が希望する医学部いがくぶに入りました。ところが、このころの桃水は医学の勉強ではなく尺八の練習に没頭し、日本全国にある有名な曲を演奏できるまでになっていました。そこで、桃水は尺八を本格的に勉強するため高等学校をやめ、東京に行くことにしました。

父は桃水に医者いしやの道を志してほしいという願いをもっていましたので、桃水が唄の道に進むことに猛反対しました。そしてとうとう、桃水を家から追い出してしまいました。その一方で、桃水の尺八の腕はめきめき上達し、弟子を持つまでになりました。また、尺八の練習をするうちに郷土に伝わる唄に興味をもつようになりました。しかし、当時、このような唄は「百姓唄」、「田舎唄」といわれ、その土地に住む人以外はだれも知りませんでした。

「日本にはふるさとの風景やそこに住む人の思いを歌ったすばらしい唄がまだたくさんあるはずだ。」
と思い、日本の各地を歩いて回ることにしました。

桃水は人里離れた山村や海辺の町もくまなく歩きました。食事も十分にとらず、ひげものびぼうだい。はいっていた草履ぞうりはやぶけ、足も血だらけ。そんな桃水の様子を見て逃げ出す人もいました。それでも、一軒、一軒立ちよっては声をかけ、唄にこめられた意味や背景まで熱心に調べました。桃水の情熱に町や村の人々も心を動かされ、いろいろな唄を調べたり、唄い手を紹介したりしてくれるようになりました。桃水は村の人たちと話していくうちに

「みんなが唄を口ずさみながら楽しそうに勉強したり、仕事をしたりしている。なぜだろう……。」
と思うようになりました。

桃水は東京にもどり、ふるさとの唄のよさを知ってもらうために大会を開くことを考えました。しかし、「百

功績…
世の中のために
な、すぐれた働き。

虚無僧…
尺八を吹きながら、
諸国を修行して歩
く僧。

尺八…
日本の木管楽器の
一種長さが一尺八
寸（約五十四センチ）
であることに
由来する。竹の根
元でできている。
歌口に息を吹き付
けて音を出す。

姓唄」「田舎唄」大会では人は集まってはきません。そこで、何かいい名前はないかと考えました。そのとき、うら庭からセミの鳴き声が聞こえてきました。「ミンヨウミンヨウ」というセミの鳴き声を聞き、桃水はひらめきました。

「そうだ、民謡だ。民謡だ。」

大正九（一九二〇）年、東京で一回目の「全国民謡大会」が盛大に開催されました。この大会には三千人もの人々が集まったことから、全国に「民謡」の名が広まる契機となりました。桃水は「日本民謡道場」の看板をかかげ、さらに弟子の育成にも力を入れました。

関東大震災で桃水の住居も大きな被害を受けたことから、ふるさと大塚に移り住むことにしました。これを機に、東北に伝わる民謡の開拓と民謡の唄い手の育成にさらに力を入れました。その中でも、自分のふるさと唄「斎太郎節」の練習は厳しいものでした。

ある日の練習で弟子が「斎太郎節」を歌い終わったとき、桃水はふと、ある村を訪れた時の情景が目に浮かんできました。これまで見たことのない山と海の風景。右手にはきれいに紅葉した山、左手にはいろいろな表情を見せる海の波の動き……。

しばらくして重い口を開きました。

「君は松島のことを知っているのか。私についてきなさい。」

桃水と弟子は大塚の道場を出て、海に向かって歩きました。着いたのは松島湾が一望できる岬でした。

「ここで歌ってみなさい。」

弟子は（何でだろう）と思いました。しばらく海を見つめると、はっと何



松島の風景

かに気付いたのです。そして、心をこめて歌い始めました。桃水はその歌声をだまって聴いていました。

日本は終戦を迎え、国民は戦争に負け、希望を失っていました。桃水はこのようなときこそ、民謡を通じて国民に喜びと希望を与えようと考えました。「NHKのど自慢大会」では弟子が入賞するようになり、このとき唄った「さんさ時雨」、「大漁唄込み」は現在でも多くの人々に愛され、歌い継がれています。人々はふるさとを思う民謡のよさを知り、あらゆる場で民謡を唄うようになりました。民謡は確実に人々の心に浸透していったのです。

さらに、仙台の公会堂において「日本全国民謡大会」が開催され、東北は民謡の宝庫であることが全国に知られたることになりました。

民謡で日本国民を元気にしたい、ふるさとのよさを伝えたいという願いを持ち続けた桃水は八十歳でその生涯を閉じました。桃水の功績をたたえ、昭和二十四（一九四九）年、ふるさとの大塚には民謡碑が建てられ、今も語り継がれています。



大塚（東松島市）に建てられた民謡碑

後藤 桃水

後藤 桃水は、明治十三（一八八〇）年、桃生郡大塚濱（現在の東松島市）で生まれた。本名は正三郎で、若いころから尺八の演奏に関心をもち、修行に励んだ。日本各地の郷土に伝わる唄を掘り起こし、唄い手を育てた。桃水の作品の中では、「野蒜甚句」の作詞、作曲、「八戸小唄」の作曲、「大漁歌い込み」の創作などが有名。桃水の暮らした大塚には、現在も民謡碑が残されている。

契機：
きっかけ。

関東大震災：
大正十二（一九二
三）年九月一日
十一時五十八分こ
ろ関東地方で起
こった大地震。



小室 達
(しばたの郷土館提供)

も忘れて、板を彫り続けました。

(どのように彫ったら、きれいに仕上がって、見た人が喜ぶだろうか。)
何枚か彫るごとに友達に意見を求めた結果、自分でも満足のいくものができあがり
ました。

運動会当日、青空の下で三十か国の旗が、風で揺れていました。それらを笑顔で
見上げる人たちの姿を見て、達は、胸が熱くなりました。

このような少年時代の経験から、彫刻家を目指した達は、東京美術学校（現在
の東京芸術大学）の彫刻科に進み、一生懸命研究にはげみました。努力を重ねた
達は、在学中に国内で有名な帝展で入選するほどの実力を身につけました。卒業後
も帝展で何度も入選し、日本を代表する彫刻家になった達は、東京のアトリエで作
品作りに打ちこみました。

昭和八（一九三三）年、三十五歳になった達のもとにふるさとの友達から、興味
深い話が伝わってきました。それは、宮城県青年団が、不景気や不作で苦しんでい



仙台城址にある伊達政宗公騎馬像

万国旗…
世界の国々の国旗。

版木…
版画などに使う、
文字や絵を彫りつ
ける木の板。

帝展…
大正時代の帝国美
術院の展覧会。

アトリエ…
芸術家が、作品
制作をする作業場。

不景気…
社会全体の経済活
動の状態がよくな
らないうち。

仙台城址…
仙台城があった跡。

文献…
研究などの参考
資料となる文書や
書物。

騎馬像…
馬に乗っている像。

一生一代…
一生に二度とない
ような重大なこと。

一尺…
約三十センチメー
トル。
一寸…
約三センチメー
トル。

瑞巖寺…
伊達家の先祖代々
のお墓があるところ
で政宗公の木像
がある。

瑞鳳殿…
伊達政宗公が祭ら
れている建物で政
宗公の木像がある。

骨格…
からだの骨組み。

る県民を元気にするために、仙台城址に伊達政宗公の銅像を建てようという話でいた。ふるさとのことをなつかしんでいた達の頭の中に、もし自分に制作の依頼がきたら、どんな銅像を作るだろうという思いがうかんできました。

達は、さっそく政宗公がどのような人物だったのか調べ始めました。古い文献をいろいろと読んでいるうちに、武将として知られている政宗公は、戦いだけでなく、政治や文化の面でも優れた才能を発揮していたことを知りました。「仙台藩（宮城県）は、政宗公が作り始めた。銅像は、よろいかぶとを身につけ馬に乗った政宗公が、これから新しい街を作るといふ希望に胸をふくらませて、できたばかりの仙台城に入城する姿、騎馬像こそが県民を元気にさせるのではないか。」

と考えました。

六月、青年団から、銅像の制作者に決定したという知らせが届きました。達は、今まで取り組んできた帝展への出品をどうするか悩みましたが、

（県民を元気にする作品を作るため、一生一代の仕事として、銅像作りに専念しよう。）と心に決めました。

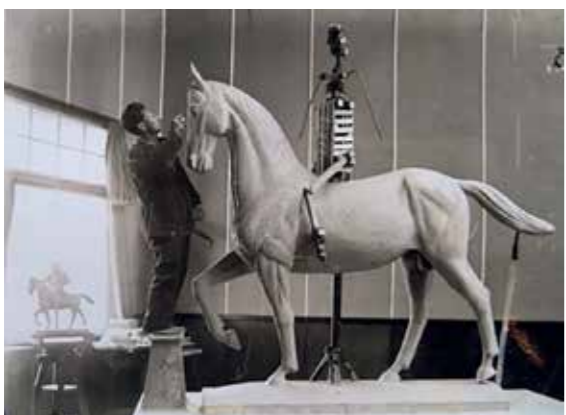
その後の青年団との話合いで、銅像は、達が考えていた騎馬像になり、高さは、十一尺四寸（約三・四メートル）と決まりました。

達は、作品の参考にするため、瑞巖寺（松島）や瑞鳳殿（仙台市）に足を運び、江戸時代の政宗公の木像や絵などを調べました。また、馬の研究も行いました。本を何冊も買い集め、骨格や筋肉のことなどについて熱心に調べました。時には、実際に馬を見に行き動きを観察したり、馬の専門家に話を聞いたりしました。

研究を終えた達は、

「まず、八尺五寸（約二・五メートル）の等身大の試作品を作ろう。はじめは、骨格作り、次にねん土をつけて政宗公と馬の形作りだ。」

と、これから始まる作業について確認しました。達は、実物と同じ大きさの像で



骨格にねん土を付け試作品を作る
(写真：しばたの郷土館提供)

細かい部分まで仕上げ、それを基に銅像を作れば、よりよい作品ができるだろうと考えたのです。

骨格作りが終わり、今後のことを考えていた達は、「私は、政宗公の銅像を作るために彫刻家になったような気がする。」とつぶやき、試作品作りを続けました。

達は、日本を代表する彫刻家になっていましたが、制作の途中で各分野の専門家に意見を求めることにしました。馬の専門家からは、「足の関節部分は、すべて直したほうがいい。」と言われ、

よろいかぶとの専門家からは、「刀の位置やかぶとの三日月のつけ方を直したほうがいい。馬具もずいぶん直すところがある。」と言われました。

(馬や馬具については、本や観察でたくさん研究してきたのだが……。)
自ら意見を求めたとはいえ、修正点を指摘された時には、作業しようとして手にした道具が、いつもより重く感じられました。

達は、その後も様々な人に見てもらいました。厳しい指摘をされ、気持ちが落ちこむ時もありましたが、達の周りには、いつも相談に乗ってくれる人、はげましてくる人がいました。達は、心に決めたことを達成するため、さらに修正を重ねました。

「骨格作りから七か月。やっと試作品が完成した。これを基に、銅像の骨格を作り、もう一度、ねん土で形作りだ。」今度は、自分の身長より二メートル近くも高い像です。作業が思ったように進まず、夜遅くなることや体調がすぐれない時もありました。

(試作品より、よくなっている気がする。)
達は、政宗公の騎馬像を笑顔で見上げる人たちの姿を想像しながら、手を止めることなく制作に打ちこみました。

銅像の骨格作りから三か月、ようやくねん土で作った像ができあがりました。

「次は、この像に石こうをつけて、銅像の型作りだ。」

昭和十(一九三五)年一月末、試作品の骨格作りから一年二か月。アトリエから鑄造所に運ばれていた銅像の型に、赤く輝く溶かされた金属が流し込まれました。

その様子を見ていた達の目からは、今にも涙があふれそうになりました。

そして、銅像の制作者に決まってから約二年が過ぎた五月。ついに伊達政宗公騎馬像が完成しました。仙台城址に向かうため、白い布が巻かれた重さ四・五トンの騎馬像は、トラクターにつけられた荷台に乗せられ、東京を出発しました。

達が生まれ育った槻木町(現在の柴田町槻木)では、ふるさとの人たちから政宗公にゆかりのある歌『さんさ時雨』の大合唱で迎えられました。沿道を埋め尽くす人々の姿を見た達の目には、熱いものがこみ上げてきました。

五月二十三日、伊達政宗公騎馬像の除幕式の日。政宗公の雄姿を一目見ようと県内外から、約千人の人たちが集まりました。銅像にかけられた幕が取られ、達の作品が披露されると、仙台城址全体を覆うような割れんばかりの拍手の音が鳴り響きました。

達は、政宗公の騎馬像を笑顔で見上げるたくさんの人の姿をじつと見つめていました。



専門家に見てもらった試作品
(写真：しばたの郷土館提供)



鑄造所で完成した騎馬像
(写真：しばたの郷土館提供)

小室 達

小室 達は、明治三十二(一八九九)年に槻木村入間田(現在の柴田町)で生まれた。銅像の制作者に選ばれるまでには、中学校時代の旧友佐藤忠太郎らが結成した「木馬会」の強い推薦もあった。騎馬像は、戦争のため解体され、戦後、上半身だけが金属集積所で発見された。昭和三十九(一九六四)年、残されていた石こう像(原型)を元に復元された。柴田町内の小中学校には、達が制作した人物像が飾られている。

馬具：
馬を操るために付ける道具。

指摘：
悪いところや、大切なところを見つけて、具体的にしめすこと。

鑄造所：
金属を溶かして型に流し込み、固めてその形のものを作る所。

さんさ時雨：
伊達軍が戦って勝った後に作られ、歌われた民謡。

雄姿：
勢いがあり、おそれずに向かっていく様子。



齋藤 眞
(名古屋大学医学部所蔵)

(これが人間の頭の骨か……。) 医学に興味があった幼い眞の目は、初めて見る頭蓋骨にくぎづけになりました。ある日、戦争に行った医師である父から、銃で頭を打たれて死んだ兵士の頭骸骨が送られてきたのです。戦争から帰った父は眞に、

「頭のけがの治療は遅れている。これからは頭の研究が大切だよ。」

と話しました。それから眞は、人の体の中でも特に頭への関心を深め、頭蓋骨をかたわらに置きながら医師になるため勉強にはげみました。第二高等学校(現在の東北大学)、東京帝国大学医学科(現在の東京大学医学部)を卒業して、念願の医師になりました。

医師になった眞は大学の外科に勤め、治療と研究の道を歩み始めました。その一年三か月後には愛知県立医学専門学校(現在の名古屋大学医学部)の講師となりました。この時の眞はわずか二十七歳で、当時には考えられない若さでの就任でした。しかし、若くして教壇に立った眞への同僚の態度は冷たいものでした。眞とすれちがってもあいさつもせず、かげでは悪口を言うという始末でした。その上、生徒は授業に真剣に参加しないばかりか、やじを飛ばしました。

「医者になったばかりのお前に何が分かる。」

「おれたちよりも年下のくせに、えらそうに授業するんじゃない。」

眞は悩みました。うまくいかないのはなぜなのか、どうすればよいのか考えました。けれども、答えは見つかりません。

しばらくすると眞は、仕事の合間も惜しんで研究に専念し始めました。一人研究室に閉じこもり、読書や研究に没頭しました。東京で重要な手術があるときには仕事が終わると夜行列車で上京して学び、手術が終わるとすぐ名古屋に戻って病院の仕事と授業、研究を行うといった生活を続けました。このような眞の姿は、同僚や生徒たちの気持ちを少しずつ変えていきました。しだいに同僚や生徒から受け入れられるようになった眞は、二年後には教授に昇格し、外科部長にも任命されました。

医師として高い地位についた眞でしたが、その胸の中は満たされてはいませんでした。幼いころから興味をもっていた脳神経外科を学ぶことができていなかったのです。当時の日本では、頭を手術するということは考えられず、頭に大きなけがをすると、そのまま命を失うことがほとんどでした。眞は脳神経外科を日本に広め、たくさんの方の命を救いたいという思いをもっていたのです。そのために、当時の医学の最先端であるヨーロッパへ留学することを決意しました。このことを学校長に相談すると、

「きみは外科部長になってまだ間もない。今留学を許すことはできない。
留学の費用も、一切出すことはできない。」

と反対されました。それでも眞はあきらめませんでした。少しでも早く外国の進んだ医学を学ぶことこそ、自分が一番しなければならぬことだと強く信じていたのです。眞は苦勞の末に築き上げた教授と外科部長の地位を捨て、自費でヨーロッパへ留学することを決めました。横浜から旅立つ眞への見送りは少なくさみしいものでしたが、眞の顔には少しのくもりもありませんでした。その眼は真っ直ぐに、はるかな水平線の先を見つめていました。

三十歳でヨーロッパへ渡った眞はウィーン大学、ベルリン大学、パリ大



脳神経外科：
脳や頭の病気を
けがに対して、手
術などで治療を行
う
医学の分野のこと

就任：
役に就くこと。

専念：
ある一つのことだ
けを熱心にたゆま
ずと。

没頭：
一ことに熱中
すること。

自費：
個人で支払う費用。

学というヨーロッパを代表する学校で脳神経外科を学びました。ひたむきに勉強した眞は、ヨーロッパの進んだ技術をまたたく間に吸収しました。その取組が認められて、愛知医科大学（現在の名古屋大学医学部）から教授に任命され、さらに二年間の留学の延長を許されました。

四年間に渡る留学の中で最先端の技術と知識を身につけて帰国した眞は、日本の脳神経外科の技術を、なんとしてもヨーロッパ並みに引き上げなければならぬという強い思いをもって仕事に取り組みました。朝早くから夜遅くまでたくさんの仕事をこなしながら、脳腫瘍の診断と治療法や脳のレントゲン撮影など次々に自分の研究の成果を世界へ発表し、脳神経外科という新しい分野の開拓を進めていきました。

昭和十六（一九四一）年、太平洋戦争が始まりました。眞がいた名古屋も度重なる爆撃により多くの死傷者がでました。眞は空襲の中を駆け回りながら、たくさんの命を救いました。病院や自宅が燃えたり、疲労で体をこわしたりしながらも、休むことなく負傷者の治療に全力を傾けました。

昭和二十（一九四五）年には終戦を迎えましたが、眞の勤める名古屋大学病院も大きな被害を受けました。それまでに整備してきた施設や設備、研究を進めてきた資料などすべてが灰となってしまいました。（これではもう患者を救えない……。研究もできない……。）

みんながぼう然としていたその時、眞はつぶやきました。

「なに、初めからやり直せばよい。」

一面の焼け野原となった病院のあとを前につぶやいたその一言には、強い決意がこめられていました。

翌年、眞は名古屋大学病院長となり、復興のために懸命に働きました。患者の治療、学生や後輩医師の指導、自分の研究に加え、病院の設計図を描き、施



被災した名古屋大学医学部
（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）

設と設備の検討まで行いました。さらに、戦争から立ち直るためには、一刻も早く全国の病院を復興しなければならないと考え、日本全国を飛び回って支援金を集めました。この眞の活動により、全国にたくさん病院が建てられました。昭和二十三（一九四八）年には、念願の日本脳神経外科研究会（現在の脳神経外科学会）を作り、その会長を務めました。この研究会の発足により、日本の脳神経外科は大きな進歩を見せ、多くの人々の命が救われるようになりました。幼いころから描いていた眞の思いが、ようやく実現したのです。



学会で発表する眞（名古屋大学医学部所蔵）

たくさんさんの苦難を乗り越え、医師としての道を迷わずに生きぬいた眞の手帳には、次の短歌が詠まれていました。

「雨よ降れ 風も吹け吹け 日も照らせ わが行く道は 白き一文字」

齋藤眞

齋藤眞は、明治二十二（一八八九）年、敷玉村青生（現在の美里町青生）に生まれた。脳神経外科を海外で学び、脳腫瘍の診断と治療法、脳のレントゲン撮影、輸血法など、たくさんさんの研究の成果を世界に発表した。また太平洋戦争からの復興へ向けて、名古屋大学病院長に就任し、病院の整備、全国各地の病院設立、脳神経外科研究会の発足などに力をつくした。

脳腫瘍：
脳や頭蓋骨の中に
できるかたまり。

復興：
こわれたり、おと
ろえたりしたもの
がもとのように盛
んになること。

発足：
団体などが作られ、
活動し始めること。

佐藤 忠太郎

— 伝統の復活と発展をめざして —



佐藤 忠太郎 (佐藤家提供)

白石市の小さな工房で、「白石紙子」の作品が生み出されています。白石紙子とは、白石和紙を生かしたバッグ類や財布、小物入れ、名刺入れなどの工芸品です。白石市の特産品として知られ、各地から愛好者が作品を求めに訪れています。この工芸を起こしたのは、白石で生まれ育った佐藤忠太郎です。

忠太郎は、明治三十四（一九〇一）年、白石の呉服屋の長男として生まれました。小さなころから人と話をするのが好きだった忠太郎は、白石中学校（現在の白石高等学校）に入学し、同級生と夢を語り合いました。

「ぼくは、りっぱな彫刻家になりたいんだ。」

「ぼくは、東京に出て科学を学ぼうと思う。」

忠太郎は、友人たちとこのような話をするのが楽しくて仕方ありませんでした。自分も何か大きなことをやってみたいと、いつも思っていました。そんな志をもった忠太郎に突然、両親との別れがやってきました。スペイン風邪という病気のために、中学校卒業間近というときに両親を続けて失ってしまったのです。六人もの小さい弟や妹を抱えた忠太郎は、途方に暮れてしま



白石紙子の工芸品

ました。

中学校を卒業した忠太郎は、共に夢を語り合っていた同級生を駅まで見送りに行き、その帰り道に河原に腰を下ろしました。自分の夢をかなえるために東京に出て行く希望に満ちた友人の姿を思い浮かべた忠太郎は、雄大な蔵王山を見つめ、こぶしをにぎりしめたのでした。

（自分は、長男として呉服屋を継がなければならない。よし、どうせ地元に残るのなら、白石を発展させるような産業を起こしてやろうじゃないか。）

その後、忠太郎は、当時産業が大変盛んだった長野県に視察に行きました。そこで現地の人から聞いたのは「自分の足下を見つめ直しなさい。何か良い産業があるはずですよ。」という助言でした。

長野県から帰ってきた忠太郎は、ある日、仕事の仲間から聞いた話に、はっとしました。

「いやあ、大変だよ。紙布織りを手がけているばあさんたちが、みんな年でさあ。このままじゃ、白石紙布がなくなっちゃうなあ。」

白石紙布とは、白石和紙を使って特別な織り方をした紙の布で、この紙布で作った着物は、さらりとして肌ざわりがよく、軽くて大変上質なものでした。

「足下を見つめ直すとは、このことか……。」

忠太郎はその日から、さっそくお年寄りの家々を回り、実際の織り方を聞き、資料をもらい集めました。「白石和紙でない」と、この感触にはならないのだよねえ。」

白石紙子：
白石和紙のもつすばらしい手ざわりと軽やかさを生かした工芸品。現在は、白石和紙製造の地域の上質な和紙を使用している。

愛好者：
特定の物や活動が好きで親しんだり楽しんだりする人。

呉服屋：
和服用の織物などを扱う店。

スペイン風邪：
一九一八年から一九一九年にかけて全世界で流行したインフルエンザ。日本では約三十九万人が死亡したといわれている。

途方に暮れる：
方法がなくてどうしようもない様子。

視察：
その場所に行つて実際の様子などを見ること。

紙布織り：
白石和紙を細く裁ち、こよりの糸にし、その糸で織った布。

「昔は、お殿様にも献上していたんですよ。」

と誇らしそうに話すお年寄りの話を聞かたびに、忠太郎の目は輝くのでした。

紙布織りに関する情報があると、全国各地どんなに遠くても調べに行ったり、初めて会う人にもどんなに偉い人にも、ためらうことなく尋ねたりする熱心な取組が実を結び、とうとう紙布織りの工程を記した報告書と一反の白石紙布を完成することができました。完成した一反を忠太郎は神棚に供え、うれしそうに手を合わせました。忠太郎が四十歳のときでした。

それから、忠太郎は小さな工場を建て、昔ながらの工程で白石紙布を作ることに専念しました。しばらくは順調に作っていましたが、戦後の大きな社会の変化を迎え、紙布の需要はだんだんと少なくなってきました。

もっと安く簡単に作ることができる布が使われるようになったからです。

昔の人々が作り上げてきた尊い白石の伝統を守り育てようとした忠太郎でしたが、新しい時代の流れに逆らうことはできず、紙布工場を閉めることになってしまいました。

しばらく何もする気になれなかった忠太郎は、久しぶりに蔵王山が見える河原に腰を下ろし、大きなため息をつきました。下を向いた忠太郎の目うつったのは、雪どけの水を含んだ、清らかなどどまることのない白石川の流れと、そこに咲いていた名前も分からない小さな小さな花でした。

それからの忠太郎は、野山を歩き回って、美しい草木や花を見つけたり石碑を見つけて写しとったりする作業を始めました。また、古い神社やお



織細な模様を浮き出させる拓本染め

寺、民家を訪ねて、昔から使われている物を見せてもらうこともありました。忠太郎は、ふるさと白石の大地から生まれ育つ美しい自然の物や、ふるさとのかおりのする昔から伝わっている物を探し回ったのです。忠太郎の心の中に芽生えていたのは、昔の物を引き継ぐだけでなく、新しい時代に合った物を作り上げようとする熱意でした。忠太郎の熱意は、「拓本染め」と呼ばれる繊細な模様を浮き出させる技法を見出し、白石和紙を使った美しい「白石紙子」の作品が生み出されました。

白石紙布を復活させただけでなく、ふるさと白石の自然と伝統を生かした美しい白石紙子という工芸を生み出した忠太郎は、昭和四十三（一九六七）年、暮らしぶりは最後まで苦しいものではありませんが、心は大変豊かに満ち足りた生涯を閉じたのでした。

忠太郎の歩んだこの時が、白石紙布調査の最後の機会であり、これが行われなければ、他に例のない白石紙布全体を知る機会も永遠に失われていたといわれています。また、ふるさとのかおりのする、美しく軽やかな感触の白石紙子の工芸品は、現在も全国各地で人々に愛用されています。

佐藤 忠太郎

佐藤 忠太郎は、明治三十四（一九〇一）年、白石に生まれた。伝統であった「白石紙布」について、長い年月をかけて調査を行った。また、拓本染めという技法を見出し、ふるさと白石の自然を生かした「白石紙子」という工芸を起した。白石紙子の作品を求めに、今も各地から愛好者が訪れている。



拓本染めを手がける佐藤忠太郎 (佐藤家提供)

献上：
身分の高い人にな
どに物をさし上げ
ること。

一反：
布などの長さを表
す。約十二メートル。

需要：
商品が必要として
求めること。

佐藤 忠良

技を磨き続けた職人彫刻家



佐藤忠良 (宮城県美術館提供)

日本人として初めてパリ・ロダン美術館で個展が開かれるなど、世界的に高い評価を受けながら、自らを「職人」と呼び、文化功労賞など様々な賞を辞退した彫刻家がいきました。

「わたしたち彫刻家のやっているのは、粘土こねて、彫かいて、汗かいて、失敗して、やり直す、職人の仕事なんです。」

も出品していた佐藤忠良です。

佐藤忠良は、明治四十五(一九一二年)、黒川郡落合村(現在の大和町)で生まれました。忠良が六歳の時、農学校の教師をしていた父が病気で亡くなり、忠良と弟は、母に連れられ北海道に移住しました。母は和裁を教えたり、着物を仕立てたりしながら、大変な苦勞をして忠良と弟を育てました。

幼いころから絵を描くことが大好きだった忠良は、札幌の学生時代に絵の才能を開花させ、公募展で連続入賞するほどの腕前になりました。「絵描きになりたい」という気持ちがおさえられなくなった二十歳の秋、「とにかく東京へ出て、専門家のもつとで、ちゃんと絵を学びたい。」

という忠良に、母は苦しい生活にもかかわらず、「やってごらん。」

と送り出してくれました。

忠良は、日本の文化の中心である東京で様々な美術を学んでいくうちに、ロダンなどの近代彫刻と出会い、



「恥かけ 汗かけ 手紙かけ (水仙)」
(宮城県美術館所蔵)

そのすばらしさに心打たれて、彫刻家を志すようになりました。そして、生き生きとした人間の顔や像を次々と作り、日本を代表する彫刻家になったのです。

「恥かけ、汗かけ、手紙かけ」これは忠良の口ぐせで、学生や若い人たちへ贈る色紙などによく書いていた言葉です。「恥かけ、汗かけ」とは、頭で考えるだけでなく、体を動かし、体験から学ぶことの大切さと、失敗をおそれずに挑戦することの大切さを伝えていきます。

ある時、東京造形大学の教授となった忠良のアトリエに学生たち

がやってきました。

「先生、これ、見てもいいんですか。」

アトリエには、やりかけの彫刻も隠すことなく全部置かれています。目を丸くして聞く学生に、忠良は黙ってうなずきます。(こつこつやってみる。それだけでも覚えてもらいたい。) 忠良の胸には、そんな思いがありました。うまくいかなければやり直す。地道な作業を、何度も何度も繰り返す。もつともつとよい作品をめざして。忠良はこのことを学生たちに伝え、自らも体現してきたのです。

忠良は彫刻だけでなく、新聞や雑誌の挿絵や絵本の絵も描きました。特に『おおきなかぶ』の絵本の絵は、みなさんもきっと見覚えがあることでしょう。

『おおきなかぶ』制作中、アトリエを訪れた絵本の編集者の目に、大きな鏡の前に立つ忠良の姿が飛びこんできました。

「こうかな。いやちがう。」



『おおきなかぶ』絵本原画 (宮城県美術館所蔵)

個展：一人の作品だけを集めて開く展覧会。

文化功労賞：

文化の発展のために、特に大きな功績のあった人に贈られる賞。

和裁：和服を制作することやその技術。

公募展：広く一般から募集した展覧会。

ロダン：近代彫刻の元を作ったフランスの彫刻家。

アトリエ：芸術家が作品を制作する作業場。

体現：自分の考えを具体的ななかにあらわすこと。

(先生は何をしているのだろうか。)

「おじいさんがかぶを引っぱったと書いてあるのに、これでは、かぶを抜いているのではなく、押しているように見えてしまうな。」

かぶを引いているかっこうをしては絵を描き、描いてはまた鏡の前に立つ。何度も何度も絵を描き直す忠良をじっと見ていた編集者は、いつしか胸がいつぱいになり、言葉を失いました。

宮城県立こども病院の玄関に飾る『おおきなかぶ』のレリーフを作っていた時にも、こんなことがありました。「かぶを抜いているように見せるために、腕や脚の位置をそれらしく一部だけでも手直ししたりすると、それにつられて上半身や頭の具合なんかも不自然に見えてきて、結局体全体を直すようになる……。それで、そんなことを繰り返していると、きりがなくなつて、なかなか仕上がらないんですね。」

制作の様子を近くで見ている人には完璧に見える作品も、忠良には納得がいかず、完成間近の作品も、何度も何度もこわして作り直しました。実に忠良、九十一歳の時のことです。

「恥かけ、汗かけ、手紙かけ」の「手紙かけ」とは、親や周りで支えてくれている人への感謝を忘れず、感謝の思いを表現することの大切さを伝えていきます。

忠良のこの思いが強く感じられる作品があります。三十歳の時に作った『母の顔』という作品です。

世の中が戦争一色となったころ、忠良は母の顔の像を作ることになりました。大変な苦勞をして自分を育ててくれた母。息子の夢をかなえるために、貧しい生活の中でも背中を押し続けてくれた母。その母の顔を。

当時はアトリエもない小さな家でしたので、母には縁側の日陰げになるところに座ってもらい、忠良は日なたの庭で、麦わら帽子をかぶ



「母の顔」(宮城県美術館所蔵)

り、作品に取りかかりました。日当たりがよくて、こねている粘土はすぐに乾いてしまいます。水をかけては作り、また水をかけては作る。母の顔を見つめながら。じりじりと焼けるような太陽の下で、忠良のひたいを汗がいくすじも流れていきました。

この作品は、後にフランス、パリの国立ロダン美術館で開かれた日本人初の個展でも、見る人の心を打ち、大きな賞賛を受けました。

実際のところ、忠良は大変な筆まめで、心動かされることがあるとすぐに筆をとり、一字一句に感謝の思いをこめながら、はがきや手紙を書いていたそうです。

平成二(一九九〇)年、宮城県美術館に「佐藤忠良記念館」が併設されました。宮城県に忠良の作品や考え方に共感する人がたくさんいて、「生誕地に美術館を。」という動きが起ったのです。初めは遠慮していた忠良でしたが、周囲の熱い思いに答え、自分の彫刻や絵本の原画だけでなく、長年収集してきたピカソやシャガールなどの美術作品までも、生まれ故郷の記念館に寄贈することにになりました。あの「母の顔」像も、展示室の入り口で、静かにあたたかな光を放っています。

記念館は今も訪れる人々に、彫刻家としてだけではなく、忠良の人間としての魅力を伝えていきます。そして、日本のあちらこちらの街角で、美術館で、忠良の作品は、今もわたしたちに人として大切なことを、そっと語りかけてくれているのです。



佐藤忠良記念館(宮城県美術館提供)

佐藤 忠良

佐藤 忠良は、明治四十五(一九一二年)年、黒川郡落合村(現在の大和町)に生まれた。幼少のころを父の実家である伊具郡大張村(現在の丸森町大張)の豊かな自然の中で過ごした。自らを職人と呼んで、彫刻の技をみがいた。人間愛、自然愛にあふれた多くの作品をつくり、全国各地に展示されている。また、絵本『おおきなかぶ』の挿絵を描くなど、子どもたちの感性を豊かに育むための美術教育にも力を注いだ。

筆まめ…

めんどくさがらずに、よく手紙や文章を書くこと。

一字一句…
一つの字、一つのこぼれ。

併設…
主なるものにあわせて設置、または整備すること。

生誕地…
生まれた土地。



佐藤 基
(仙台赤十字病院提供)

佐藤基は明治二十七年（一八九四）年、東根村（現在の角田市東根）で生まれました。小さいころから勉強熱心で、医者になって病気で苦しむたくさんの人を助けたいという夢をかなえるために、大学に入学しました。当時東根村から大学に進学した人は初めてで、大変な話題になり、村中の期待を背負っていました。

大学卒業と同時に医師免許を取った基は、ついに念願だった医師としての第一歩を踏み出しました。基が医学を学んでいた大学には病院が併設されていたので、そこで医学部助手として仕事をするようになったのです。

毎日患者と向き合い診察をすることは、基にとってもやりがいのある日々でした。しかし、患者の病気に苦しむ姿や治療のいかなく死に直面する姿を見るたびに、自分の無力さを感じることもしばしばありました。そこで研究熱心な基は、同じ病院に勤務していた医師、熊谷先生の研究チームに入り、患者の診察が終わった後も夜遅くまで研究に打ちこみました。新しい治療方法や薬を自分たちが発見することが、苦しんでいる患者を救うための一番の近道だと考えたからです。

基たちが一番力を入れていたのは糖尿病についての研究でした。



糖尿病は、体に症状が表れるまでは病気とは気づきにくく、病院で診察を受けた時には病気がかなり進行している患者も多くいました。ひどい時には足を切断しなければならなかったり、目が見えなくなったり、目が見えなくなるほど重い病気です。その当時は、治療の方法がなかったため、医師は糖尿病の患者さんに対して何も治療ができませんでした。基はそんな糖尿病で苦しむ患者と向き合うたびに、なんとか助ける方法はないかと心を痛めていたのです。

糖尿病の研究を始めてから二年の月日が流れても、なかなか思うような研究成果は出せませんでした。「このまま研究を続けていったところで、本当に糖尿病の治療法を見つけれられるのだろうか。こんなことを続けていても何も発見できなければ時間の無駄になってしまうのではないだろうか。」

昼も夜も患者のことを考え、診察や糖尿病の研究に打ちこんできた基でしたが、肉体的にも精神的にも疲れ、心に迷いが出てきました。

しかし、そんなとき基の頭に浮かんだのは、糖尿病で苦しむ患者の姿でした。治療もできずに亡くなっていった、自分が医師として救えなかった多くの命への無念さが、基の胸にこみ上げてきました。

「弱気になってはいけない。患者さんのために研究を続けていかなければ。」

このころから、基はこれまで以上に熱心に研究に励むよう



インシュリン：
現在ではインスリンと呼ばれている。

糖尿病：
血液中のブドウ糖は私たちの体のエネルギー源となるが、この血液中のブドウ糖の濃度が高くなり過ぎることによって起こる体の不調。

無念：
くやしつたままな気持ち。



血糖値：
血液中のブドウ糖の濃度。高くなり過ぎると、糖尿病の原因となる。

になりました。そして大正十（一九二一）年、ついに基の所属する研究チームが、糖尿病の治療と関わりのある血糖値を下げる効果のあるインシュリンという成分を発見しました。これまで糖尿病に有効な薬がなかったため、インシュリンの発見はノーベル賞をもらえるほど偉大なことでした。インシュリンの発見に日本の医学界は大喜びし、基たちは早速ノーベル賞をもらえるよう手続きに取りかかりました。しかし、同じ時期にインシュリンを発見したカナダの医師バンディングが、一足早く手続きをすませているため、ノーベル賞はバンディングの手に渡ってしまいました。

周りの人々はノーベル賞を逃したことをたいそうくやしがりしましたが、基はいつものように患者と向き合い、たんたんと診察を続けました。

その後、基は功績が認められ、仙台赤十字病院の院長として活躍しました。仙台空襲で病院の建物が焼けてしまうという困難があっても、診察を望む多くの患者のために、仙台市内を駆け回り、近くで病院の代わりになるような建物を探し、そこで診察を続けました。

医学に対しての知識が豊富で、医師として腕が確かであるという基の評判は県内中に広がり、遠くからも診察を希望する患者が訪れました。また、どんなに遠くでも、どんなに遅い時間でも、苦しむ患者のいるところに駆けつけ、昼夜を問わず診察をしました。

年を取っても基の「患者さんを救いたい」という気持ちが変わることはありませんでした。医師とし

て患者のそばに寄りそい続けた基の努力で、多くの患者が救われ、笑顔になったのです。

昭和四十三（一九六八）年、基は、家族に見守られながら、七十五年の生涯を終えました。

現在では、糖尿病の患者も元気に生活することができています。それは基たちが発見したインシュリンを使って血糖値を下げることでできるようになったからです。ノーベル賞を取ることはできませんでしたが、基たち研究者の発見は今でも光り輝き続けています。



（イラスト 鵜飼 理恵）

佐藤 基

佐藤 基は、明治二十七（一八九四）年、東根村（現在の角田市）で生まれた。医者の仕事しながら研究に励み、インシュリンという成分を、世界で初めて発見した。発表の手続きに時間がかかったため、ノーベル賞を逃したが、医者としての信頼はさらに高まり、その後も病気で苦しむ人々を救った。

功績：
世の中のためになすくれた働き。



白鳥 省吾
(白鳥省吾記念館提供)

「生まれ故郷の
栗駒山は
ふじの山より
なつかしや」

吾の詩碑があります。この詩碑は栗駒山に向かつて建てられています。子どもころ、近所の友達と近くのお寺の境内や野山をかけめぐって遊んでいた省吾は、築館から見える雄大な栗駒山を毎日のようにながめて育ちました。人一倍ふるさとを愛していた省吾は、ふるさとの自然や田畑を耕して暮らしを支える農民、美しい風土と厳しい生活環境に生きる人々の姿を詩に表し続けました。



薬師山に建てられた詩碑

明治三十八(一九〇五)年、中学四年のある日、省吾のクラスに郡長の息子辰野正男が転校してきました。正男は文学が好きで、学校に毎日「藤村詩集」を持ってきて読んでいました。文学に興味があった省吾は、正男が読んでいた「藤村詩集」を借りて読みました。この詩集にのっているのは、これまでの日本の和歌や俳句などの定型詩や漢詩とは違い、西洋詩の影響を受けた、形式にとられない新しい形の詩でした。省吾は、初めて見た表現の仕方に心を動かされ、夢中になって読みました。そして、この新しい詩の形式によって、自分の心を表現してみようと思うようになりました。省吾は「藤村詩集」を読みながら、思い浮かんだ詩を一つ一つ書いていねいに書き始めました。書き続けていく中で、詩というものの形式や美しい言葉、空想することの楽しさを学びました。

このことがきっかけとなり、省吾は、正男など文学に興味のある友達と何冊かの文芸雑誌を共同で買い、回覧するようにしました。また、青少年向けの文芸雑誌に、自分で作った詩を投稿し始めました。投稿した詩はいつしか入選するようになり、家から学校までの道のりを、常に詩集を読みながら通うほど文学の世界にのめりこんでいきました。中学五年の時、文芸誌「秀才文壇」に投稿した詩が見事一等に入選し、省吾の詩に対する情熱はさらに高まっていきました。

中学校を卒業した省吾は、二高(現在の東北大学)を受験しましたが、不合格でした。そして、その年の暮れ、背中にできていたはれ物が悪化し、一か月ほど入院することになりました。退院後も傷口が全快せず、二高再受験の道をあきらめなければなりません。将来の方向性を見失い、やる気をなくしてしまつた省吾は、気を紛らわすかのように詩を書き続けました。単調で憂うつな日々を過ごすことは辛かったです。その中で孤独をなくさめてくれたのは詩を書くことでした。

そんな心境のところへ、友人の正男から手紙が来ました。「文学をやるんだつたら早稲田がいいぞ。すばらしい先生がそろっているんだ。」正男の手紙から、省吾はいつしか(詩を書くには早稲田しかない。自分も早稲田大学に入り、さらにすばらしい詩を書く。)と思うようになりました。そして早稲田大学に進学したいことを父に話しました。すると文学に理解のある父は何も言わずに賛成してくれました。

明治四十二(一九〇九)年、省吾は待望の早稲田大学英文科に入学することができました。坪内逍遙、島村抱月、片上伸などの著名な教授の指導を受け、文学の世界にのめりこんでいきました。志を同じくする詩人や歌人との交流も次第に多くなりました。また、省吾の詩に対する考え方に大きな影響を与えた「自由詩の父」といわれているアメリカの国民的詩人、ウォルト・ホイットマンを知つたのもこのころでした。

大学に入ってから、詩を作ることに対しての情熱は変わりませんでした。以前のよう、雑誌に詩を投稿することはしませんでした。なぜなら、一人前の詩人として、詩を世の中に発表したいという気持ちがあったからです。しかし、作った詩を発表する機会がなかなかありませんでした。その上、父からは仕送りが大変なので、「大学を退学してふるさとに帰ってくるように。」と書かれた手紙が届いたのです。

「文学を学ぶことについて理解をしてくれた父なのに、なぜ……。」

民衆詩派：大正時代に盛んであった詩運動の一派。

中学四年：旧制の中学四年。現在の高校一年にあたる。

郡長：栗原郡の長官。

「藤村詩集」：島崎藤村(詩人・作家)の四つの詩集をまとめたもの。

中学五年：旧制中学校は五年で卒業することになっていた。

投稿：雑誌などに載せてもらうために原稿を送ること。

坪内逍遙：明治、大正時代の文学者、英文学者。

島村抱月：明治、大正時代の文芸評論家。

片上伸：明治、大正時代の文芸評論家。

ウォルト・ホイットマン：詩集「草の葉」の著者。

それには理由があったのです。少しばかりの田畑と父と兄の教師の収入では家族八人を養うだけでも大変なのに、東京で生活をしている省吾に仕送りをすることは、簡単なことではなかったのです。省吾は、父からの手紙に、じっと目を向けました。

その後も父から同じような内容の手紙が何度も届きましたが文学を学ぶ意志は変わりませんでした。省吾は「一人前の詩人として詩を書き、日本一の詩人になりたいのです。」と父に手紙を書きました。

やがて父は省吾の気持ちを理解し、苦しい生活の中からわずかな金額を仕送りし続けたのでした。省吾はふるさとからの仕送りを受け取るたびに父の情け深さを感じ、涙が止まらなくなりました。そして、下宿から大学までの道のりを半分電車で行き、残り半分は歩いて通って電車を節約するなど、わずかな仕送りを様々な方法で工面しながら東京に残り、文学を学び続けました。



大正二（一九一三）年、早稲田大学を卒業した省吾は、翌年念願の第一詩集「世界の一人」を、友人の若山牧水たちの協力を得て出版しました。詩集の最初のページには「陸前築館なるわが父母にささぐ」と書かれています。そして、「天葉詩集」「大地の愛」「ホイットマン詩集」「楽園の途上」「現代詩の研究」など次々と詩集や評論集を出版し、詩人として認められるようになりました。

都を百里、ふるさとの

空美しく花さけば、

そぞろに歌う春の鳥。

春三月の雪とけて、

山紫に匂ふころ、

わがふるさとに啼く小鳥。

この詩のように、ふるさとの自然や生活をうたった作品がたくさんあります。形式にとられない日常使う分がしやすい言葉で書かれた省吾の民衆詩は当時大変めずらしく、詩人たちの間で注目を集めました。その後、校歌や童謡、民謡などの作詞も手がけるようになりました。

見よや栗駒山高く

我等雄々しき力あり

迫の川のせせらぎに

我等やさしき心あり

これは省吾が作詞した母校、築館小学校の校歌です。省吾はふるさと栗原郡（現在の栗原市）内の学校の校歌に、栗駒山や迫川などの自然を登場させています。校歌を作る時にはその場所に実際に何度も訪れて情報を集め、多くの人々と交流して作り上げました。そして、日常使っている言葉で、あるがままに自由に表現することをつらぬきとおしました。省吾が作詞した校歌は、現在も多くの人々に歌いつがれています。



省吾の母校である築館小学校から見える栗駒山

白鳥省吾（本名 しろとりせいご・ペンネーム しらとりしょうご）

白鳥省吾は、明治二十三（一八九〇）年、栗原郡築館村（現在の栗原市築館）に生まれた。「民衆詩派」の詩人として活躍し、「詩を民衆に解放した詩人」として評価されている。宮城県を始めとする小・中・高等学校の校歌の作詞家としても知られている。アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの詩の翻訳者としても著名である。こうして省吾の業績を讃え平成十年「白鳥省吾記念館」が建設された。翌年、築館町（現在の栗原市）主催で「白鳥省吾賞」が創設され世界各国から詩の募集をしている。毎年千数百編の詩が寄せられている。

工面：必要な金や品物を工夫して用意する。
若山牧水：明治、大正時代の歌人。
ささぐ：ささげること。

評論集：物事を批評した文章をまとめたもの。

この詩（都を百里の…）：「天葉詩集」に掲載された序詞（前書き）。

民衆詩：農民の生活や労働者を題材にした詩。



鈴木 哲朗
(気仙沼市教育委員会提供)

「海つてすごいなあ。魚が、いっぱいいわき出してくる……。」
哲朗は、幼いころから、紀州の漁師たちが鳥の羽を用いた擬餌針や生きて
いるいわしを餌にして、今の気仙沼地域にかつおの一本釣りや広めた話を
祖父から聞くのが大好きでした。いつしか海と共に生きる者として、自分
も何かできないものかと考えるようになっていきました。

鈴木哲朗は、本吉郡唐桑村（現在の気仙沼市）の先祖代々にわたってこの地方の海での生活を支えた旧家（海
産物商）に生まれ、恵まれた環境に育ちました。父は県議会議員を務め、明治維新で活躍した勝海舟や榎本武
揚とも親交がありました。

哲朗が育ったころの日本は、幕末から明治という、ヨーロッパやアメリカなどに負けない国にするために、
外国の進んだしくみや技術、文化などをどんどん取り入れていった時代です。哲朗は新聞や大人たちの会話が
ら日本が大きく変わっていく様子を知るたびに、「いつか、この目で世界を見てみたい、自分もアメリカで学
問を学んでみたい。」という思いが、日に日に大きくふくらんでいきました。

哲朗が家族の猛反対を押し切ってアメリカへ留学したのは二十二歳の時、東京の英吉利法律学校（現在の中
央大学）で法律を学んだのち、故郷に帰り結婚してすぐのことでした。

家からの仕送りは一切なく、慣れない英語での会話にとまどいながらも、昼は洋品店で働き、夕方から夜遅
くまで勉強しました。哲朗には知りたいこと、勉強したいことが山ほどありました。それでも、空腹や疲れに

負け、くじけそうな時もありました。しかし、休んでいる暇はありません。そんな時は、決まって目を閉じて
故郷に思いをはせます。きらめく海と潮の香り、光る魚の群れと漁師たちの威勢のよいかけ声、そして、家を
守る妻のことでした。哲朗は、漁法、養殖、社会学、経営学、植林など、さまざまな分野の勉強に挑戦し続け
ました。

大きな希望を胸に抱いて帰国したのは、それから三年後でした。

当時、唐桑の漁民の生活は、細々としたもので、現金収入は少なく、働いても働いても、暮らしに困る家
が多くありました。村の人々のくらしの大変さがひしひしと伝わってきます。漁業は昔ながらのやり方で行わ
れ、魚に出ない日もありました。理由は、魚を釣っても、売り先が限られ、腐らせてしまうからです。

（魚は海からの恵みだ。……何か、生かせる方法はないだろうか……。そうだ。加工場をつくらう。村人の働
き口や現金収入を増やすこともできるぞ。どんどん魚をとる方法も考えな
くては……。）

哲朗は、これまでの習わしにとられることなく、アメリカで学んだ知識
を生かして、新しい漁業や水産業の方法を考え出していきました。

巾着網の研究にも取りかかりました。まずは小さい模型を作り、実際に
網を組み立て、次に、海に入れ、できればえを何度も何度も試す、その繰り返し
です。なかなか思うようにはいきません。改良に改良を重ねる試行錯誤の
日々が続きました。それでも途中で投げ出すわけにはいきませんでした。昼
は家業の仕事、夜は水産学、魚の売り先や買い付け資材について、ここでも
寝る間をおして研究を続けました。そしてついに、網の改良に成功したの
です。鮪、鯉、鰯の漁獲量は増え、加工場の建設も順調に進んでいきました。



紀州…
現在の和歌山県
三重県南部のあた
り。

擬餌針…
羽毛・魚皮を、虫
小魚などの生きた
えさに似せて作っ
た釣り針。

明治維新…
江戸時代末・幕末
から明治時代初期
に日本を近代国家
に発展させるため
に進められた政治
経済、社会の大き
な改革のこと。

勝海舟…
幕末・明治の政治
家。

榎本武揚…
明治時代の政治家
通信（郵便・通信
などを扱う）・外
務・文部の各大臣
を務めた。

唐桑…
現在の気仙沼市。

巾着網…
巻き網の種類。



試行錯誤…
いろいろ試して失
敗をかさねながら
だんだん正しいや
り方に近づくとこと。

加工場の建設も、網の研究も、たくさんのお金が必要でした。哲朗は一生懸命に働き、私財をつぎ込みました。いつしか、この地方きつての水産事業家として成功していきました。しかしながら、哲朗は、現状に満足することなく、次々と新しい事業に果敢に取り組んでいったのです。

ところが、そんな哲朗の姿を心配する声や心ない声、しだいに聞かれるようになりました。

「次々、新しいことに挑戦してつけど、あんなに手広く商売を広げて、失敗したらどうすんだ。」

「何も、今のままでも十分でねえのが。借金こさえて、加工場つぶれたら、働き口がなくなってしまう。」

「金があつから、いろんなことできんだあ。金持ちの道楽だべ。」

それらの声は、哲朗の耳にも届くようになっていました。さらに、哲朗が発案した定置網漁の船員もなかなか思うように集まらず、哲朗の友人や親戚からも心配の声があがり、忠告する人もいました。

哲朗は、一人浜辺に立ち、寄せては返す波の音を聞きながら、考えこむ日が多くなっていきました。

ある夜、妻が心配して

「だいじょうぶですか。」

とたずねました。哲朗の表情は厳しいものでしたが、おだやかな声で話しはじめました。

「三陸の海はいい海だ。魚もたくさんとれる。この地域の者は、古くからこの海の恵みをうけてきた。でも、昔とおんなじ漁のままじゃだめなんだ。今、時代は動いている。みんなの、そして、将来につながる方法でやっていかなければならない。……失敗もあるし、金もかかるが、それを恐れていては、何もできない。だが、やらなければならぬ。……わたしはわたしがやれることをやるだけだ。」

前をしっかりと見すえ、凜とした哲朗の姿に、妻は黙ってうなずきました。

哲朗は、その夜も、月夜に輝く夜の海を、いつまでもいつまでもながめていました。



魚付き林 (気仙沼市唐桑 半造)

哲朗は、今まで以上に研究や仕事に励むようになりました。船員を集めるため、遠くまで足を運び、若者たちに、これからの漁法のあり方や漁業に情熱を傾けるよう、根気強く説いてまわりました。また、魚付き林や保安林としての植林の大切さを村民に訴え、半造や陣ヶ森に松や杉を植えさせました。気仙沼地方ではじめての蒸気船や石油発動機船の購入に踏み切り、遠洋漁業にも挑戦しました。不漁が続く厳しい時は、網元たちを説得し、資金や物資を集めて、地域の力を結集させるなど、常に先頭に立って働いていきました。

昭和八年、哲朗は六十八歳で亡くなりました。多くの事業を成功させ、県や村の要職も務めました。決しておごることなく、誰に対しても礼儀正しく、誠心誠意に接する姿は、生涯変わらなかつたといえます。目上の人にももちろんのこと、道で会った子どもにも帽子をとっていいねいあいさつをしたといわれています。

哲朗の思い描いた夢とその実現を支えた志は、この地の漁業振興と水産業発展の新たな道しるべを示したものでした。

鈴木哲朗

鈴木哲朗は、慶応二(一八六六)年、本吉郡唐桑村(現在の気仙沼市)に生まれた。新しい漁業の方法を研究し続け、水産業と地域の発展のために力をつくした。その功績が認められ、大正十四年に実業功労者として藍綬褒章を受賞し、天皇陛下に拝謁した。国立公園となり、全国的に知られる巨釜半造の風光明媚な美林も哲朗の功績が大きいとされている。

私財…
自分の財産。

果敢…
決断力に富み大胆なこと。

道楽…
本業以外のことや、趣味などに熱中して楽しむこと。

定置網…
一定の場所に網を常に設置して、魚を誘い入れてとる漁法。

凜とする…
態度や姿などがきりっとひきしまっている様子。

魚付き林…
繁殖や保護のために、海岸などにつくられた森林のこと。魚の群れが集まりやすい。

石油発動機船…
石油を燃料として動く船のこと。(発動機船のない時代は人力と風力で動かしていた。)

遠洋漁業…
数週間から数ヶ月、一年以上かけて大型漁船で、遠くの漁場で行われる漁業。

藍綬…
社会や国のために大きな功績のあった人に国からおくられる栄誉の一つ。

拝謁…
君主など高貴な人にお目にかかること。

風光明媚…
自然の景色が美しいこと。



先人の研究、挑戦が水産業へつながっている (サンマの水揚げ：気仙沼市)



園部 秀雄 (荻原晴子氏提供)

「秀雄」という名前から、みなさんは、男の人を思いうかべたのではないでしょう。しかし、園部秀雄は、薙刀一筋に生きた女性剣士なのです。この名は、薙刀の先生の名前「茂雄」の「雄」をもらい、男の人より優れた剣士なるようにとつけていただいたそうです。二メートルもある長い薙刀をあやつり、技を仕かける試合で秀雄が負けたのは、生涯一回だけと言われています。

秀雄（幼名たりた）は明治三（一八七〇）年、仙台藩士日下陽三郎の六女として上野目村（現在の大崎市岩出山）に生まれました。

たりたが一七歳のころ、人生を大きく変える出会いがありました。近くの町（古川）で薙刀を見たときのことです。そこには、薙刀を自在にあやつるりりしい女性剣士、佐竹茂雄の姿がありました。美しく優しそうな女の人が、するどい気合いで相手に立ち向かっていく姿に、たりたの胸はふるえました。

「おばあさま。私もあのようなすばらしい薙刀の使い手になりたい。薙刀を習いたいです。」

「私も若い頃は、身を守るために薙刀の稽古をさせられた。しかし、今は、薙刀の時代ではない。女らしい修業をすべきではないのですか。」父も薙刀の道を選ぶことに反対しました。



薙刀を振る秀雄 (荻原氏提供)

「このわしも、あれほど磨いた刀の腕を、今は薪割りに使っている。時代は変わったのだ。」（でも、あの薙刀は、戦うためだけにあるのだろうか。）

たりたは、猛反対する父をやつとのことで説得し、親元を離れ、佐竹鑑柳斎・茂雄夫妻のもとに入門することができました。薙刀を習いたくて入門しましたが、食事の準備、洗濯や掃除など、家事の一切を任せられ、練習の時間が十分に取れません。茂雄先生に技を教えるもらえるのは、ほんのわずかな時間でした。早朝に五百本、みんなが寝静まった夜に五百本、一日千本ずつ薙刀を振る一人稽古を毎日やることにしました。そして、めきめきと薙刀の腕を上げていきました。薙刀の技術ばかりではありません。茂雄先生が教えてくださる武家の女性としての心構えや作法、縫物、掃除の仕方などを、確実に自分のものにしようと思ひ、努力をおしみませんでした。たりたが「直心影流薙刀術の免許皆伝」を受け、「秀雄」という名前をもらったのは入門して二年半後のことでした。

秀雄は、遠くに住む父の顔を思いうかべながら、道場に立ち、薙刀をじっと見つめました。

大正七（一九二六）年ごろから、女学校では体育で薙刀が取り入れられるようになりました。このころには、秀雄の名は、負けを知らない女性剣士として全国に知れわたっていました。秀雄の薙刀を振る姿は、凛として美しく、切れのある動きや見事な技は、剣士たちをはじめ、多くの人たちに感動を与えました。

昭和の始めころには、薙刀の指導者が全国に必要となってきました。昭和十一年、秀雄は「修徳館」という薙刀の道場を東京に建てました。秀雄、



薙刀の指導を行う秀雄 (荻原氏提供)

負けたのは生涯一回だけ…
文献によっては二回とも言われている。

生涯…
生きている間、一生。

幼名…
幼児の期間につけられた名前。

直心影流薙刀術…
様々な薙刀術の流派の一つ。
「天道流」という流派もある。

凛とする…
態度や姿などがきりっとひきしまっている様子。

六十七歳の時でした。

薙刀を通して、心を磨く教育を広めていきたいという思いがなかったのです。

秀雄は、薙刀の試合で勝ったとか負けたとかということより、大事なものは、「一心に相手に向かうこと」という教えをより多くの若者たちに伝えたいと考えました。

道場の朝は五時から始まります。

「大先生、おはようございます。」

館生たちは、眠い目をこすりながら、我先に道場に集まってきました。

「おはようございます。」

秀雄は道場に入ってくる館生たち一人一人のあいさつに言葉を返していました。館生たちが姿勢を正して秀雄の前に並び、朝礼が行われます。目と目を合わせ、

「礼。」

朝稽古が始まりました。

「エイ、トオ。」

館生たちの気合に満ちた声が、道場にひびきわたります。稽古は、その後、午前と午後、夕食後の夜も続きます。とても厳しい稽古でした。秀雄は、薙刀の向きや手の振り、足の運びなど、一つ一つの動きを見守り、技の指導をていねいに行いました。

また、秀雄は、自ら薙刀を持ち、構えの姿勢を見せることが、何度もありました。秀雄の眼差しは、いつも真剣そのものでした。

ある日の朝礼の時のこと、

「夕べ、流しにたくわんが何切れか捨ててあった。たくわんも大根として土にあった時は生きていたのです。」

と、秀雄の声が道場に静かにひびきわたりました。

「薙刀の技術を磨くことだけが大事なのではない……。薙刀を持っている時だけが、修業ではないのです。」館生たちは、はっとしました。

(この子たちには、荷物にならない土産をもってふるさとに帰ってほしい。その土産をたくさんの人に分け与えてほしい。)

館生たちは、秀雄のこの願いや思いをしっかりと受け止めていました。厳しい薙刀の稽古でしたが道場を抜け出す者は、一人もいませんでした。「一心に相手に向かう」とは、どんなことに対しても、前を向いて精一杯行うこと、そして、やりっぱなしではなく物事が終わった後の心構え、身構えを大切にすること。薙刀で大切にすること「残心」という心得。

秀雄は、修徳館での毎日の生活から、このことを館生たちに伝えていたのです。秀雄は、道場を卒業していく教え子一人一人と、薙刀の相手をして門出を祝いました。その時、教え子たちの目からは、いく筋もの涙が流れていました。

戦後この道場は閉鎖されてしまいましたが、秀雄の教えを受けた者は、約三千人と言われています。昭和二十八年、秀雄は現在の「全日本なぎなた連盟」を築くことにも力を注ぎました。薙刀が学校教育の中でも発展していく道を開いたのです。秀雄は、九十四年の薙刀一筋の生涯を閉じました。

現在、学校教育では、「なぎなた競技」として、全国各地で練習会や大会が行われています。



卒業生と向き合う秀雄(右)(荻原氏提供)

園部 秀雄

園部 秀雄は、明治三(一八七〇)年、宮城県玉造郡上野目村(現在の大崎市岩出山)に生まれた。薙刀一筋に生き抜いた女性剣士であり、大正・昭和の時代は東京の女学校や道場「修徳館」で薙刀の指導を行った。礼儀や、誠実に謙虚な関わり方など、薙刀を通して心を磨く教育を目指した。

残心：
日本の武技で、攻めわざの直後も敵に備えて保つ心の構え。剣技で、相手をたおす打ち(突き)を決めてからなおとる静かな構え。弓術で、矢を射放してなお見定めるのに崩さない構え。

全日本なぎなた連盟：

戦後、武道が禁止されていたが、薙刀術復活のために関係者が集まり話し合いをもった。昭和三十年に連盟を発足。
「新しいなぎなた(なぎなた競技)」として歩み始めた。

高橋 英吉
(石巻市教育委員会提供)

丸いめがねの奥の優しいひとみ、おだやかで人なつっこい笑顔の男性は、高橋英吉という石巻市で生まれ育った彫刻家です。

英吉は、網元で遠洋漁業や大きなかんづめ工場を経営していた家の五男三女の末っ子として育ちました。小さなころから絵や工作が大好きで、宮城県立石巻中学校（現在の石巻高等学校）に入学してからは、授業中に机に立てた教科書の陰にかくれ、小刀で鉛筆やチョークに彫刻を彫ったというエピソードがあります。また、学校の机にも夢中になって彫った般若面が、現在の石巻高等学校にしばらく残されていたようです。

網元：
漁船や網を多く
持っていて、多く
の漁師を使ってい
る人。

般若面：
鬼の形相をした女
のお面。

中学在学中から、

「彫刻の勉強をしたい。もっと本格的に学んでみたい。」

と夢を描くようになり、東京の美術学校への進学を決意しました。家族は反対していましたが、母だけが英吉の夢を後押ししてくれました。英吉は家族に迷惑をかけまいと、荷物一つ持たずに上京し、昭和六（一九三二）年、東京美術学校（現在の東京藝術大学）彫刻科木彫部に入学することができました。

「この学校は彫刻家になるという自分の夢をかなえる場所だ。自分の心の中にあるもの、思いを形にしたい。」

英吉は、作品の制作に没頭し始めました。当時は、昔ながらの彫り方で仏像中心の彫刻が主流でしたが、英吉の彫刻制作に対する考えは少し違っていました。そして、完成したのが「少女像」という作品で、文展に出展し入選しました。この作品は、美術を学んでいる人たちから、



少女像（宮城県美術館所蔵）

「新しい形の彫り方だ」

と高い評価を受けました。

「これで少しは自分を支えてくれた母、応援してくれたふるさと
の皆を安心させることができる。」

英吉はそう思い、入賞後も作品を作り続けました。

しかし、新たに作品を作っても、英吉の心は少しずつくもって
いきました。

「だめだ……。まだまだ納得できない。」

毎日の生活が苦しいこと、軍隊に入りなさいという命令がいつくるかという不安もありましたが、何より一番は、なかなか自分が満足できる作品ができないのです。

「自分に足りないものは何だろう。」

前に進むことができず、不安とあせりばかりがつのるのです。英吉は真の彫刻が分からなくなっていきました。そんなとき、英吉の目にうかんできたのは、きらきらとかがやくふるさと石巻の海でした。

「帰ろう。石巻に。」

石巻に戻った英吉は、彫刻を「もっと学びたい」と思っていた最初の気持ちを出しました。ふるさとの海と向かい合ううちに世界中の海を見て想像を広げたいと思うようになり、知人に頼みこんで、船に乗せてもらうことにしました。その時、海を見つめる英吉の厳しい横顔には新たな強い決意がこめられていました。

南氷洋という遠くの外に出るクジラを捕まえる船に乗ることにしたのです。昭和十二（一九三七）年、二十六歳の時でした。捕鯨船での生活は、本当に辛く厳しいものでした。強い風と雪が激しく体に当たります。漁師たちは、せまい船室で寝泊まりして長い間家族に会うことができません。また、一度船に乗ると簡単には

文展：
文部省美術展覧会
の略称。戦前の日
本では最も注目を
集める美術展とし
て、美術の普及に
大きな役割を果た
したといわれる。

降りられず、病気やけがをしても病院には行けないので、命をかけたものとなりました。

英吉は、仕事が終わると船室に入り、捕鯨船の乗組員たちの姿を思いうかべデッサンするのです。皆が寝静まってからも描き続けました。自分の見たもの、感じたものがあふれるように出てきます。美術学校に入学した時決意した（自分の思いを形にする）という自分自身に問い続けた答えを探すように、描き続けました。

「あらゆる命のものは海にある。」

真っ白に輝く氷の山、海原で育まれた巨大なクジラ、夜空に輝く南十字星、この航海の経験で得たものは、英吉の目と心にしっかりと刻まれました。

「大自然の美しさと厳しさ。その中で感じた生命、苦しさ、辛さ……すべてをこめて表現したい。」
氷山の中をかきわけ、氷を押し破りながら海を突き進む捕鯨船は、英吉に大きな希望を与えました。
半年の長い航海を終え、英吉は、航海でたくさんの宝物を持ち帰りました。

東京に戻ってからは、アトリエにこもり、制作に取りかかりました。海で働くたくましい男たちを彫ったのが、「海の三部作」といわれる「黒潮閑日」「潮音」「漁夫像」です。最初の作品である「黒潮閑日」は文展で入選、続けて「潮音」は特選という出展作品の中で最高の賞を取りました。若き天才彫刻家として、英吉の名は世間に知れ渡りました。「潮音」を制作後、英吉は結婚して女の子が誕生しました。三部作の最後の作品「漁

「海の三部作」
(石巻市教育委員会所蔵)



黒潮閑日



潮音



漁夫像

夫像」が完成したころでした。

英吉は、家族を持ってますます制作に対する意欲が高まり、世界に通用するような作品を作りたいと気持ち

が動き始めました。また自分自身の追い求めるものへの新たな挑戦が始まったのです。
次の自分の目標が見つかりかけたころ、英吉のもとに、戦争で兵隊として出向くよう通知が届きました。英吉は、戦場へ向かう船内で、「不動明王像」を彫りました。拾った木の棒切れと釘のようなものをノミとして使い、こつこつと彫り続けました。しかし、これが英吉の最後の作品となりました。戦場に行くときでも、夢をあきらめず、自分の心の中にあるものや思いを表現し続けました。家族の幸せや無事を願いながら、生きて帰ってまた作品作りをしたいという強い思いをこめながら……。



不動明王像
(石巻市教育委員会所蔵)

英吉の作品は、展示されていた石巻文化センターが東日本大震災の津波で大きな被害を受けたため、新しい施設ができるまでの間、宮城県美術館に保管されています。限られた時間を精一杯生きた英吉が、夢を追い求めて制作した「生きた証」は、今も多くの人々に勇気と希望を与え、私たちを見守っているのです。

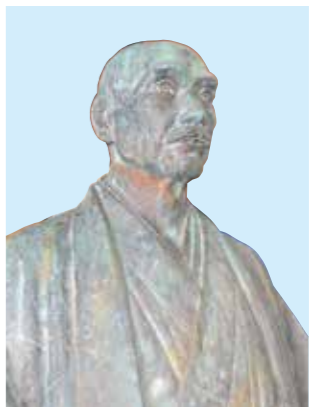
高橋 英吉

高橋 英吉は、明治四十四（一九一）年、牡鹿郡石巻町湊本町（現在の石巻市湊町）に生まれた。たくさんのお勧めされた木彫作品を制作し、若くして天才彫刻家と称えられた。海の三部作と呼ばれる三つの作品は、彫刻家としての地位を確立するものとなった。将来を期待されていたが、第二次世界大戦に出征し、ガダルカナル島で三十一歳の若さで戦死した。

航海…
船で海の上に行くこと。

証…
そのしるし。

出征…
軍隊の一員として戦地へ行くこと。



高橋 長十郎 (銅像)

「なんと美しい絹糸でしよう。」

「このつややかな絹糸を使ったドレスを着てみたいわ。」

明治三十三年(一九〇〇)年、ファッションの聖地であるパリに住む女性たちは、その絹糸を見て感嘆の声をあげました。絹糸の名前は「金華山」といいました。当時のパリは、エッフェル塔がシンボルタワーとして建造され、美しく着飾った貴婦人たちであふれかえっていました。そんな花の都パリで開催された世界中の物産を集めたパリ万国博覧会で、みごとグランプリと

いう世界一の称号を得た絹糸が志津川町(現在の南三陸町)で生産された生糸だったのです。生糸とは、蚕が作る繭から最初に取り出される絹糸のことをいいます。この糸は呼吸をしているので「生きてる糸(生糸)」と呼ばれ、高級な絹糸です。志津川町は、宮城県 of 北に位置する小さな町です。この町で作った生糸が海を渡り、当時世界の中心としてさかえていたパリで世界一と認められたのです。栄光の第一報を受け取った人物の名は、高橋長十郎といっています。

長十郎は、嘉永二(一八四九)年に伊達藩志津川村(現在の南三陸町志津川)に生まれました。生家は呉服商を営む商家でした。長十郎が幼いころの志津川村は、養蚕や漁業で生計を立てる家が多く、天候に左右され、苦しい生活を送る人々が多くいました。大雨が降ったり、冷夏で



パリ万国博覧会グランプリ賞状
(「ひこころの里・シルク館」所蔵：南三陸町)

聖地：特定の分野において重要な場所。

感嘆：すばらしいと感心すること。

志津川町：

明治二十八年十月三十一日町制で志津川町になった。平成十七年十月一日南三陸町となる。

養蚕：

蚕から繭を育て糸をとる仕事。

生計：

生活をしていくための方法。

呉服商：

和服用の織物などを扱う商売。

あったり、日照りであったりすると、蚕のえさの桑の葉を手に入れることが難しくなり、蚕も病気で育ちませんでした。また、小舟で漁をする漁業も、悪天候の日は船を出すことができず、村の人々は、天候がおさまるのをじっと待つことしかできませんでした。たとえ天候がおだやかであっても養蚕の仕事も漁業も十分な収入を得られず、毎日の暮らしを支えることで精一杯でした。幼いころから店先を通る疲れ切った人々の顔を見て育った長十郎は、いつのころからか、村民の一人として村全体が豊かになることを願うようになり、「この村を元気で活気のある村にしたい。そのためには、もっと新しい技術が必要だ。」と考えました。長十郎は、覚悟を決め、東京にある商法講習所(現在の一橋大学)に入学し、ふるさとのためになる新しい技術を学び取りたいと両親に願い出ました。この時代、地方から東京の学校に進学することは夢のような話でしたが、長十郎の強い思いは東京へと向かわせました。

長い間鎖国をしていた日本は、諸外国から工業技術の面で大きく遅れをとっていました。当時、明治維新を迎え、イギリスやフランスなどの先進国と肩を並べることができるよう殖産興業政策が取られていた時代で作った学校でした。その渋沢の話を知ることのできるめったにないチャンスです。長十郎は熱心に学びました。

あるとき、渋沢から指導を受ける機会が訪れました。「技術の向上や機械を取り入れた大量生産を目指すことが、殖産興業の目的ではない。」

長十郎は「新しい技術を学ぶことが町の繁栄につながる。」と考えていたのでとまどいました。

「では、何が目的のですか。」

「長十郎君。技術の向上で産業は発展し国は栄えるだろう。産業をおこした人も富を得るだろう。しかし、大事なことは、産業の発展を通して、そこに住むみんなが幸せになることだ。」



殖産興業政策：アメリカやヨーロッパの生産技術や制度を取り入れて工業を発展させる政策。

繁栄：さかになること。栄えること。

「住む人たちがみんなが幸せになること……。」

疲れ切った町民の顔を思い浮かべ、長十郎は渋沢の言葉を何度もつぶやきました。

「我が村の人々の幸せとは何だろう。」長十郎は故郷とつながる大空を見上げては考えを巡らすようになりました。帰郷する時、長十郎には、一つの考えがありました。それは、伊達藩の時代からの伝統産業である養蚕業の再興でした。より良質な絹糸を生産し志津川村の基幹産業に育てようと思ったのです。長十郎はその思いを実現するため、まず村に組合を作りました。それぞれの農家が紡いだ生糸を一手に預かり、組合がより光沢のある生糸に仕上げ直すことで、一定の品質を保った生糸を生産できるようになったため、志津川産の生糸の評判は高まっていきました。

長十郎は寝る間もおしんで次の策を考えました。「品質を落とさず、もっと大量に生産することはできないだろうか。たくさんの人たちが働くことのできる産業にすることはできないだろうか。」と考えぬいた末、長十郎は、村の人たちで最新のアメリカ製機械を購入し、工場を作ること提案しました。外国製の機械を使っている会社など日本中でもほとんどない時代です。それは小さな村の存亡をかける大きな冒険でした。

「機械はよく壊れるということじゃないか。アメリカ製の機械が壊れたらすぐに直せないだろう。」

「実際に使えるものかどうか分からないものを買うわけにはいかない。」

「第一、機械の値段が高すぎる。共同で買うなんてとんでもない。」

町の人たちは首を縦にふりません。機械を購入することへの不安や危ぶむ声でいっぱいでした。長十郎は、そうした声を最後までじっと聞き続け、そして一人一人に何度も粘り強く話しました。

「今、村を豊かにするために、この機械がどうしても必要なのです。私が一人で買ってもいいです。村の製糸業を盛んにすることが、村民みなを豊かにさせることになるのです。」



電気が灯る旭製糸株式会社
(「ひこころの里・シルク館」所蔵：南三陸町)

長十郎は、来る日も来る日も足を棒にして話をしに回りました。その姿を見た村の名士たちは、次第に心を動かされ、長十郎の話聞き入れてくれました。

明治二十一（一八八八）年、長十郎が三十九歳の時です。ついに大規模な機械を装備した旭製糸株式会社が設立されました。日本初の機械式座繰り製糸工場の誕生です。ですが、工場ができたばかりのころは、思うような製品ができず苦難の毎日でした。長十郎はあきらめることなく、品質の向上を目指し、工場の人々と力を合わせ技術の改良を進めました。

そうした苦心の末にできあがった製品が「金華山」という世界最高峰の絹糸だったのです。

「おらほの町の生糸が世界一になった。」

「世界一の製品は、私らが作っているんだ。」

「がんばってきて、本当によかったなあ。」

小さな町は、世界的な栄誉の知らせに歓喜の渦に包まれ、みんなの笑い声が響き渡りました。華やいた人々の顔を見た時、長十郎のほおを一筋の涙が伝い落ちました。

やがて工場は四百五十人も人が働く大会社に成長し、製糸業では全国でもトップクラスとなりました。長十郎は、会社で得た富を、これからの若者を育てる中学校や高等学校を作るために使いました。

「みんなが幸せになること。」長十郎の心にはいつもこの言葉があったのです。

高橋 長十郎

高橋 長十郎は、嘉永二（一八四九）年、伊達藩志津川村（現在の南三陸町）に生まれた。養蚕の盛んな志津川に日本初のアメリカ式機械を導入した旭製糸株式会社を創立。生産した生糸は、パリ万国博覧会に出品され、グランプリを得る。後にこのような功績により奥州生糸の産地で「製糸業発展の父」と称されるようになる。町の人々は長十郎の銅像を建て偉業をたたえた。東日本大震災で長十郎の銅像は津波で流出したが、その後奇跡的にも発見され、これからの町の復興を見守るため、新公園に移設される予定である。

帰郷…
故郷に帰ること。

再興…
再びさかんにすること。

基幹産業…
中心となる産業。

光沢…
物の面のつややかさ。つや。

存亡…
長く続くか、ほろび去るかということ。

名士…
世間に知られている人。

旭製糸株式会社…
創設者は、高橋長十郎、佐藤久作、和泉秀次郎ら地元の名士たち。

座繰り…
繭から糸を集めて一本の生糸にして糸わくに巻き取る器具。



豊かな自然、豊かな海の恵

み (志津川湾：南三陸町)



只野 文哉
(岩沼市教育委員会提供)

「自分でやりたいと思うことを決意する。自分はこういう道を進みたいと決意する。やさしい道を歩くのではないのですから、決意しないとだめなんです。」

文哉が『ミクロの世界へようこそ』という演題で出身校の子どもたちに講演したときの言葉です。

只野文哉は、明治四十(一九〇七)年、岩沼町(現在の岩沼市)で、農家の九人兄弟の二男として生まれました。家を継ぐ長男ではない文哉は、学校卒業後は生まれた家を出て自立しなければなりません。十四歳になった文哉は、どのような仕事にしようか考える日々を送っていました。そんなある日、担任の先生から『子どもが聞きたがる話発明発見の巻』という本を読むようにすすめられました。文哉はその本を読んで、アメリカでは日本では見たことのない自動車が走り、飛行機が空を飛び、鉄道が大陸を横断していることに大変驚きました。このような機械技術が一つの大きな国を動かす力になっていることを知り、日本にもこういう時代がきつと来るにちがいないと考えました。

「私の仕事はこれだ。これしかない。」

文哉の心の中で、自分も人の役に立つようなものをつくる技術を身につけ生きていけたら、という思いが強くなり、わき上がってきたのです。そしてその思いが文哉の決意となりました。

文哉は、東京の夜間高校などで機械や電気についての専門的な勉強にはげみ、卒業後には逓信省電気試験

所(日本で最初の電気研究所)で、電子顕微鏡の仕組みの基となるオシログラフの研究に取り組みました。その後、三十三歳のときに、日立製作所へ入社し、電子顕微鏡の開発担当になりました。当時、電子顕微鏡は世界で初めてドイツで発明され、これまで見ることでできなかったウイルスの撮影に成功するなど話題となっていて、日本でも開発の動きが起こっていたのです。

文哉は、ウイルスを見ることについてずっと関心をもっていました。それは、子どもころにクラスの友達がインフルエンザウイルスやコレラ菌による病気(伝染病)で亡くなっていたからです。(見えなかったものが見えるようになれば、新しい研究方法が見つかるかもしれない。)

文哉は、希望を胸に電子顕微鏡の開発に挑み始めました。そして二年の月日をかけ、昭和十六(一九四一)年に国産第一号の電子顕微鏡「H.U.1型」二台の組み立てを完成させました。しかし、実用化するためには、観察するものをはっきりと映し出して写真に収める必要がありました。文哉がその後、写真の撮影に成功するまでには大変な苦勞が待っていました。

文哉は、医薬品などで使われる粉(酸化亜鉛粒子)を、一万倍に拡大して撮影していましたが、どうしてもピントが合いません。ぼやけた写真しか撮れず、連日失敗を繰り返していました。

それでも、文哉はくじけることなく
「実験こそ我が命。」

と自分を奮い立たせ、食べることも寝ることも忘れて写真を撮り続けました。失敗をするたびにその原因を探り、ありとあらゆる方法を試してみるのが、失敗をただただ繰り返すばかりです。文哉は、ぐっとくちびるをかんで、窓外の景色をぼんやりとながめるのでした。

そんなある日、撮影した写真に粉の結晶が鮮やかにはっきりと映っていたの

電子顕微鏡…
光の代わりに電子ビームを当てて拡大する顕微鏡。ウイルスなど千分の一ミリより小さなものまで観察できる。

ミクロ…
非常に小さいこと。

逓信省…
そのころの郵便、電信、電話などを管理した国の役所。
オシログラフ…
電気信号を観測する測定器。心電図計などに利用される。

実用化…
実際に使えるようにすること。

結晶…
ものを表す一番小さな単位(原子)が集まったもの。雪の結晶など。



です。

「やった、やった、ついに撮れたぞ！」

文哉は、研究室の廊下に飛び出して大声で叫び、一人で万歳をしました。響き渡る自分の声にふと我に返った文哉が見渡すと、辺りは真っ暗でした。そうです、撮影に成功したのは真夜中だったのです。文哉は撮影に夢中になるあまり、真夜中になっていたことにさえ、気づかなかったのです。いつもは聞こえる列車が通る音もなく、しんと静まり返っていました。

(そうか、そういうことだったのか……)

文哉は、はっとしました。ピントが合わない原因は、研究所の近くを通る列車の線路から伝わってくる千分の一ミリメートル程度のほんのわずかな振動だったのです。これは、人が感じないほどの弱い振動なのですが、目に見えない小さなものを観察する電子顕微鏡の撮影には大きな影響を与えていたのです。だれもない研究所、列車が通らなくなった線路、いつもとはちがう振動のまったくない環境が撮影を成功させたのです。原因が明らかになり、撮影される写真はとてよくなりました。文哉の次の目標が決まりました。

「H-U-1型は横型で振動に弱かった。振動に強い縦型の2型を作ろう。」

設計のポイントをつかんだ文哉はさっそく開発に取りかかりました。電子顕微鏡の実用化への見通しがついたことで、医学、理学、工学などの各研究者からは、ウイルスや細菌、金属の結晶など、見たいものの要望が次々と出されました。

「2型の電子顕微鏡で、今まで見られなかったものをもっともつと見ることができるようにするぞ。」

文哉の思いは大きくふくらみました。しかし、当時の日本は戦争への道を歩んでいて、電子顕微鏡の開発は簡単なことではありませんでした。開発に必要な物資も手に入りにくくなりました。それでも文哉は、これまでに以上に研究に力を注ぎました。戦争中で十分な食べ物もなく、栄養不足や目の使い過ぎで、体は悲鳴を上げていましたが、文哉の手が止まることは決してありませんでした。



縦型 HU-2 型の電子顕微鏡と只野文哉
1942年 (岩沼市教育委員会提供)

昭和十七(一九四二)年、ついに念願だった縦型の電子顕微鏡「H-U-2型」を完成させました。文哉は、その後も電子顕微鏡の改良を重ね、3型、4型と、より性能のよいものへ進化させていきました。

昭和二十三(一九四八)年、文哉が四十一歳の時、これまで研究してきたことを「電子顕微鏡の試作とその応用」の論文にまとめ、

東京大学から工学博士の学位を受けました。日本で初めての電子顕微鏡博士が誕生した瞬間でした。

現在、岩沼市では毎年「只野文哉記念科学技術奨励事業作品展」「理科大好きフェスティバル」が開催され、多くの小中学生が参加しています。また、市内の二つの小学校には電子顕微鏡が設置され、今も文哉が追い続けた夢への扉が開かれています。



岩沼小学校、岩沼西小学校に設置されている
電子顕微鏡 (日立ハイテクノロジーズ)

只野文哉

只野文哉は、明治四十(一九〇七)年、岩沼町(現在の岩沼市)で生まれた。電子顕微鏡の研究に力を注ぎ、国産第一号の開発に成功した。四十五歳の時には、その功績をたたえられ名誉町民に選ばれた。六十五歳で退職後九十五歳になるまで三十年以上もの間、岩沼市内の小中学校などで子どもたちの夢発見のための講演を続け、話を聞いた子どもたちは平成十五(二〇〇三)年までに三万八千人を数えた。

理学：自然科学。特に物理学。

工学：

役に立つ生産物を得るために、計画・設計・製造・検査の段階に基礎的科学的に応用する技術のこと。

物資：

食べ物や着る物など生活に必要な品物。

性能：

機械や器具などがもつ性質と働く力。

論文：

研究の成果などを書き表した文章。

千葉 あやの — 藍染の技術を守る —

「むかしのまんま、むかしのまんま」

のどかに歌うように話していたのは、藍染という仕事でただ一人、人間国宝に指定された千葉あやののです。仙台から北へ六十キロほど離れた栗原郡文字村（現在の栗原市栗駒）で生まれて農家に嫁ぎ、「正藍冷染」と呼ばれる特別な染色の技法を子や孫へと伝えました。その功績が称えられ、昭和三十（一九五五）年に人間国宝に指定されました。

この染色の技法は平安時代に中国から伝わりました。この地区では、千葉家以外にも何軒か染め物をしていましたが、昭和二十五（一九五〇）年ごろには、千葉家を残して他はみんなやめてしまいました。しかし、そのころ、藍染についての調査が行われたことがきっかけとなり、日本に残っている最も古い染色の技法であることが認められ、人間国宝に指定されたのです。

では、どんなことが特別な染め方だったのでしょうか。「正藍冷染」とは、藍という植物を育て、自然発酵させて染色を行う草木染めです。ふつうは火で温めながら染めるので、一年中染めることができず。しかし、栗駒だけに伝えられてきた「正藍冷染」は全く熱を加えることなく自然発酵させるので、気温が上がる六月から七月ごろのわずか一か月半の期間だけしか染められません。そのため、天候や気温に大きく影響され、



麻布の糸を作る千葉あやの（千葉家提供）

大変な手間がかかるのです。さらにおどろくことに、藍を育てることから染めるまでのすべての作業を自分の家で、しかもたった一人で行っていたというのです。あやのの染め方や藍染の作品は極めて価値があるものだと高く評価されたのでした。栗駒山にまだはつきりと雪が残る四月。雪解け水が流れる迫川のそばに、あやのが住む家があります。その周りに、田植えよりも早く藍の種をまくことからあやのの仕事は始まります。八月と九月に、育った藍を刈り取り、葉を天日で乾かします。これを手でもみ、再び天日で乾かして冬まで待ちます。厳しい寒さのなか、三か月ほどかけて発酵させ、おひたしのようなになった葉をうすでついてつぶし、白玉のように丸めて「藍玉」を作ります。これを使って染水を作り、ようやく次の年の六月から始める染めにたどり着きます。



乾燥させている藍の葉（千葉家提供）

また、染めるための麻布も、四月に種をまいて育て、七月に収穫した麻を乾燥させ、糸を作って織り上げていきます。麻布を染水につけ、風に当てながらきれいな色が出るように染め上げていきます。そして、迫川の水で余分な青い染料を流します。洗えば洗うほど、美しい藍の色になります。

このように、千葉家で藍染を受け継ぐ人は、天候や気温にあわせながら一年を通して藍染にたずさわっているのです。まだ真っ暗な朝の三時。あやのは眠いのをがまんして、仕事を始めます。藍染の作業をする時期は、天候や作業の進み具合に合わせて、朝早くから仕事をしなければならぬこともあるのです。作業をするのは、あやの一人ですから、自分がやらなければという思いで、藍染を守るために何とか続けていました。けれど、この仕事は決して楽ではありません。一軒、また一軒と、藍染をやめてしまう家がある中、藍の色で染まる指先を見つめながら、静かに考えこむ日々が続くようになりました。そして、とうとう藍染をするのはあやの一人になってしまいました。

ある日、東京国立博物館で館長を務めていた山辺知行が、あやのの藍染を知り、千葉家を訪ねてきました。

藍：タデ科の一年草で、高さ50〜80センチメートル。葉から藍染の染料をとることが出来る植物。

人間国宝：演劇、音楽、工芸など芸術的な価値が高い技のうち、特に文部科学大臣によって指定された技を高いレベルで身につけていると認められた人。

うす：きねを用いてもちをついたり穀物をくだいたりする道具。木や石を丸くえくつた形。

山辺が藍染の技術のすばらしさを説くと、あやのは、

「自分ひとりではとても続けられない。」

と、藍染を続けようか迷っていることを打ち明けました。

「やめてはいけないよ、あやのさん。あなたがやめたら後はだれもいなくなるのだよ。」

と山辺は熱心に説き続けました。藍染をやめようかと悩んでいたあやのでしたが、山辺の懸命な思いを受け止め、この栗駒の地で先代から受け継いだ藍染の技術を守りぬこうと決めたのです。

それから五年が経った昭和三十(一九五五)年、染色の歴史のなかで貴重な技術であるということが認められ、藍染の世界でたった一人の人間国宝に指定されました。

昭和三十二(一九五七)年二月十日。あやのの家から火が出ました。その火は家を燃やし、仕事場も、仕事に必要な道具や材料も、いっさいを無くしてしまったのです。

「ああ、すべてが無くなってしまった。」

そう肩を落とし、途方に暮れてしまいました。しかし、ふと思いついたようにふところに手を入れ、何かを取り出しました。それは、偶然にも肌身につけていた藍の種でした。

「よかった。これで藍染を続けることができる。」

その小さな種はあやのにとって希望の種でした。幸運なことがもう一つありました。近所の人々が「藍玉」の入れ物を米びつとまちがえて家から持ち出していたのです。この火事で多くのものを失ってしまいましたが、その後、人々の協力を得て、迫川の上流に、新しく家や仕事場を建てることができました。あやのは、新しい家



の周囲に、残された藍の種をまいて藍染を続けました。あやのの藍を思う気持ちと努力、そして周囲の人々の願いが重なっていったのでした。

あやのの教えは、子や孫へと受け継がれ、地域の人に支えられながら、今でもすべての作業を昔からの技法で続けていて、全国各地から注文が入ります。藍染を伝承したあやのの孫嫁であるまつ江は、

「おばあちゃんには、手をきれいにしなさい、染めるときは、はきものを変えなさい、などたくさんのお話を教わりました。これを守らないと、藍の色がきれいに出ないからね。」

と、あやのやまつ江自身が染めた作品を見ながら、こう続けました。

「『お客さんが来なくても、売れなくても、藍染だけは続けなさい』というおばあちゃんの教えも何とか守ってきました。」

あやのが大切にしてきた千葉家の「むかしのまんま」の教えを守りながら、今日も藍とともに生きている人がいます。



千葉あやのの孫嫁(まつ江)の作品

千葉あやの

千葉あやのは、明治二十二(一八八九)年、栗駒郡文字村(現在の栗原市)で生まれた。「正藍冷染」の伝承者として技法を受け継ぎ、昭和三十(一九五五)年に人間国宝に指定された。藍を栽培し、熱を加えず自然発酵させて染める技法は、手間もかかりやめてしまう人がたくさんいたが、昔から受け継がれている技法を守り、染め物を作り続け、それを子や孫へと伝承した。

伝承：
古くからの技や文化を受けついで伝えていくこと。



千葉 亀雄
(美里町近代文学館提供)

めていききました。

千葉亀雄は、父の実家がある不動堂村（現在の美里町）で幼少期を過ごしました。父を早くに亡くしていたので、母が一人で農業や裁縫をして、苦しい生活を支えていました。読書が趣味だった母や学問好きで教師をしていた父の影響もあって、亀雄は読書が好きになっていききました。貧しかった亀雄は、小学校の校長先生や地域のお寺の住職に学んだり、本をたくさん持っている人の家を訪れては毎日のように本を読んだりして、知識を深

明治二十四（一八九一）年、十三歳になった亀雄は、仙台に出て印刷屋で働き始めました。仕事の内容は原稿の配達や受け取りでした。亀雄は原稿が出来上がるのを待つ時間に、活版印刷の文字並べを手伝っていました。周りの同年代の子どもにはとても読めない難しい字をすらすらと読み、そこにいた大人たちを驚かせました。それが、新聞社「仙台新報」の社長、鈴木太郎作の耳にも入り、優れた才能を買われた亀雄は鈴木家に迎えられました。鈴木の家には亀雄の読書欲を満たすのに充分なほどたくさんの本があり、亀雄は少しの時間があれば、夢中になって読書ばかりしていました。一時は、宮城県尋常中学校（現在の仙台一高）に通わせてもらっていましたが、鈴木の仕事の都合で飯野川村（現在の石巻市）に引越すことになり、亀雄も学校をやめて一緒に行くことになりました。しかし、どこへ行こうとも亀雄の読書熱が冷めることはなく、すぐにその地域の文学青年を入つてに探し出し、そこに通いつめて本を借りては読むという生活を続けました。

幼いころからたくさんの本を読み続けてきた亀雄は、将来、文学の道に進みたいという思いを強くしていま

した。鈴木はそんな亀雄の才能を認めつつも、（文学を仕事にして生きることは難しい。優れた力を何かの仕事に生かすことはできないか。）と考えていました。そこで、鈴木は亀雄を呼び、次のように話しました。

「亀雄、私はいざれ銀行を経営したいと思っています。それをお前にも手伝ってもらいたいのだが。」

「えっ、銀行ですか。私は銀行経営に関わることはあまりよく分かりませんが……。」

「それは分かっている。だから、お前には仙台の私の親せきの家から銀行経営について学べる学校へ通ってもらおうと思っている。どうだ。」

「……。」

「お前は本を読むことが好きで、文学の道に進みたいと思っているだろうが、そんなにあまい世界ではない。」

「……。」

「どうだ、亀雄。」

「……。はい、分かりました……。」

亀雄は言われたとおり仙台の学校へ通うことにしました。その学校への登校初日、亀雄はずつとうかない顔をしていました。授業中も先生が話す言葉は全く頭に入ってきません。翌日から、亀雄の姿はその学校にはありませんでした。亀雄は学校へ行くふりをして、図書館に通い本を読んでいたのです。数か月後、ついにその事実が鈴木たちに知られてしまいました。そのとき亀雄は心からの謝罪をしながらも、このときとばかりに自分の思いを熱く語りました。

「私は文学の道で身を立てたいのです。今までお世話になったみなさんを裏切るのはとても心苦しかったので



活版印刷：
金属や木に文字を彫り込み、それを並べたものに塗料をつけて印刷すること。

すが、もう仙台にいても私には開くべき道がありません。どうか私を東京に行かせてください。必ずその道で身を立て、みなさんからいただいた恩に報います。」

普段はおとなしい亀雄の必死な様子に鈴木たちも心を動かされ、亀雄が東京へ行くことを認めたのでした。

東京に出た亀雄は新聞配達や牛乳配達の仕事をしなが、読書や執筆活動に力を入れました。それから三年後、雑誌社の記者として採用されたのを手始めに、二十代の後半には新聞社に勤め、ジャーナリストとして幅広く活躍するまでになったのです。

幼いころからの読書で身につけた広い知識と豊かな感性を武器に、読者の求める新しい紙面作りを心がけました。特に四十歳を過ぎてから勤めた「読売新聞」では、社会部長兼文芸部長という大変重要な役割を任せられました。

そのとき、亀雄は有名作家の作品ばかり載せていた新聞の文芸欄に、無名の作家でもよいと思った作品を掲載するという今までになかった試みをしたのです。このことは多くの新人作家に夢をもたせ、文学界に新風を吹きこんだ一方で、一部の有名作家や文学者には反感を抱かせました。ある大学教授は次のように亀雄に迫りました。

「どうしてきみのところの新聞は、無名の作家の作品を載せるのだ。文芸欄の歴史をおとしいている。」

「あなたは新聞に載せた作品をすべて読んだのですか。」

「いや、読まんよ。無名の作家の作品なんて読む気にならん。有名作家の作品を載せれば読もう。」

亀雄はそれに勢いよく反論しました。



身を立てる…
その仕事によって生活する。

ジャーナリスト…
新聞・雑誌などの記者、編集者。

文芸…
詩や小説など、言語表現による芸術・文学。

おとしめる…
おとつたものとして見くだすこと。

「あなたは有名な作家しかよい作品を書けないと言っているのですか。作品の良し悪しは、作家が有名か無名かでは決まらないはずですよ。」

このような批判を受けたり、新聞への執筆を断られたりしても、亀雄は一切その方針を変えませんでした。その後もさらに新人作家の発掘に力を入れ、その結果、多くの若い作家が亀雄によって文学の世界へ送り出され、作家として歩み始めることになったのです。この亀雄の功績が、相当高い教養を必要とし、一部の人のためのものでしかなかったその当時の日本文学を、広く多くの人に読まれるものへと変えることにもつながりました。

亀雄の死後、亀雄によって育てられ世に送り出された若い作家たちは自分たちが書いた作品の売り上げて、亀雄の功績をたたえる石碑を建てました。そこには「文学を愛し、真心のこもった行いをする」という亀雄の生き様を象徴する『好學篤行』という言葉が刻まれています。

多くの人々に優れた文学を提供し、文学の大衆化に貢献した亀雄の生涯を美里町の近代文学館で見ることが出来ます。あなたも近代文学館を訪れて、千葉亀雄の功績にふれてみませんか。



千葉亀雄記念文学室 (美里町近代文学館)

千葉 亀雄

千葉 亀雄は、明治十一（一八七八）年、山形県酒田町（現在の酒田市）に生まれた。ジャーナリストとして雑誌「文庫」の記者から出発し、日本、国民、時事、読売、大阪毎日、東京日日の各新聞社の主要ポストを務めながら、社会欄の開拓、文学や児童・婦人問題についての評論、海外文学の紹介、そして、新人作家の発掘・育成に力をつくした。また、文芸評論家としては、横光利一、川端康成らの文学の傾向を敏感にとらえ、「新感覚派」と名づけたことでも有名である。

功績…
世の中のために、すぐれた働き。

大衆化…
社会の大部分をしめる多くの人々に広がること。



永澤 才吉 (永澤家提供)

蛇口を回せばきれいで安全な水が出る。今の日本ではそれが当たり前になりました。でも考えてみてください。自分の家に水が届くまでには、どのくらいの時間がかかっているのでしょうか。どの家庭でも水が出るようになるまでにはどのような苦勞があったのでしょうか。

永澤才吉は、天保十一(一八四〇)年、古川に生まれました。才吉は若いころから、いったんやると決めたら後には引かない性格で、何事も最後までやりとげる強い意志をもっていました。才吉の働きぶりは、人々の間でうわさになるほどでした。

さて、才吉が生まれた古川はどんな土地だったのでしょうか。今では大崎市と呼ばれ、そこに広がる大崎平野はおいしいお米の産地として有名です。しかし、昔は飲み水に苦しんだ歴史があったのです。

明治時代のはじめごろ、古川は村でした。村の中心部を流れる緒絶川の水は主に田んぼや畑に使われていました。飲み水にするには汚れがひどく、当時の人々は井戸をほって水をくんでいました。しかし、井戸からくんだ水も、金気水と言われる黄色くにごった水でした。古川村の人々は口をそろえて、

「飲み水を何とかしなくては。」と叫びました。

そんな中、明治十二(一八七九)年、全国的に大きな事件が発生しました。コレラという恐ろしい伝染病の流行です。コレラはコレラ菌という病原菌によって起こる病気で、汚れた水や食物を通して感染すると考えられていました。全国で十六万人が感染し、そのうち十一万人の人々が亡くなったのです。村の人々はコレラ

を防ぐためには、きれいな水が必要だと考えました。古川村の議会では水道工事することを決めました。このころに古川村の戸長に選ばれたのが永澤才吉でした。明治十五(一八八二)年、才吉が四十代半ばのことでした。

「これで水道工事が進められる。水道を作って古川の人々を救うのだ。」

才吉は、水道によって人々の生活や古川の未来を守ろうと決意しました。しかし、その予算は、古川村の約四年分に当たる、とてつもなく大きなものでした。その費用の大きさから、村民の反対運動が起こりました。「そんなお金をどうやって用意するんだ。村人の暮らしはどうなるんだ。」

悪いことは重なるもので、あの恐ろしいコレラが再び流行しました。古川村でも百四十人もの人が感染し、六十人以上の人が亡くなりました。水道工事を進めるどころではありません。人々の反対の声はますます大きくなるばかりでした。

「コレラの原因は汚れた水にあるのだ。水道ができれば人々を助けることができる……。」

才吉は人々に水道の必要性を強くうたえました。水道の完成のためには時間もお金もおしくありませんでした。才吉は自ら三千円(今のお金で約七千万円)もの財産を投じて、水道工事の設計を進めました。議会の賛成は得ましたが、工事を進めるには村の人々を納得させなくてはなりません。不満の声はなかなか収まらず、反対する人々から陰口を言われ、時には命の危険を感じることもあったほどでした。

才吉は、費用節約のために材料を安くする工夫を提案したり、県令(現在の知事)に直接申し出て、古川の水道工事を進めることを強く願い出たりす



天保…江戸時代の年号。

金気水…鉄分が含まれた水。

戸長…今の市町村長に当たる人。

るなど、できることは何でもやりました。村の人々にもねばり強く語り続けました。たった一人で、来る日も来る日も説得を続けるのでした。

「必ず、必ず分かってもらえる日が来る……。」

才吉の村や人々の幸せを思う気持ちは、少しずつ人々の心を動かし始めました。真剣な才吉の姿に、人々の心も変わっていったのです。才吉の呼びかけに賛同する人が次第に増え、多くの人々が集まって「水工会」という会が結成されました。集まった人々がお金を出し合い、四千四百円（今のお金で約一億円）というお金も用意することができました。

いよいよ近代的水道工事が始まりました。工事は簡単ではありませんでした。源水から取った水は人工的な池に導かれ、その水を三段階のろ過を経てきれいにしてから村の中心部に送るといふ近代的な仕組みでした。村の中心部までは約八キロメートル。そこまでを一本の長さが約六十センチメートルの管でつなぐのです。それは気が遠くなるような工事でした。しかも、費用は当初の予算をはるかに上回りました。村の人々から、再び反対運動が起こることもありました。それでも才吉は最後まで人々を説得したり、厳しい環境の中で工事を続ける人々に食料を分け与えたりしながら、水道の完成を願いました。村の人々を救いたいという才吉の気持ちは、最後までゆらぐことはありませんでした。

そしてとうとう工事が完了したのです。明治十七（一八八四）年、三月のことでした。

いよいよ水が通るといふ日、才吉は村の中心部で水が流れてくるのを待ちました。水が出る予定の時刻は午後三時。しかし、水はなかなか通じません。

一時間経っても水は流れません。二時間……三時間……三時間半……。

とその時、井戸の中にこう音がひびきました。水は白いしぶきをあげて勢いよく流れ出しました。「水だ。水が出たぞ。」

周囲から大歓声（だいかんせい）がわき起こりました。村の人々の喜ぶ姿があふれる中、才吉は、体のふるえを押さえることができずじまつた。そして静かにこぶしを握りしめるのでした。

その時のことを後に才吉はこう語っています。

「一時間、二時間と緊迫（きんぱく）の時は流れたが、その兆候（ちようこう）なし。別の井戸をのぞいたがこれまた兆候なし。待つこと三時間半、夕闇（ゆふやみ）迫る頃、突如（とつじょ）、井戸内に異様な音（いようおん）鳴り、『岩（い）をも通す』のことわざどおり、水が白い奔流（ほんりゅう）となって流れ込んできた時、思わず感動（かんとく）の涙堪（なみだ）えることができず。」

才吉は人々の幸せと古川の発展（はってん）を願ひ続けました。才吉は九十七歳でこの世を去るまで、古川の水道を見守り続けました。

今も、古川の水道は、人々が安心して飲めるおいしい水を送り続けています。



兆候：
前ぶれ。

奔流：
いきおいのほげしい流れ。

堪える：
がまんする。

永澤 才吉

永澤 才吉は、天保十一（一八四〇）年、古川（現在の太田市）に生まれた。コレラの流行をきっかけに水道の必要性を強くうったえ、人々の幸せを願ひ続けながら、多大な工事費用の問題や住民の反対運動など数々の困難を乗り越えて、宮城県で初めて水道設備を完成させた人物である。



自然が織りなす秋の紅

葉 (鳴子峡：大崎市)



日野 藤吉
(利府町教育委員会提供)

「いったいどうしちまったんだ。」

「せっかくの美しい田んぼを……。バカ者だ、藤吉さんは。」

藤吉が、梨の木の苗を植え始めたときの村人たちのことばです。

日野藤吉は、嘉永二（一八四九）年、利府村（現在の利府町）に生まれました。利府村森郷にある農家にむこ入りした藤吉は、家業の米づくりに熱心に取り組むまじめな青年でした。そのころの利府の農家の多くは、収入のほとんどを米づくりに頼っていました。その当時、米づくりでは、日照りや長雨、低温による不作の年があり、農家の生活はけっして楽ではありませんでした。

ある年、天候が悪く米はもちろん他の農作物も不作で、村人たちは売るための米どころか、自分たちが食べるものにも不自由するほどでした。これまでにいねいに肥料を加えて何度も耕して土づくりをしたり、雑草や水の管理に気をつけて田を耕したりして、どの農家よりも手間をかけてまじめに米づくりに取り組んできた藤吉も、米が取れずすっかり気落ちしていました。

「気晴らしにつりにでも行くか……。」

つりが好きだった藤吉が石巻につりに行ったときのことです。途中、ふと近くの畑を見ると梨の木があるのに気づいた藤吉は、その木においしそうな実がたくさんっているのを見つけ、腰がぬけるほどびっくりしました。

「米が取れなくても梨は実るのか。」

その立派な梨の木に近づき、梨の実を食い入るように見つめて藤吉は考えました。

「梨は米ほど天候に左右されないということか。しかも、売れば現金がすぐに手に入る。それなら、利府にも梨を植えることはできないだろうか。でも、どこに……。どうやって……。」

それからというもの、藤吉は我が子のように大切に世話をして耕してきた田んぼを、何日も何日もじつと見つめる日々が続きました。

ある日、藤吉は自分の水田の半分をつぶして、梨の苗木を百五十本植えました。その翌年も百五十本植えました。ふだんからまじめでがんこ者とさえいわれていた藤吉が、だれよりも大切に手入れしてきた田んぼをつぶして梨の苗木を植えている姿を見て、村の人たちはとてもおどろきました。

「いったいどうしちまったんだ、藤吉さんは。」

「あんなに大切にしていた田んぼを……。失敗したら田も畑もだいなした。」

村人たちは、藤吉の姿を冷ややかな目で見つめていました。藤吉が三十三歳のときでした。

藤吉が選んだ梨栽培の道のりは、決して平たんなものではありませんでした。『桃栗三年柿八年』といわれるように、果物は実がなるまで長い年月がかかります。梨はさらに長い年月がかかるといわれています。石巻の友人に栽培方法を学んだ藤吉は、米づくりの時にもましてまじめに働きました。米が収穫をむかえる秋には、梨の木が大きく育つように肥やしをまいて土づくりをし、冬になると千葉から梨栽培の農家をまねいて剪定の技術を学びました。一つ一つの実に日を当たりやすくするように棚づくりをするのも冬の仕事です。米づくりの農家がひまなときも、梨栽培は休むひまがありません。そして春になって、ほかの農家たちが田植えを始めるころは、梨の花を一つ一つ取っては花粉を取り出し、花粉づけをし、小さい実を切り落として大きい実だけ

桃栗三年柿八年
： 芽が出て実がなるまでに、桃と栗は三年、柿は八年かかるということ。また、何事も成し遂げるまでにはそれに見合った年月が必要だということ。

剪定：
木の枝を切り、形を整えたり、風通しを良くすること。
棚づくり：
支柱などを立てて枝を高い位置で横に広げていく作業。

を残す摘果の作業を行いました。害虫がつかないように行う消毒は、手間もお金もかかる大変な作業でした。
(本当に梨づくりができるのだろうか。)

(いや、米が取れなくても梨は実っていた。)
けっして裕福ではない農家に生まれ、村人の苦しい生活ぶりもよく分かっていた藤吉は、この梨づくりを成功させることが村人のためになると考え、根気強く梨づくりに向き合いました。鋤を持つ手は、いつしか血がにじむようになっていました。

五年たち、十年たち、藤吉の植えた木は大きく育ち、大きな実がたわわに実るようになってきました。藤吉は、その梨を背中のかごに入れて背負い、塩竈まで売りに行きました。藤吉の梨は、甘くて歯ごたえがあつておいしいと評判になり、飛ぶように売れました。

「藤吉さん、梨づくりを教えてくださいませんか。」
「道具を貸してもらえないか。」

藤吉の成功を見て、村の人々も梨づくりを始めるようになりました。中には、藤吉のことを「バカ者」あつかいした村人も、藤吉のところに来るようになりしました。藤吉はわけへだてなく村人に梨づくりの方法を広めました。はじめて梨づくりを始める村人にも親切に教えました。村人が新しい道具や消毒薬を買うのに困っているときは、梨を売ってたくわえていたお金をおしらず貸しました。

明治三十八(一九〇五)年、藤吉が五十六歳の時、宮城県は大凶作に見舞われました。米の収穫はいつもの十分の一に激減して、収入がない多くの農家は出稼ぎに行きました。学校では、教科書や学用品を買えず、弁



現在の利府町の梨畑(開花時期)(利府町教育委員会提供)

当さえ持参できない児童が増えました。しかし、梨はそれほど影響を受けず、利府の農家は梨づくりによって安定した収入を得られました。

四十年以上にわたって梨栽培を広め、品種改良に力を注いだ藤吉は、七十七歳でその生涯を閉じました。藤吉の努力によって、利府の梨農家は多いときには三百五十五軒にも上りました。今では、九月ともなれば、利府の道路のいたる所で梨の路上販売店が軒をつらね、秋の風物詩ともなっています。旧利府町役場(今の十符の里プラザ)の向かい側に、藤吉が植えた『真鍮梨』の木が枝を広げて植えられています。その横には、利府の村人を救った「大恩人」として藤吉をたたえる『頌徳碑』がたたずんでいます。



真鍮梨(利府町教育委員会提供)

摘果：余分な果実を取り除き果実数を制限する事により、大玉の果実を生産するため、品質の良い果実を選別して、高品質な果実を収穫するために行う作業。

風物詩：その季節をよく表している物、事柄。
頌徳碑：その人物の功績や名譽をたたえる記念にするため文字を刻んだ石。

日野 藤吉

日野 藤吉は、嘉永二(一八四九)年、現在の利府町に生まれた。米づくりに頼っていた利府の農業に梨の栽培を取り入れた。栽培が成功し、利府の農家は天候に大きく左右されず収入が得られるようになり、のちに大恩人とたたえられた。

布施辰治 | 弱い立場の人々のために |



布施 辰治
(石巻市教育委員会提供)

布施辰治は明治十三(一八八〇)年、牡鹿郡蛇田村(現在の石巻市蛇田)の農家に生まれました。「立身出世を求めるとも、貧しくても富を求めず、正しい行いをしていくことが大切だ」と考えていた辰治は、十八歳の時に、「哲学を学びたい」という思いから親の反対を押し切って上京し、明治法律専門学校(現在の明治大学)に入学しました。

辰治は、新聞配達や納豆売りなどの仕事をしながら一生懸命勉強にはげみました。そして二十二歳で判事検事登用試験に合格し、司法官試験(今の検事)になりました。その後、間もなく、自分の仕事に疑問を感じ、司法官試験をやめて、弁護士として生きていく決心をしたのです。

弁護士とは、法律の専門家、人々の権利や利益を守る仕事をする人です。裁判を公平に行うため、弁護士として被告人の権利や利益を守ることも仕事の一つです。辰治が弁護士となった翌年、日本とロシアの間で日露戦争が起きました。国をあげて戦争に集中していたので、人々の暮らしは苦しく、その日の食事に困った末、罪をおかしてしまう人も少なくありませんでした。罪をおかした人は裁判にかけられます。裁判にはお金がかかります。お金がない人は、弁護人をたのめず、その結果、受け入れられないような重い罰を一方的に与えられることもあったのです。今の日本には、「国選弁護士」という制度があります。これは、自分で弁護士費用を出せない人のために、国が代わってお金を出して弁護人をつける制度ですが、そのころの日本にはまだありませんでした。

大正三(一九一四)年、第一次世界大戦が始まるとともに、物の値段がじりじりと上がり、人々の暮らしを苦しめていきました。そのような中、米の値段が安定していたことがせめてもの救いでした。しかし、その米も少しずつ値上がりし始めたのです。

大正七(一九一八)年には半年間で二倍以上になるといふ異常さでした。一般の人々の苦しみと不安はつり、ついに富山県でいわゆる米騒動が引き起こされ、全国各地に広がりました。当時の政府は、十万人以上の軍隊や警察を出動させて、騒動をおさえました。

「国民はただ、生きるために、命を守るために必死なのだ。政府は国民のために何をしているのだ。」

困っている人々が大勢いることを考えると、辰治は居ても立ってもいられません。辰治は数名の仲間とともに米騒動における被告人の弁護を引き受け、各地を回りました。

「米騒動の原因は政府自身にあったのに、軍隊まで使って暴力で押さえつけた。これは断じて許されることではない。」

辰治のするどいまなざしはまっすぐ裁判官や検事に向けられ、力のこもった声が法廷に響き渡ります。彼らの弁護は、人々の心を救うと同時に、その後の政治にも影響を与えられました。

辰治は、ほかの弁護士の二倍も三倍も仕事をしました。その名は、すぐ腕の弁護士として評価を高めていきます。東京でも指折りの立派な事務所を建て、成功者の道を歩んでいました。ある時期は一年間に二五〇件以上の事件を取り扱い、一日に平均四回も法廷で弁護を行うほど忙しい日々を送っていました。法廷から法律事務所に戻った辰治は、減ることのない山積みの書類に目を落としました。(立場が弱く、生活に苦しむ人々は少しも減らない。このままでもいいのだろうか……。)



演説をする布施辰治 (石巻市教育委員会提供)

立身出世:
社会的に高い地位
について有名にな
ること。

哲学:
物事を根本原理か
ら統一的に把握・
理解しようとする
学問。

判事:
裁判所で裁判を行
い、判決をくだす
人。

検事:
犯罪を捜査し、容
疑者を裁判にかけ
その裁判をおしす
ため、監督する人。

被告人:
検事から訴えられ
た人。

日露戦争:
明治三十七(一九
〇四)年から明治
三十八(一九〇五)
年にかけて日本と
ロシアでおこった
戦争。

第一次世界大戦:
大正三(一九一四)
年から大正七(一
九一八)年にか
けて戦われた人類史
上最初の世界大
戦。

法廷:
裁判官が裁判をす
る所。

ある日、辰治が、朝早く起きて仕事の準備をしていると、ふいに呼び鈴が鳴りました。玄関には、一人の男が立っていました。

「布施先生に相談したいことがあって参りました……。」

事務所を開ける時間までは、まだだいぶ時間がありますが、辰治は男の話を聞くことにしました。

「さあ、こちらへどうぞ。お話をうかがいましょう。どうされましたか。」

いすに腰掛けたその男は、たいそう疲れている様子でした。そして、大きくため息をつくとき、ぼろぼろと涙を流しながら話し始めました。

「ずいぶん前から、必死に仕事を探しているのですが、どこへ行ってもやとってくれる所がないのです。このままでは家族と生活していくことが……。どんな仕事でもやります。どうしたらいいでしょうか。」

男は、なけなしのお金をはたいて列車に乗り、わらにもすがる思いで、辰治の所に来たのでした。

「そうですね。仕事をするには何よりも体が大事です。食事はしっかりできていますか。」

「もうお金は底をつきました。家族みな、昨日から何も食べていません。」

男の話に、辰治は言葉を失っていました。そして、泣き続ける男の背中を、ただたださすることしかできませんでした。辰治は、玄関から出て行く男の背中に、こう語りかけるのでした。

「世の中に、一人だって見殺しにされていい人間などいない。私はこれからも、困っている人を一人でも多く助けるために命の限り頑張る。」

その日から、布施法律事務所は、朝六時三十分には玄関を開けるようになりました。これは、夜中に突然問題が起きてしまった人や、遠くから夜行列車でかけた人のためです。さらに、食卓にはいつでもご飯、みそ汁、漬物などの食事が用意されました。

その後も、日本では治安維持法などの法律によって人々の自由はおさえられました。とりわけ、植民地とされた朝鮮・台湾の人々は、差別され、日本人よりさらにつらい立場に置かれていました。辰治は、彼らに対するひどい扱いについて調査、抗議をしたり、朝鮮独立運動など朝鮮人が関連する事件の弁護を数多く引き受けたりしました。弁護士として彼らの側に立つことは、自分自身も権力と対決する場に身を置くことでした。弁護士の資格を取り上げられたり、牢に入れられたりした時期もありました。そのような中でも、辰治は「生きれば民衆と共に、死すべくんば民衆のために」という信条を曲げず、政治的、社会的に弱い立場の人たちに寄り添い続け、その救済に努力したのです。

生誕の地である石巻市蛇田のあけぼの南公園内には顕彰碑が立てられ、その功績と志を今に伝えていきます。



布施辰治の顕彰碑



布施辰治の法律事務所 (石巻市教育委員会提供)

布施 辰治
布施辰治は、明治十三(一八八〇)年、牡鹿郡蛇田村(現在の石巻市蛇田)に生まれた。明治から昭和まで約五〇年にわたって弁護士・法律家・思想家・社会運動家として活躍した。特に植民地統治下の朝鮮(現在の韓国)で、裁判にかけられた多くの独立運動家の弁護を無償で引き受け、力をつくしたことから、「われらの弁護士」「日本のシンドラ」¹⁾とたたえられ、平成十六(二〇〇四)年に、日本人として初めて韓国建国勲章を受章した。

シンドラ……
オスカー・シンドラ¹⁾。現在のチェコ領で生まれたドイツ人実業家。第二次世界大戦中にナチスの強制収容所に入れられていたユダヤ人の内、自分の工場に雇っていた二二〇〇人を、軍用工場に必要を生産力という名目で、虐殺から救った。

治安維持法……
国の体制や個人が財産をもつことを否定する団体や個人を取り締まるための法律。大正一四(一九二五)年に制定され、昭和二〇(一九四五)年に廃止された。

植民地……
政治的、経済的な面で他の国の支配下におかれ、自分の国の主権を行使できない国や地域。



星 泰三郎 (金山図書館提供)

宮城県の中に、まだ公立の図書館がなかったころ、小さな町に図書館をつくり、その図書館の館長として人々に本を読む楽しさを広めた人がいました。人々に「館長さん」と呼ばれ、みんなから慕われたその人は、星泰三郎です。

学校の教師として金山の地で働きながら、

泰三郎は、教師として働きながら、

(金山は日本一小さな町だ。子どもたちは、この中にだけとどまることなく、広い世界に活躍して社会のためにつくす人になってほしいものだ。そのために、子どもたちに進んで学ぶことを教えていくべきだ)と考えていました。泰三郎は、子どもたちに、

「日本一小さな町から巣立っても、みんなが羽ばたく世界は無限に広いのだ。」

といつも言っていました。しかし、泰三郎は子どもたちに、どう教えていけばよいのか、なかなか答えは出ませんでした。

そんなある日のこと、児童文庫の本を読んでいた少年が、目をきらきらさせながら、泰三郎に言いました。

「先生、この冒険の話の続きが読みたいです。」

泰三郎は、はっとしました。

(こんなにも、子どもたちの中に、本を読みたいという気持ちがあるのだ。今こそ、自由に本を読み、学べる

環境が必要だ。)

泰三郎は町に図書館を作りたいと願いました。当時、図書館をどのように作り、どのように運営したらよいかも分からない中でしたが、泰三郎の考えに共感する多くの人の協力を得て、昭和十一年に宮城県で六番目の公立の図書館が完成しました。

「先生、これを調べたいのですが、どのように調べたらよいですか。」

「これは、自然科学の分野だから、あちらの棚だよ。」

図書館で、本の楽しさを知った子どもたちは、学ぶことがどんどん好きになりました。しかし、世の中は、戦争に向かって進んでいき、多くの卒業生が戦地に旅立っていきました。そのような中、泰三郎も転勤で金山の地を離れることになりました。

泰三郎が金山の地を離れて六年が経った昭和二十年八月十五日に終戦を迎えました。この日は、朝から暑い日でしたが、泰三郎は、庭先で一人青空を見つめていました。教え子の顔が次々うかんできましたが、その中には戦争で亡くなった卒業生もいました。

泰三郎はその後、間もなく学校の先生をやめ、生まれ故郷の金山に戻りました。泰三郎は、毎朝早くに起きて、通りがかった人に、

「おはようございます。」

と、ていねいにあいさつをしながら、道路をきれいに掃く活動を続けました。こうして、地域のために、一生懸命働く泰三郎の姿を見た金山の人たちは、再び、金山図書館の館長として迎え入れたのです。



昭和11年金山図書館開館
(金山図書館提供)
(右から2人目が星泰三郎)

運営…
人や仕組みをうまく使って、仕事を進めること。

終戦…
太平洋戦争が終わったこと。

泰三郎は、(戦争が終わり、自由な世の中になった。今の自分にできることは何だろうか。)と考えました。そして、泰三郎は、東京に住んでいる金山町出身の人に頼み、東京で話題の本や流行っている本を送ってもらいました。本だけでなく、子どもたちの読みそうな雑誌や漫画も泰三郎の小遣いで買って入れました。そのため、図書館の中はいつも子どもたちでいっぱいでした。

「本を見せてください。」

子どもたちは、本が大好きになっていきました。泰三郎はそういう子どもたちの姿を見ながら、うれしそうにほほえむのでした。こうして、泰三郎は来る日も来る日も、地域の人のため、子どもたちのために図書館を開館し続けました。

ある寒い冬の日、図書館を訪れた人が、冷たい水で掃除をしていた泰三郎に、

「館長さん、こんな寒い日に、なぜ、冷たい水で雑巾がけをしているのですか。」

と聞きました。泰三郎は、

「このくらい何でもありませんよ。毎朝、冷水で体を拭く健康法をもう何十年もやっているよ。」

と笑って答えるのでした。泰三郎は、地域の人たちのため、図書館の本を楽しみにしている人たちのためにも、健康に気をつけながら、利用する人が気持ちよく使えるように気を配っていたのです。再び館長になって、十年以上の月日が経ってからも、泰三郎は、一人で本を入れ、片付け、修理までこなしました。本の数も一万冊以上になりました。しかし、びっしりとすき間なく並んだ本棚を見ながら泰三郎は、ため息をつきました。泰三郎も年をとり、図書館も古くなるとともに、本を収めるスペースもなくなっていったので、図書館の利用者も少しずつ減ってきていたのです。

そんなある日、思いがけないことが起こりました。これまで、金山のために働き続けた泰三郎に、東京で成功した金山町出身のお金持ちが、何と、お金を贈ってくれたのです。泰三郎はそのお金を、図書館建設のため、

町に全額寄付することにしました。そして、八年後の昭和五十二年、真っ白い壁の図書館が立派に完成したのです。

こうして、再び、図書館の仕事は忙しくなりました。日曜日には、他の地区からも子どもたちがやってきました。そのため、新刊書を見やすく机に並べておくなど休む暇などありませんでした。これまで、図書館の仕事をすべて一人でこなしてきた泰三郎でしたが、すでに八十歳を過ぎていました。気がつくとき、図書館に来ている子どもたちは泰三郎の手伝いを進んで行うようになっていました。

「ありがとうございます。」

「館長さんの役に立ててうれしいです。いつもお世話になっていいるから。」

と、子どもたちは言うのでした。

泰三郎は、大晦日も元日も、毎日毎日、三十九年の間一日も休まずに図書館を開館し続けました。



星泰三郎の胸像

金山図書館で多くの本に出会った子どもたちは学ぶことの好きな大人へと成長し、いろいろな仕事の分野で活躍しました。

泰三郎の死後、地域の人々はその業績をたたえ、金山公民館(現在の金山まちづくりセンター)前に胸像を建てました。金山公民館を訪れる人々の中には胸像に手を合わせて拝む人がいるそうです。

星泰三郎

星泰三郎は、明治二十六(一九〇三)年、金山町(現在の丸森町金山)に生まれた。教育の道を志し、小学校長として勤務した後、図書館長として三十九年間休まずに図書館を開館し続けた。

新刊書:
新たに発行された
本。

牧野富三郎は、日本から初めてハワイに渡った人たちのリーダーとして活躍した人です。

そのころの日本は幕末と言われる時代であり、政治のあり方をめぐって、国内では争いが起きていました。このようなどき、ハワイの国王から、「日本とよりよい関係になっていくために、ハワイで仕事をしたい日本人を受け入れたい」という親書が届きました。しかし、日本は国内での争いが続いていたため、なかなか交流を進めていくことができず、何年か過ぎてしまいました。

慶応二（一八六六）年、アメリカ人のユージン・ヴァン・リードが駐日ハワイ総領事として日本にきました。ヴァン・リードは、日本人をハワイで出稼ぎできるようにすれば、国王の思いと一致すると考えたのでした。慶応四（一八六八）年、ヴァン・リードの努力によって、人々を乗せるための船、サイオト号の出港が決まりました。

その船の総代として船に乗ったのが、富三郎だったのです。富三郎は、牡鹿郡石巻村（現在の石巻市）の下級ながら侍の身分をもち、知識があつて武道もよくできる人でした。新しいことに興味をもち、外国の人が集まっている横浜に出て、商人や労働者の人たちの手続きや手紙の代筆をしたり、外国の人と交流をもったりして、片言の英語を話すことができました。ハワイへの出稼ぎの話聞き、富三郎は自分も異国の地で仕事をしたいと強く望んでいたため、ヴァン・リードに協力していこうと考えたのです。

慶応四（一八六八）年四月二十五日、サイオト号は百五十三人の日本人を乗せて、ハワイに向けて横浜港を出港しました。

出港したサイオト号では、嵐のため船酔いをして苦しみ五日間食事ができなかったり、米は積みこんだものの魚や野菜がそろっていないために満足な食事ができなかったりして、人々はしだいに初めての長い船旅へ不満をもち始めました。また、多くの人々がいっしょに暮らす中で争いも多くなりました。「私は、この人たちが無事にハワイに着くまで、支えていかなければならない。」富三郎は、船内で起こる問題を一つ一つ解決していきました。しかし、争いの中には、中国人のコックが、抗議にきた日本人を殺すと言って包丁を持ち出して大騒ぎになったこともあり、富三郎は、そのようなときでもひるむことなく

「ここで争いしても何の解決にもなりません。全員が無事にハワイに着きましょう。」

「皆さんの新しい生活が待っているのですよ。」

と訴えて、仲裁に入り、争いごとや苦情をおさめ続けました。人々は、富三郎を信頼し、ハワイでの新しい仕事、豊かな生活を夢見て船旅を進めていきました。

出発から三十四日かかって、サイオト号はハワイに着きました。ハワイの人々は、日本人をととても歓迎しました。来ることを選んでよかった。」

富三郎は、ヴァン・リードへハワイ到着と新しく始まった生活について報告書を送りました。

ハワイでの仕事の多くはサトウキビ畑で働くことでした。自分から仕事を求めてハワイに向かった人々でしたが、その仕事はとても辛いものでした。働く時間は一日に十時間を超え、暑い中でも、勝手に水を飲むことも許されません。雇い主はムチを持って、乱暴なことをすることもあり、日本人の中には亡くなってしまった人もいました。このような状況が続いたことから、人々は富三郎に助けを求めようになつてきました。このころ、富三郎には、「病気で休んでいると寝台から引きずり下ろされて、なぐられた。」



労働者を輸送したサイオト号
(出典『ハワイ移民の歴史』島岡 宏著:国書刊行会)

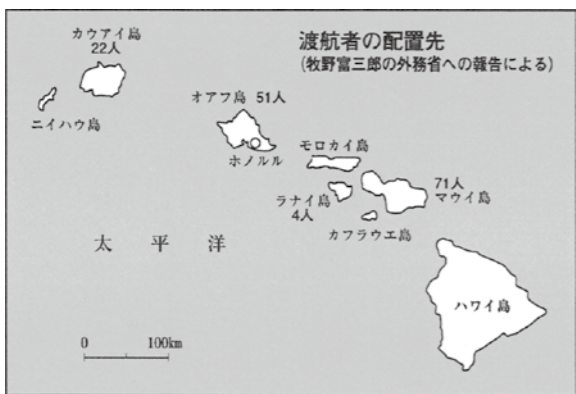
親書:
首相や大統領などその国を代表する人が、他の国を代表する人にあてて自分自身で書いた手紙。

総領事:
外国に住んでいて自分の国とその国の貿易を進めたりその国にすむ自分の国の人の世話をしたりする役人の長。

総代:
代表者。富三郎は出稼ぎ者の代表者となった。

四月二十五日:
慶応四年四月二十五日は太陰暦（むかしの暦）。太陽暦（現在使われている暦）では五月十七日。

仲裁:
争っているものの中に入ってとりなし、仲直りをさせること。



(阿部和夫氏提供:石巻法人会広報誌掲載)



元年者の一人がハワイに建てた住居
(出典『ハワイ移民の歴史』島岡 宏著：国書刊行会)

「警察に仕事のことを相談しようとする、馬で追われてムチで打たれた。助けられ。などの悩みが伝えられました。富三郎自身も大変な思いで仕事をしていたのですが、苦勞している日本人のためにできることはないか考えました。そこで、人々を代表して雇い主に仕事を改善しよう何度も訴えました。しかし、英語を上手に話すことができなかつたため、理解してもらうことはできませんでした。「このままでは、日本人の生活がさらに苦しいものになる……。日本に戻ることもできない。」

富三郎は必死にこの問題を解決しようと思いました。その一方で、仕事を嫌がる日本人に対して不満をもった雇い主からも、苦情が出されるようになりました。

「ハワイにたどり着いたときは、こんなことになるとは思わなかつた。」

何度も交渉しましたが、解決の方法が見つけれない日々が続く、富三郎の信頼も失われていきました。日本人の生活はさらに厳しいものになりました。それでもあきらめざるわけにはいきません。

「他にできることはないか。」

そんなとき、富三郎は明治政府の力を借りようと考えたのです。給料が安く、暴力を受けて辛い生活を送っている事実を伝え、日本人の仕事が少しでもよくなることを願って、日本へ手紙を書くことを決意しました。

「このまま、ずっと苦しい生活が続いてしまうのだろうか。」

富三郎はそのような不安を考えながらも、何度も手紙を書き続けました。しかし、明治政府から返事が返ってくることはありませんでした。このころの政府は、内部が混乱していました。そのため、富三郎の手紙は届いていたのですが、結論がすぐには出せなかつたのです。しかし、富三郎は、その理由を知ることができません。

「今回の手紙にも返事がない。誰か助けてくれ。それとも、助けは来ないのか……。」

初めて手紙を送ってから一年以上が過ぎた明治二(一八六九)年十一月、アメリカのサンフランシスコで、ハワ

イでの日本人の厳しい生活が新聞で大きく取り上げられました。記事を伝え聞いた明治政府は、ハワイの問題にしっかりと取り組むことを決意しました。明治政府の命令を受けてハワイに来た使節の一人、上野景範は日本人の帰国を認めさせるようにハワイ王国と交渉しました。

この交渉を行うには、これまでの富三郎の手紙に書かれていた情報が役に立ちました。上野はこれまでの情報を伝えながら、日本人が帰国できるように話し合いました。上野が話し合っている間も、富三郎は日本人の苦勞を調べて様子を伝えました。その結果、病人と帰国を希望した人の四十名ほどが日本へ帰ることができました。一方、およそ百名は、少しずつ生活が安定してきたことで、これからもハワイで働いていこうと考えたのでした。

「言葉がなかなか通じなくても、みんなの生活のために、あきらめなくてよかつた。」

富三郎は、生き生きと働く日本人の姿をじっくりと見つめました。

出稼ぎの仕事の契約期間は、三年と決まっていた。その三年が終わろうとするころ、富三郎はハワイに残っていた一人一人と、これからの生活について相談にのり、話し合いました。その結果、帰国を希望する人もいましたが、九十二名がハワイに残ることを決めました。こうして、この人たちが最初のハワイ移民となり、後に元年者と呼ばれるようになりました。ハワイに来た始めのころは、辛い生活を送っていましたが、三年が経って多くの日本人がハワイでの生活に満足感をもっていたのです。富三郎は、これまで自分が取り組んで来たことが間違っていたことを確信しました。総代としての役目を終えた富三郎は、その後も日本に戻ることはなく、アメリカに移り住んだといわれています。ハワイに移り住んだ人々のために懸命に取り組んだ富三郎の姿は、この後も多くの人たちの心に残っていたのです。

牧野 富三郎

牧野 富三郎(生誕没不明)は、幕末に、日本人初のハワイへの出稼ぎとして渡り、厳しい仕事や困難のある中で、日本人の中心となって、その人々の生活をよりよいものにするために努力を重ねた。最初のハワイ移民の中心となった人物と言われている。

交渉…
あることを決める
ために相手と話し
合(あ)わす。

使節…
国などの命令で他
の国に行かされた
人々。

移民…
他の国に移り住む
こと。またその
人々。



松山 京子
(写真『慈愛』刊行委員会提供)

昭和二十四（一九四九）年四月一日、金ヶ瀬村（現在の大河原町金ヶ瀬）に待望の医院が開業した日です。
まだ薄暗い早朝、門を開けようとした京子は思わず「あっ」と声をあげました。既に十数人の患者さんが門の前に並んでいたのです。

それまで金ヶ瀬村には医者がいませんでした。具合が悪くても我慢を重ね、手遅れで命を落とす人も多く、村の大きな問題になっていました。そのころ、隣村の小山田に腕のいい女医さんがいるという評判がたっていました。仙台空襲で家を焼かれ、疎開先の間借りの部屋で患者を診ているというその女医さんの名前は、松山京子といました。

金ヶ瀬村の村長や助役は、京子の所に何度も熱心に通い、村に来てくれるようお願いしました。そしてつい承諾を得たのです。京子が四十三歳の時でした。

開業したその日から目の回るような毎日が始まりました。一日に百数十人もの患者さんの診察と、昼となく夜となく頼まれる往診。食事をする暇も眠る時間も満足にとれないほどです。丈夫な京子でもよく体が続くものだと思うほど忙しい日々でした。

一年後、長男の進学のこともあり、松山家は仙台に家を持つことになりました。村人たちは京子がいなくなるのではないかと心配しました。しかし、京子は自分一人が金ヶ瀬に残る道を選んだのです。

土曜の夜には仙台に帰り、手作りの夕食を囲んで子どもたちの話を聞くのが京子の一番の楽しみでした。まだ小さかった娘には毎日ハガキを書きました。愛する家族のそばにいたい、どれほどそう思ったことでしょう。しかし、京子はその後もずっと金ヶ瀬にいて、地域医療に精力的に取り組んだのでした。

山越えの遠い家でも大雪の凍える夜でも、頼まれれば出かけ、往診料は取りません。そればかりか、生活の厳しい家からは、「あとでいいのよ。」と言って、治療費や薬代さえ取らないこともあったのです。

見立てがよくて腕もよく、気さくで明るくて誰にでも優しい京子。その豊富な経験と、日々学び続けている最新の医療知識によって、当時、助からないと思われた命をとりとめる人も多くいました。



40年以上校医を務め、子どもの名前、家族のことまでよく知っていた京子

昭和三〇（一九五五）年、八月のある暑い日のことです。生後四か月の長男の頭におできができたと一人の母親が来院しました。京子が治療し一旦はよくなったものの、五日ほどすると頭が大きく腫れ上がり、ひどく苦しみ出したのです。あいにく土曜日の夜で、京子は仙台に帰っており、やむなく別の病院に緊急入院しました。その病院でも、夜を徹した治療が行われました。しかし、翌朝、「残念ですがもう治る見込みがありません。最期は家で静かに……」そう言われて帰されてしまいました。赤ん坊は、百人にほんの二、三人助かるかどうかの難病にかかっていたのです。若い母親は、ただ泣き崩れるしかありませんでした。家族も皆、嘆き悲しみました。もうどうすることもできません。親戚が集まりお葬式の相談などしているところに、知らせを聞いた京子が駆けつけました。

疎開：戦争や火災などで受ける害を少なくするため、都会の物や人をほかの土地にうつすこと。

承諾：相手の願いやたのみを聞き入れて承諾すること。

精力的：疲れを見せず、仕事を積極的に行っていく様子。

「危篤ですが、今私にできる限りの治療をしてみます。連れてきてください。」
京子には珍しく険しい表情でした。家族は、わらにもすがる思いで赤ん坊を戸板に載せて運びました。その時、赤ん坊の頭から大量の血うみが流れ出したのです。だれもがもうだめだと思いました。しかし、京子は手を止めませんでした。すぐさま点滴や新薬の投与など、懸命の治療を開始したのです。

一時も気を抜かず見守り続けて、三日目の朝のことです。眠り続けていた赤ん坊の口元がかすかに動くのを見た京子は、母親に向かって静かに言いました。
「お乳を飲ませてみて。」

母親がスプーンでそっと口に持っていくと、赤ん坊は小さな唇で弱々しいながらも吸い始めたのです。京子に、やっといつもの笑顔が戻りました。母親の肩をそっと抱くと、優しい声で言いました。

「もう大丈夫ですよ。…おかあさんも頑張ったわね。」

「先生…。」

母親の目から涙がとめどなくあふれ出し、あとは言葉になりませんでした。一度は諦めかけた赤ん坊の命が、母親のところへ戻ってきた瞬間でした。

開業から四十年以上、金ケ瀬で地域医療につくした京子は、人々にとって、家族のように温かく頼れる存在でした。京子も『金ケ瀬の方々は家族と同じ』と言って親しく接しました。そして、校医としての報酬や年に何十回も依頼される講演等の謝礼などをすべて、学校への検診器具や遊具等の寄贈にあてたのでした。特に、『心の栄養に』と言って、毎年小中学校に贈った沢山の本は、『松山文庫』と名づけられ、多くの子どもたちに親しまれました。



京子の健康講話は、
わかりやすいと大評判だった

その志は金ケ瀬の人々に受け継がれ、現在も本の寄贈が続けられています。

昭和六十(一九八五)年、京子は長年の功績により、日本の女医に送られる最高賞である『吉岡弥生賞』を受賞しました。八十歳になっても、自転車を経やかにこいで往診する京子の姿がテレビで紹介されると、大きな反響を呼びました。

これを機に、京子への思いを形にしたいという願いが高まり、金ケ瀬の人々の手で『慈愛』という本が作られました。慈愛の意味は、『我が子を愛するような慈しみの気持ち』です。京子という人、その生き方にぴったりのタイトルです。この本には、三百六十人もの人々が原稿を寄せています。文章を書くのが苦手だという人も、病気で手が思うように動かない人も、みんなが進んで筆をとりました。京子への特別な思いがそうさせたのです。



人々の京子への思いがあふれる本「慈愛」の1ページより

すべての人のいのちを慈しみ、大切に守る。京子の医師としての信念は、九十八歳で亡くなるまで少しも揺るがず、たくさんの人々の身体を癒し、心を潤しました。

生前に金ケ瀬に松山家のお墓をつくっていた京子。その墓石には、京子自筆の句が刻まれています。
「早春の雲とび蔵王ま近にす」

(写真『慈愛』刊行委員会提供)

松山 京子

松山 京子は、明治三十九(一九〇六)年、三重県名賀郡花垣村(現在の伊賀市)に生まれた。東北大助教授であった松山氏との結婚を機に仙台へ。東北大学病院、大河原保健所勤務を経て、大河原町金ケ瀬に開業。長年小中学校の校医としても活躍し、町内外で行った衛生や健康の講話によって病氣予防にも尽力した。地域の人々から絶大な信頼を集めた『慈愛』の医師。

危篤：
病気が非常に重く
て、今にも死にそ
うなこと。

戸板：
雨戸の板、特に、
人や物をのせて運
ぶ場合などという。

吉岡弥生：
東京女子医学専門
学校・東京女子医
科大学創立者。
京子の恩師でもあ
る。



水上 不二 (水上家提供)

『海はいのちのみなもと
波はいのちのかがやき
大島よ
永遠にみどりの真珠であれ』



亀山にある詩碑

ふるさとの海を一望する気仙沼大島の亀山には、郷土が生んだ詩人水上不二が最後に訪れたときに詠んだ詩碑があります。この詩は、たくさんの恵みをもたらしてくれた海への感謝とふるさと大島への祈りをこめて作られたものです。

不二は、明治三十七（一九〇四）年、本吉郡大島村（現在の気仙沼市大島）で漁師を営む父佐助、母あやの次男として生まれ、名前を佐蔵（後に「不二」と改名）といいました。子どものころから十八鳴浜や岩場を遊び場とし、真っ黒になるまで自然の中を走り回る自然が大好きな少年でした。

小学校高等科を卒業と同時に本吉郡立水産学校（現在の気仙沼向洋高校）へ進学した不二は、入学して間もなく運命の一冊と出会いました。それは『赤い鳥』という童話童謡雑誌でした。その中でも、北原白秋の詩を読むなり、大きな衝撃を受けたのでした。

（見たもの、聞いたもの、感動したものをこんなに素直に表現できるなんて……。詩に人を感動させる力があるなんて……。）

詩のもつ力に心を動かされた不二は、いつしか文芸誌に詩などを投稿するようになり、作品が掲載されるようになりました。うれしくなった不二は、寝る間もおしんで詩を作るようになり、その結果学校を中退してしまふのでした。

ある日、友人に教師になるための試験を受けないかと誘われた不二は、試験に見事合格し、十八歳の秋から地元の学校で教師生活をスタートさせました。そんな時でも詩の投稿に情熱を注いだのでした。また、子どもたちに雑誌『赤い鳥』を見せながら、雑誌への投稿を大いにすすめるのでした。（あの感動した思いをこの子どもたちにも味わわせたい。それにはこれしかない。）
校長や同僚の先生から反対もされましたが、自らを信じ、詩のもつ力を信じた授業スタイルは、最後まで止めることはありませんでした。教え子の中には、自分を感動させた『赤い鳥』に掲載された子どももいました。不二はその雑誌をうれしそうに読む子どもたちの姿に静かにうなずくのでした。（私もこの子どもたちを感動させる作品をつくりたい。もっと詩の勉強をするために東京に行くしかない。）

旅立ちには、せんべい布団と大きな希望の詰まった雑誌『赤い鳥』だけの暖かい春の日でした。

二十四歳で上京した不二は、教師生活を続けながら、北原白秋の考え方にさらに影響を受け、詩の中に子どもを登場させたり、子どもの自由な感情を表現したりする新しい技法にも挑戦するようになりました。初めて出した詩



教師時代の不二 (写真右側) (水上家提供)

十八鳴浜（くぐなりはま）……気仙沼市大島の北東部・大初平にある長さ約二百メートル、幅約三十一メートルの砂浜。黄褐色の石英粒がらなり、砂を踏むと「キョッキョク」とあるいは「クツクツ」（九十九と十八）と鳴くことからこの名が付けられた。

赤い鳥……日本の近代児童文学・児童音楽の創世期に最も重要な影響を与えた雑誌。
せんべい布団……綿が少なく、うすくて粗末な布団。

集は、ほとんど売れませんでした。そんなことで夢が揺らぐような不二ではありませんでした。

東京での生活にも慣れ、結婚して子どもにも恵まれた不二は、初めて白秋に会う機会に恵まれました。白秋は目の病気で光をほとんど失っていましたが、不二の目の前には自分があこがれていた白秋の元気な姿がありました。白秋の手を取り、そっと握りしめた不二は、さらに文学への火を燃やし、ペンを持つ手に力をこめました。

教師生活にピリオドを打ち、文学者への道を歩き出した不二でしたが、国中が戦争による暗い時代へと進んでいきました。食料も満足に手に入れることができないう生活が続き、しかも多くの文学者が戦争への意識を高めるような作品しか発表できなくなりました。しかし、不二は決してそんな作品をつくることはありませんでした。

(私は何のために詩を書いていたのだ。自分に嘘をつく教師、文学者などにはなりたくない。)

空襲により、家族の命の危険も感じるようになると、東京を離れる苦しい選択でしたが、気仙沼の大島に避難することを決断しました。

(必ず戻ってくる。いつか詩の力が必要になる、そのときまで……。)

しかし、避難した不二を待っていたのは、子どもたちに見た風景とはまるで別のものでした。子どもたちの遊んだ海にも山にも、子どもたちの笑顔は消えていたのです。

(子どもたちの笑顔を取り戻したい。私の信じた詩の力で笑顔をいっぱいにした

い。)

不二は自分の生活が苦しくても、詩を作ることを休むことはありませんでした。また、交通事情は最悪、雑誌を作る紙も不足していた時でしたが、出版社の人にお問い合わせのために焼け野原の東京へ何度も往復しました。熱い思いだけが不二を突き動かしたのでした。戦後の第一作「ハナノタネ」は、不二の子どもたちへの限りない可能性と未来に向けた応援詩そのものでした。この後も、水を得た魚のように子どもたちに愛される詩や学校で読んでもらえる詩を数多く作りました。いつしか『童謡詩人』と呼ばれるようになり、もなりました。

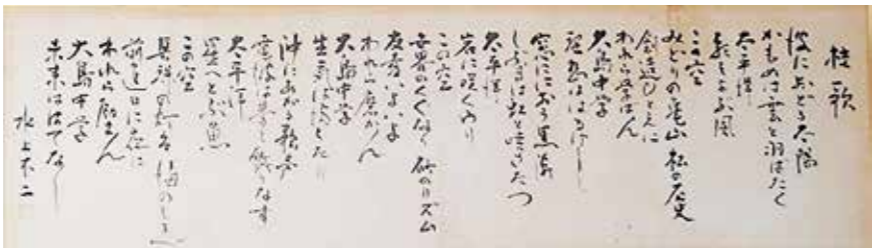
晩年、ふるさとの小中学校などから校歌などの作詞を数多く頼まれるようになり、母校の大島中学校の校歌を作詞したのも、そんな時期でした。校歌発表会の記念講演の中で、こんな言葉を子どもたちに贈りました。

「いま、君たちの頬にそよんでいる風は、世界を廻ってきた風ですよ。」

子どもたちにたくさん希望の種をまき続けた不二は、六十一歳でこの世を去りました。

水上不二

水上不二は、明治三十七(一九〇四)年、本吉郡大島村(現在の気仙沼市大島)に生まれた。昭和三年上京し、小学校に勤務し、鈴木三重吉や北原白秋らと「赤い鳥童謡運動」に参加した。昭和十二年、まどみちおなどと童謡童謡雑誌「昆虫列車」を創刊するなど、自然の大切さや子どもの未来を照らす作品を作り続けた。地元の小中学校の校歌や各地の小唄、音頭なども多数作詞した。



直筆の大島中学校校歌(気仙沼市立大島中学校所蔵)

ハナノタネ	
キノウ	ヒグレノ ミチバタデ
ヒトツ	ヒロツタ ハナノタネ
オニハノ	スミニ ワタクシガ
コソソリ	マイタ ハナノタネ
ドンナ	オハナガ サクノヤラ
ドンナ	ニオイガ スルノヤラ
ウツクシイメガ	デルマデハ
オトウサンニモ	ワカラナイ
アオイハツパニ	ナルマデハ
オカアサンニモ	ワカラナイ
ソレハ	チイサイ ワタクシト
カミサマダケガ	シツテイル

戦後の第1作『ハナノタネ』



宮城 新昌
(三養水産株式会社提供)

「海のミルク」と呼ばれている「かき」。宮城県は、かきの生産量が日本で二番目に多い県です。宮城県で、かき養殖が盛んになったのは、ある人が努力を重ね、今も続いているかき養殖法を発明したからです。その人物こそ、宮城新昌なのです。

宮城新昌は、明治十七（一八八四）年、沖縄で生まれました。地元の学校を卒業後、アメリカで勉強し「世界で活躍したい」という夢をもち、明治三十八（一九〇五）年にアメリカへ渡りました。このころのアメリカの漁業は、「とる漁業」から「育てる漁業」へと大きな時代の節目をむかえていた時であり、新昌にとって大変幸運なことでした。

新昌がワシントン州の「オイスターファーム」という施設を訪れた時、かきに魅了されてしまったのです。「何という豊かな味だ。高い栄養価は世界中の人々に受け入れられるはずだ。」

と確信しました。新昌は、アメリカで養殖を始めようと考え、粘り強くお願いしましたが、日本人であることを理由にかき養殖の許可がおりることはありませんでした。ならば近くにある別の国でやろうと考え、カナダへ渡りました。カナダではすぐに許可がおり、バンクーバーで大成をおさめました。かき養殖に自信をもった新昌は日本に帰国し、日本で養殖を始めようことを決意しました。新昌二十九歳のときです。新昌は、いずれ日本もアメリカのように「とる漁業」から「育てる漁業」へ変わる時代が来ると予想し、大正二（一九一三）年、バンクーバーでの経験を基に神奈川県にかきの養殖場と研究所をつくり、養殖したかきを販売し始めたのです。そんなとき、アメリカでは漁場があれはて、かき養殖が大ピンチになっていました。アメリカとさえ、かき養殖の許可を新昌に

魅了：人の心をすっかり引きつけて夢中にさせてしまうこと。

バンクーバー：カナダ西海岸にあるカナダ第三の都市。二〇一〇年に冬季オリンピックが開催された。

与えてくれなかった国です。仲間の中には、

「どんなに頼んでも養殖の許可をくれなかったアメリカを助ける必要はない。」

と話す人もいました。しかし、新昌は、

「アメリカのかき養殖を救うのは大変なことかもしれない。だが成功すれば、世界中へかきのすばらしさを広める第一歩となり、いずれ日本から世界へかきを輸出するのに役立つ。」

と新しい大きな夢をもち、救うことを決意しました。それは大変な苦難の始まりでもあったのです。

新昌は、あらためてかきについて勉強しました。そこで分かったことは、アメリカのかきは日本のかきと比べると病気に弱く、成長も遅いということでした。様々な方法を考えましたが、日本のかきを船でアメリカに輸出し、養殖するのが一番よいと決断しました。しかし、当時の船は、速さも遅く冷蔵設備もありません。そのため、アメリカまで船で三週間以上もかきを生かしておく必要がありました。最初は、親がきを生きたままアメリカまで届けようと思いましたが全滅してしまいました。次に、海に近い状態で運べばよいのではと考え、途中何度も海水をかけながら運びましたが、生き残るかきはほんのわずかでした。生き残ったかきを、養殖場で栽培しましたが量が少なく採算がとれません。アメリカへのかきの輸送に関わった仲間からは、

「アメリカのためにがんばる必要はない。もうやめたらどうか。」

という声も強くなってきました。そんな仲間にも、新昌は何も言わず頭を下げたのでした。

あるとき、アメリカの養殖場を観察していると、親がきにかきの稚貝がついていることを発見しました。もしかして稚貝ならば生きたまま運べるのではないかと考え、稚貝を船で運んでみました。すると、稚貝は乾燥にも強かったため、生きたままアメリカに到着しました。ついにアメリカのかき養殖を救うことに成功したのです。そこまで四年もの歳月を必要としました。

次に新昌は、日本全国で食べてもらえるようにすることを決意し、よりよい養殖方法の研究を始めました。乾燥に強い稚貝を一度海からあげ、成長をおさえながら強くする「抑制法」の実験を始めました。その方法は、アメリカに稚貝を運んだことがヒントになりました。そして、大正十四（一九二五）年、ついに現在も使われている「垂

冷蔵設備：冷蔵庫と同じ働きをする機械。
親がき：生育したかき。
採算：損をしないようにすること。

稚貝：生まれたばかりのかき（ホタテ貝などにつく）。

「下式養殖法」の原型を生み出しました。新昌は、稚貝をより強く育てられる場所を日本中回って探しまわりました。条件は、潮の満ち引きが大きいことでした。選んだ場所は、宮城県石巻市の万石浦です。石巻の萩浜も適していることをつきとめ大規模な養殖を始めました。これが成功すれば「世界中にかきのすばらしさを広める」という願いをかなえることができると思いました。

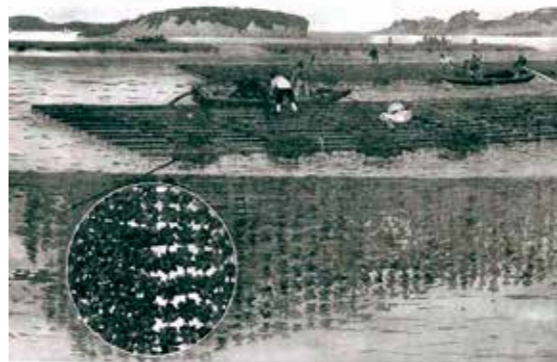
しかし、その養殖方法は最初からうまくいきませんでした。今と違い、かきや樽をつなぐロープはわらで作っていたため、海水の影響ですぐにくさってしまいました。浮き樽もいかりも必要でした。人々は口々に「わらを使えなければお金がかかる。樽を作る木だって高い。いかりは、どこも作ってくれない。やっぱりかきの養殖なんて無理だ。」

と、いつてやる気をなくしてしまいました。新昌は、「必ず、よい方法があるはずだ。あきらめてはいけない。わたしは、アメリカではできなかったことをカナダで成功させた。希望をもとう。」

そう言い聞かせて、問題を解決する方法を考えました。新昌自身も（かきを豆腐のように安く手軽に食べられるようにしたい）という、より大きな夢をもっていました。そのうち、わらにコルタルをしみこませることで、がんばるうにできると分かりました。当時、農家はわらの処理に困っており、農家は大きに喜びました。浮き樽には、値段の高い木を使わず間伐材を使いました。これまで売れず、間伐材の処理に困っていた木材会社が喜びました。いかだを固定するのに鉄も必要です。鉄工所にお願ひしましたが

「かき養殖のいかりなんて作りたくないよ。船のいかりを作るだけで十分暮らしている。」

そう言って作ってくれません。



万石浦で行われていた養殖の様子
(三養水産株式会社提供)

下式養殖法：
種がきを縄でつなげ、いかだから水中につり下げて行う養殖方法。
種がきとは、かきの卵がホタテなどに付いたもの。

コルタル：
石灰をつくる時にできる黒いねばりけのある液体。

間伐材：
成長した木が混み合わないよう間をあけるために切り出した木。細いうちに切るの、使い道が少ない。

「かき養殖が成功すれば石巻に住んでいる人々を必ず豊かにできる。石巻の人々のためだ。何とか作ってほしい。何度も何度も頼みこんでいかりを作ってもらいました。そして、「垂下式養殖法」のおかげで、粒の大きい、おいしいかきが大量に養殖できるようになりました。その結果、石巻の様々な産業が大いにうるおい、石巻全体の発展に役立ったのです。」

新昌がかきの様子を見に行くと、大勢の人たちが笑顔で働いていました。新昌は、その姿を目を細めて見つめていました。

昭和六（一九三二）年、新昌は石巻に「国際ようれい」という会社をつくり、その取組によってさらなるかき養殖の発展に努めます。「国際ようれい」という会社は、その後、かき養殖だけでなく、海藻の養殖、ホタテの養殖にも挑戦し、三つの養殖から「三養水産」と名前を変更し、現在も石巻市万石浦で地域資源の活用事業を行っています。

新昌は、昭和四十二（一九六七）年に亡くなるまで、かきの研究を続け、「世界のかき王」として世界中にかきのすばらしさを広める努力を続けました。人々は、その功績をたたえ、昭和五十四（一九七九）年、萩浜に顕彰碑を建てました。



石巻市萩浜にある顕彰碑

国際ようれい：
後年、絶滅の危機にあったフランスのかき産業を救った。

顕彰碑：
個人の功績などをたたえて建てられる石碑。

顕彰碑は、平成二十三年（二〇一一年）の東日本大震災で被災したが、平成二十五年（二〇一三年）再建された。

宮城 新昌

宮城 新昌は明治十七（一八八四）年、沖繩で生まれた。かき養殖に興味をもちアメリカやカナダで勉強した。日本に戻ってからは、現在も日本全国で使われている「垂下式養殖法」を発明し、石巻市の万石浦や萩浜で養殖を始め、日本全国に広めた。

谷津 はつね — 生命の誕生を見守る —



谷津はつね (谷津家提供)

伊具郡耕野村(現在の丸森町)に、人々から絶大な信頼を集めた助産師がいました。

生命の誕生を見守り続けたその人の名前は、谷津はつね。村の人は、親しみと尊敬をこめて「はつね産婆さん」と呼びました。

はつねは、明治四十(一九〇七)年、耕野村に生まれました。幼いころ親切で面倒見がいいので友達に大変したわれていました。はつねは、大きくなるにしたがい、人の役に立つ仕事をしたいと考えるようになりました。はつねが生まれた耕野村は山深く、冬になると背たけを超えるほど雪が積もる所でした。当時、出産は家で行うことが普通で、お産が近づくと、家族が助産師を呼びに行っていました。しかし、耕野村では、助産師のいる町まで遠いため、戻るまで何時間もかかりました。陣痛に耐えながら助産師を待つ時間は、産婦にとってつらいものでした。また、当時は、お産の時に赤ちゃんが命を落とすことも、今より多くありました。それを小さいころから見てきたはつねは、自分が生まれ育った村の尊い命を守りたいと助産師を志し、十五歳で親元を離れて仙台の学校で学び始めました。卒業後は医院に勤めながら、寝る間も惜しんで医学や看護学の勉強に打ちこみました。そして、二十四歳の時、ついに耕野村に助産院を開業することになったのです。

ある雨の夜の事です。激しく戸をたたく音がしたので戸口を開けると、一人の男がかけこんできました。「はつね先生、すぐに来てください。」

男は、二日前に診察した産婦の夫でした。妻が産気づいて苦しんでいると言います。はつねは、それを聞くと口をぎゅつと結び、うなずきました。そして、用意してあった合羽を、もんぺの上に素早く着て、家の前に停めてある自転車に飛び乗りました。山道にさしかかる辺りから雨は激しさを増してきました。目を開けていられないほどの強い雨です。街灯のない山の中は真っ暗で、足元は全く見えません。どろにタイヤを取られて何度も転びそうになりながら、二人は、一心に先を急ぎました。

ようやく家に着くと、はつねは、すぐに産婦のそばに行つて声をかけました。「待たせましたね。どうですか。」

「はつね先生の顔を見て、ほっとしました。」
産婦は、痛みをこらえて弱々しく笑いました。はつねも安心させるようにほほえみ返しました。しかし、診察するとすぐに固い表情になりました。赤ちゃんが逆子で予想以上にお産の進行が遅く、体力の消耗が案じられたのです。産婦は、長引く陣痛に疲れ果て、ぐったりしていました。

長い夜が明け、空が白み始めました。

(このままでは、母子ともに命が危なくなる。もし、自分が二人の命を守れなかったら……。)
はつねは、自分の心臓が早鐘のように鳴るのを感じました。不安と恐怖におしつぶされそうになりながら目を閉じた時、はつねの耳に、小さな声が聞こえてきました。

「二人の命が助かるためなら、おらの命をあげてもいい。お願いだから助けてください。助けてください。」

絶大：ほかものくらべようもないくらい大きな様子。

助産師：出産を助ける職業。

尊敬：相手の人格や能力、行いなどを立派だと思ひ、尊び、うやまうこと。

産婆：現在の助産師のこと。

陣痛：出産の時に一定の期間で起る腹痛。

産婦：出産する女性。

産気：子どもが生まれそうなき配。

もんぺ：女性が働くときに着る衣類。

逆子：お赤ちゃんの姿勢が正常の場合と逆になっていること。

消耗：気力や体力をすりへらすこと。

早鐘：火事などを知らせるために、激しく続けて打ちならす鐘。

どうかお願いします。助けてください。」

それは、産婦の夫の声でした。部屋の外で、母子の無事を祈る言葉を何度も何度もくり返しているのです。はつねは、その言葉を、しばらくの間じっと聞いていました。そして、大きく息を吸い込み、前掛けのひもを結び直しました。産婦のそばにひざまずくと、その手を力強くにぎって言いました。

「みんなが赤ちゃんの誕生を待っていますよ。さあ、がんばりましょう。」

はつねは、これまで学んできたあらゆる技術を使い、懸命にお産の進行を助けました。産婦を安心させるために声をかけ続け、母子の様子に注意深く気を配りました。目の前の母子のために全力をつくしているうちに、さっきまでの不安が消え去り、自分の内側から力がわいてくるようでした。

日が高く昇りました。昨夜の雨は上がり、鳥がさかんにさえずっています。

「さあ、生まれますよ。お母さん。」

はつねがそう声をかけた時です。

「——オギャー。オギャー。」

産声が高らかに響きました。元気な産声が聞こえると、家中が喜びに包まれました。

母親は我が子を抱きしめ、涙を流しています。赤ちゃんは、元気いっばいに手足を動かしています。

はつねは、一人外に出ました。山の緑が日の光にきらきらと輝き、空には大きな虹がかかっています。家の中から、新しい命の誕生を喜ぶ家族の声が聞こえ



てきます。その声を聞きながら、はつねは、いつまでも虹を見上げていました。

六十一歳で引退するまで、はつねは、助産師の仕事に情熱を注ぎ続けました。開業以来三十七年間に取上げた赤ちゃんは、実に四千人にのぼります。そのうち、ただの一人も命を落とすことはありませんでした。

人々は語り継ぎます。はつねが、雪まみれになりながらお産に駆けつけてくれたこと。どんなに遠い家でも赤ちゃんの湯浴みの世話に毎日通ってきてくれたこと。自宅の玄関の黒板には、何軒もの行き先と順番が書かれ、眠らないまま訪問を続けていたこと。

貧しい人からは代金をもらわず、だれに対しても優しく公平だったのはつね。人の役に立ちたいという志をつらぬき通したその生き方は、今も人々の心に深く刻まれています。

(イラスト 加藤 千代)



谷津はつねと愛用の自転車 (谷津家提供)

前掛け…
着物などをよこさないために、衣服の前の部分に付ける布。

湯浴み…
湯に入って体を暖め、また洗うこと。入浴。

谷津 はつね

谷津 はつねは、明治四十(一九〇七)年、耕野村(現在の伊具郡丸森町耕野)に生まれた。仙台で医学や看護学を学んだ後、故郷の耕野村に戻って三十七年間にわたり助産師をつとめた。多くの自宅出産に立ち会ったほか、産婦や新生児の健康に関する指導を行い、山間地域の医療と福祉に貢献した。

吉野 作造
(吉野作造記念館提供)

みなさんは、「民本主義」という言葉を聞いたことがありますか。「民本主義」とは、政治は国民の意見に基づいて行われるべきものである、という政治の在り方を表しています。これを唱えたのが、吉野作造です。作造は、自由と平等を大切にするキリスト教の教えや、留学中に見た、よりよい社会を目指そうとするヨーロッパの人々の姿から、一人一人の人間が自分の考えをしっかりと表現し、みんなで支え合いながらよりよい社会をつくっていくことが大切だという思いを強くしていきました。この思いが、「民本主義」という考え方につながっていきます。この考えは、当時の日本全体に広がり、「大正デモクラシー」という大きな運動が起こります。この運動が、だれもが選挙で政治に参加することができる現在の日本の選挙制度の基になっているのです。

作造は、政治学者として働く一方で、困っている人や貧しい人たちを助ける活動も積極的に行っていました。

ある日、作造は、多くの赤ちゃんや母親が、病気になってしまったり亡くなってしまうたりしていることを聞きました。実際に東京市街を歩いてみると、貧しい人たちが住んでいる地域には、親に見放されたたくさんの子供がいました。

当時の日本は、裕福な人とそうではない人の差が大きく、病気を治す薬さえ満足に買えなかったり、子どもが生まれても育てる余裕がなく手放してしまったりする人々がいました。

(この子どもたちは、どうやって生きていくのだろう……。それに、この貧しい大人たちも、幸せな生活ができていない。この人たちのために、何かできないだろうか。)

そう考えた作造は、仲間たちと「賛育会」という組織を立ち上げ、医師と一緒に病院(産婦人科)や、赤ちゃんなどを預かる託児所の運営に力を入れました。その医師の中には作造の教え子や、作造をしたって集まった学生たちがいました。また、作造に協力したいという人たちからの寄附もたくさん集まりました。

こうして始まった賛育会には、毎日のようにたくさんのお母さんが相談に訪れました。

「お金がなくて、赤ちゃんにじゅうぶんな栄養をあげられないんです……。」

「どうやって赤ちゃんを育てたらいいかわからないんです。」

医師たちは、困って訪ねてきた人に、すべて無料で相談に乗りました。賛育会を訪れた人々の多くは、医師たちに感謝の言葉を述べていきました。

「先生たちのおかげで、赤ちゃんを育てることができます。本当にありがとうございます。」
(これで、たくさんの人を救うことができるだろう。)

作造は、困っている人のために、会の運営などの面で精一杯活動しました。

大正十二(一九二三)年九月一日、午前十一時五十八分、関東大震災という大きな地震が、東京の街をおそいました。大きな揺れや建物の倒壊、火事により、十万人以上の死者が出ました。作造の勤めていた

大学も被害を受け、貴重な本や資料が焼けてしまいました。心を痛めた作造でしたが、そのような中でも、まず、困っている人たちの力になりたいという思いから、被災者のために一生懸命活動しました。

震災後、それまでよりも多くの人が病院を訪れるようになりました。作造は、これまで通り病院の運営に力を注ぎました。困っている人たちの笑顔や満足そうな顔を見ると、作造のつかれも吹き飛びました。

しかし、そんな日々が続いていた中で、作造は、あることが気になりました。患者の中には、無料でもらった薬を捨てたり、施設を何ヶ所も渡り歩いたりする人たちがいました。また、寄附をしている人の中には、自分が患者たちに行っている行為に感謝を求める人たちもいました。

「患者さんたちが、無料で治療を受けることで助かっていることは間違いない。だが、これで、この人たちは本当に幸せだといえるのだろうか……。いつまでもただ助けてもらう側、ただ助けてあげる側でよいのだろうか……。」

作造は、自分たちのやっていることが本当に正しいのか、本当にこれがみんなのためになっているのか、とても悩みました。作造は、悩んだ末、寄附金に頼っていた無料の治療を止め、有料にすることで、その利益で病院を運営していけるようにしました。

そして、これまでよりいっそう、患者たちへ、育児や生活をする上で必要な知識を伝えるようにしていきました。妊婦の元へ訪問指導を行っ



本所梅森亭における吉野作造の講話（賛育会所蔵）

たり、地域の人々の要望を聞いたり、日用品を安く売ったりして、地域のために活動しました。また、「平和村」という被災者のための住宅をつくり、そこに住む人たちが自分たちで生活できるように家だけでなく仕事も世話したり、技術を教えたりしました。こうして、その後も作造は、貧しい母親や被災者のために力をつくしていきました。はじめのうちとはとまどっていた人たちでしたが、少しずつ作造の考えが分かってきて、生きる希望もわいてきました。

作造は、このような言葉を残しています。

「私たちが最も心がけるべきことは、今現在、正しいとされることを守り続けることよりも、常により正しいことを追いつめる姿勢をもち続けていくことです。」

作造は、「民本主義」という考え方で日本全体の幸せを願っただけではなく、目の前で困っている一人一人の本当の幸せを目指した人でした。

よりよい社会を追い求めた作造の姿から、現代を生きる私たちも今一度自分や周りのことについて考えてみる必要があるのかもしれない。

吉野 作造

吉野 作造は、明治十一（一八七八）年、現在の大崎市古川に生まれた。政治学者として、人々の幸せのために、「国民のための国民による政治」を目指し、議会を中心とする政治の実現に力をつくした。作造が唱えた「民本主義」は、「大正デモクラシー」という大きな動きにつながり、国民だれもが政治に参加できる現代の政治社会の基礎となっている。

先人30人の軌跡

「夢を追いかけて」
「人々の幸せを願って」

「新たな可能性を求めて」
「伝統を受けついで」 「感性と技を磨いて」

みづかみ ふじ
水上 不二
-海と子どもを愛した詩人-

たかはし ちょうじゅうろう
高橋 長十郎
-地域の幸せを願って-

おいかわ へいじ
及川 平治
-すべての子どもたちに新しい教育を-

しろとり せいご
白鳥 省吾
-ふるさとを愛した詩人-

ちば あやの
千葉 あやの
-藍染めの技術を守る-

おの だいら ひさゆき
小野寺 久幸
-仏像修理一筋に歩んだ人生-

すずき てつろう
鈴木 哲朗
-新しい漁業への挑戦-

かとう きん
加藤 きん
-国境を越えて命を救う-

あいざわ こうしろう
相澤 幸四郎
-郷土の自然を守る-

いしのもり しょうたろう
石ノ森 章太郎
-まんがの王様-

ちば かめお
千葉 亀雄
-新しい文学の発展のために-

さいとう まこと
齋藤 眞
-脳神経外科の道をひらく-

そのべ ひでお
園部 秀雄
-女性剣士、薙刀を通して心を磨く-

ながさわ さいきち
永澤 才吉
-安全な水を人々に-

よしの さくぞう
吉野 作造
-本当の幸せを求めて-

ふせ たつじ
布施 辰治
-弱い立場の人々のために-

ごとう とうすい
後藤 桃水
-民謡を育てる-

たかはし えいきち
高橋 英吉
-夢を追い求めて-

ひの とうきち
日野 藤吉
-梨の栽培で村を救う-

まきの とみさぶろう
牧野 富三郎
-元年者を支えるために-

みやぎ しんしょう
宮城 新昌
-新しいかき養殖を求めて-

ただの ぶんや
只野 文哉
-電子顕微鏡の研究開発-

かみなが あきお
神永 昭夫
-東京オリンピックの銀メダリスト-

さとう ちゅうりょう
佐藤 忠良
-技を磨き続けた職人彫刻家-

さとう はしめ
佐藤 基
-インシュリンを発見する-

ほし たいさぶろう
星 泰三郎
-一日も休まない図書館長-

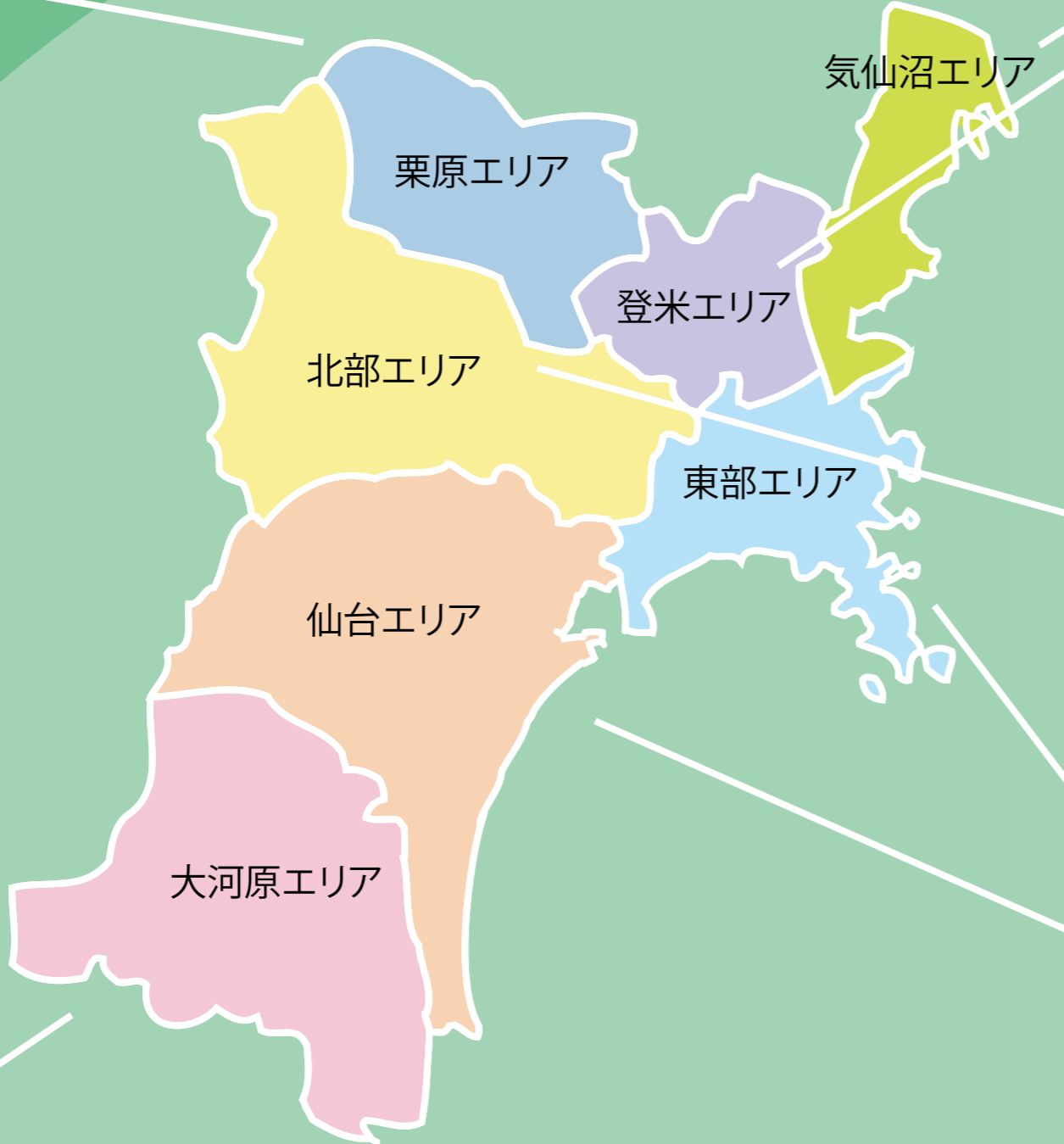
まつやま きょうこ
松山 京子
-無医村を救った慈愛の医師-

やつ 谷津 はつね
谷津 はつね
-生命の誕生を見守る-

こむろ とおる
小室 達
-伊達政宗公騎馬像をつくる-

さとう ちゅうたろう
佐藤 忠太郎
-伝統の復活と発展をめざして-

さとう はしめ
佐藤 基
-インシュリンを発見する-



時代	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代
日本の主なできごと	<p>一八六八 明治維新</p> <p>一八七三 地租改正</p> <p>一八七七 西南戦争</p> <p>一八九〇 第一回帝国議会</p> <p>一八九四 日清戦争（〜九五）</p> <p>一八九〇 第一回帝国議会</p> <p>一八八九 大日本帝国憲法発布</p> <p>一九〇四 日露戦争</p> <p>一九一〇 韓国併合が行われる</p> <p>一九一四 第一次世界大戦参戦</p> <p>一九二二 全国水平社結成</p> <p>一九二五 関東大震災</p> <p>一九二二 全国水平社結成</p> <p>一九二五 治安維持法</p> <p>一九二五 男子普通選挙</p> <p>一九三三 日本国際連盟脱退</p> <p>一九三一 満州事変</p> <p>一九三三 日本国際連盟脱退</p> <p>一九三七 日中戦争（〜四五）</p>	<p>一九二二 全国水平社結成</p> <p>一九二五 関東大震災</p> <p>一九二二 全国水平社結成</p> <p>一九二五 治安維持法</p> <p>一九二五 男子普通選挙</p> <p>一九三三 日本国際連盟脱退</p> <p>一九三一 満州事変</p> <p>一九三三 日本国際連盟脱退</p> <p>一九三七 日中戦争（〜四五）</p>	<p>一九四一 太平洋戦争（〜四五）</p> <p>一九四五 広島、長崎に原爆投下</p> <p>一九四五 ポツダム宣言受諾</p> <p>一九四六 日本国憲法公布</p> <p>一九五一 日米安全保障条約</p> <p>一九五一 サンフランシスコ平和条約</p> <p>一九四八 只野文哉、工学博士の学位を授与される</p> <p>一九四八 齋藤眞、「日本脳神経外科研究会」初代会長となる</p> <p>一九四九 松山京子、無医村金ヶ瀬に診療所開業</p> <p>一九四八 齋藤眞、「日本脳神経外科研究会」初代会長となる</p> <p>一九四八 只野文哉、工学博士の学位を授与される</p> <p>一九四八 只野文哉、工学博士の学位を授与される</p> <p>一九五三 園部秀雄、「全日本なぎなた連盟」発足に尽力</p> <p>一九五三 加藤さん、フローレンス・ナイチンゲール賞受賞</p> <p>一九五五 千葉あやの、「正義冷染」人間国宝に指定</p> <p>一九六四 相澤幸四郎の取組で、「白鳥愛護会発足」</p> <p>一九六四 石ノ森章太郎、『サイボーグ〇〇九』連載開始</p> <p>一九六四 神永昭夫、東京オリンピック柔道無差別級銀メダリスト</p> <p>一九六八 谷津はつね、産婆引退。とりあげた赤ちゃん約四〇〇〇人</p> <p>一九九〇 宮城県美術館に「佐藤忠良記念館」併設される</p> <p>一九九三 小野寺久幸、「大仏師」の称号授与される</p>	<p>一九九二 国連平和維持活動協力法</p> <p>一九八六〜九〇 ころ バブル経済</p> <p>一九七八 宮城県沖地震</p> <p>一九七三 オイルショック</p> <p>一九七二 沖縄返還</p> <p>一九七二 札幌冬季オリンピック</p> <p>一九六八 谷津はつね、産婆引退。とりあげた赤ちゃん約四〇〇〇人</p> <p>一九六四 相澤幸四郎の取組で、「白鳥愛護会発足」</p> <p>一九六四 石ノ森章太郎、『サイボーグ〇〇九』連載開始</p> <p>一九六四 神永昭夫、東京オリンピック柔道無差別級銀メダリスト</p> <p>一九六八 谷津はつね、産婆引退。とりあげた赤ちゃん約四〇〇〇人</p> <p>一九九〇 宮城県美術館に「佐藤忠良記念館」併設される</p> <p>一九九三 小野寺久幸、「大仏師」の称号授与される</p>
宮城の主なできごと	<p>一八八八 牧野富三郎、サイオート号の総代となりハワイ出航</p> <p>一八八四 日野藤吉、梨作りを始める</p> <p>一八八四 永澤才吉らの「水工会」日本初の近代水道工事完了</p> <p>一九〇三 布施辰治、司法官司補を辞し弁護士への道へ</p> <p>一九〇〇 パリ万博で高橋長十郎の会社の生糸がグランプリ受賞</p> <p>一九〇九 白鳥省吾、早大入学、坪内逍遙らの指導を受ける</p> <p>一九一四 吉野作造、「民本主義」発表</p> <p>一九二〇 後藤桃水四〇才のとき「全国民謡大会」開催</p> <p>一九二二 佐藤基、インシュリン発見</p> <p>一九二四 千葉亀雄が横光利一や川端康成らの文学の傾向を「新感覚派」と名付ける</p> <p>一九二五 鈴木哲朗、実業功労者として藍綬褒章を受ける</p> <p>一九二五 宮城新昌、牡蠣養殖「垂下式養殖法」原型を作る</p> <p>一九二四 千葉亀雄が横光利一や川端康成らの文学の傾向を「新感覚派」と名付ける</p> <p>一九二二 佐藤基、インシュリン発見</p> <p>一九二〇 後藤桃水四〇才のとき「全国民謡大会」開催</p> <p>一九一四 吉野作造、「民本主義」発表</p> <p>一九〇九 白鳥省吾、早大入学、坪内逍遙らの指導を受ける</p> <p>一九〇三 布施辰治、司法官司補を辞し弁護士への道へ</p> <p>一九〇〇 パリ万博で高橋長十郎の会社の生糸がグランプリ受賞</p> <p>一八八四 永澤才吉らの「水工会」日本初の近代水道工事完了</p> <p>一八八四 日野藤吉、梨作りを始める</p> <p>一八八八 牧野富三郎、サイオート号の総代となりハワイ出航</p>	<p>一九三九 佐藤忠太郎、片倉信光、遠藤忠雄らと「奥州白石郷土工芸研究所」設立</p> <p>一九三九 高橋英吉、『潮音』制作</p> <p>一九三七 水上不二、同人誌『昆虫列車』創刊</p> <p>一九三六 星泰三郎のはたらきで金山図書館完成</p> <p>一九三六 及川平治、仙台市教育研究所初代所長となる</p> <p>一九三五 小室達、伊達政宗公騎馬像完成させる</p> <p>一九二五 鈴木哲朗、実業功労者として藍綬褒章を受ける</p> <p>一九二五 宮城新昌、牡蠣養殖「垂下式養殖法」原型を作る</p> <p>一九二四 千葉亀雄が横光利一や川端康成らの文学の傾向を「新感覚派」と名付ける</p> <p>一九二二 佐藤基、インシュリン発見</p> <p>一九二〇 後藤桃水四〇才のとき「全国民謡大会」開催</p> <p>一九二二 佐藤基、インシュリン発見</p> <p>一九二〇 後藤桃水四〇才のとき「全国民謡大会」開催</p> <p>一九一四 吉野作造、「民本主義」発表</p> <p>一九〇九 白鳥省吾、早大入学、坪内逍遙らの指導を受ける</p> <p>一九〇三 布施辰治、司法官司補を辞し弁護士への道へ</p> <p>一九〇〇 パリ万博で高橋長十郎の会社の生糸がグランプリ受賞</p> <p>一八八四 永澤才吉らの「水工会」日本初の近代水道工事完了</p> <p>一八八四 日野藤吉、梨作りを始める</p> <p>一八八八 牧野富三郎、サイオート号の総代となりハワイ出航</p>		
宮城の先人（先人集に登場する人物）	<p>牧野富三郎 生年没不明</p> <p>永澤才吉 1840-1936</p> <p>高橋長十郎 1849-1933?</p> <p>日野藤吉 1849-1925</p> <p>鈴木哲朗 1866-1933</p> <p>及川平治 1875-1939</p> <p>吉野作造 1878-1933</p> <p>千葉亀雄 1878-1935</p> <p>布施辰治 1880-1953</p> <p>後藤桃水 1880-1960</p> <p>宮城新昌 1884-1967</p> <p>小室達 1899-1953</p> <p>千葉あやの 1889-1980</p> <p>白鳥省吾 1890-1973</p> <p>加藤さん 1890-1980</p> <p>星泰三郎 1893-1982</p> <p>佐藤基 1894-1968</p> <p>相澤幸四郎 1897-2000</p> <p>佐藤忠太郎 1901-1967</p> <p>水上不二 1904-1965</p> <p>松山京子 1906-2004</p> <p>谷津はつね 1907-1996</p> <p>只野文哉 1907-2005</p> <p>高橋英吉 1911-1942</p> <p>佐藤忠良 1912-2011</p>	<p>齋藤眞 1889-1950</p> <p>神永昭夫 1936-1993</p> <p>小野寺久幸 1929-2011</p> <p>石ノ森章太郎 1938-1998</p> <p>園部秀雄 1870-1963</p> <p>及川平治 1875-1939</p> <p>吉野作造 1878-1933</p> <p>千葉亀雄 1878-1935</p> <p>布施辰治 1880-1953</p> <p>後藤桃水 1880-1960</p> <p>宮城新昌 1884-1967</p> <p>小室達 1899-1953</p> <p>千葉あやの 1889-1980</p> <p>白鳥省吾 1890-1973</p> <p>加藤さん 1890-1980</p> <p>星泰三郎 1893-1982</p> <p>佐藤基 1894-1968</p> <p>相澤幸四郎 1897-2000</p> <p>佐藤忠太郎 1901-1967</p> <p>水上不二 1904-1965</p> <p>松山京子 1906-2004</p> <p>谷津はつね 1907-1996</p> <p>只野文哉 1907-2005</p> <p>高橋英吉 1911-1942</p> <p>佐藤忠良 1912-2011</p>		

【監修】

毛内 嘉威 (秋田公立美術大学 副学長, 教授)

鈴木 洋 (宮城教育大学 キャリアサポートセンター副センター長, 特任教授)

【作成委員 (50音順・敬称略)】

鮎貝 宗仁	小野寺 紀子	佐藤 千恵	鈴木 久美	三塚 隆洋
市村 博	小野寺 博美	佐藤 千寿	鈴木 哲也	山口 沙織
伊東 由扶子	加藤 裕樹	佐藤 理恵	鈴木 敏朗	吉田 伸一
稲辺 正浩	加藤 忠	嶋原 薫	多田 晃子	渡邊 真一
大越 淑江	菊田 淳	渋谷 和彦	福原 伸宏	
小嶋 留理子	咲間 弓絵	新海 あゆみ	北條 文子	
小野田 聡美	佐藤 孝幸	神野 真理	松崎 恵子	

【検討委員 (50音順・敬称略)】

阿部 朋樹	狩野 孝信	穀田 長彦	佐々木 弘晃	村田 富美子
大場 嘉博	工藤 成瑞	今野 享子	佐々木 利佳子	若生 利幸
岡 文	工藤 吉則	櫻井 知大	高橋 琢哉	

【協力者 (50音順・敬称略)】

相澤 庸郎	小野寺 克浩	小堀 恒男	志間 泰治	永澤 泰成
阿部 和夫	小野寺 久一	小室 穰嗣	鈴木 伸太郎	原畑 典三
阿部 富子	小山 重之	齋藤 純子	園部 正美	引地 昭夫
伊藤 菊二	加藤 諭	堺 博	高橋 幸子	日野 明夫
一村 則廣	加藤 千代	佐藤 和子	高橋 長偉	水上 和志
鵜飼 理恵	神永 憲	佐藤 昌子	只野 壽太郎	三上 満良
氏家 仁	神永 久次郎	佐藤 忠昭	多田 龍吉	三塚 昭悦
遠藤 光行	川嶋 保美	佐藤 達郎	千葉 繁美	宮嶋 健
扇子 美津男	菊田 榮四郎	佐藤 弘幸	千葉 正一	村岡 康
大場 吉樹	日下 龍生	佐藤 文子	千葉 まつ江	谷津 徳男
荻原 晴子	小玉 敏	佐藤 吉一	辻 尚広	山田 礼子

【団体 (50音順・敬称略)】

石ノ森章太郎ふるさと記念館	社会福祉法人賛育会	名古屋大学附属図書館医学部分館
石巻法人会	直心影流薙刀術 秀徳会	奈良市観光協会
角田市東根自治センター	白鳥省吾記念館	白雲山仏国峰仙禅寺
加藤陶器店	白鳥省吾研究会	二葉園宗家日本民謡桃水会
株式会社石森プロ	仙台市立五城中学校	丸森町金山まちづくりセンター
公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	仙台市立北六番丁小学校	金山自治会
公益財団法人日本民謡協会	仙台赤十字病院	美里町近代文学館
公益財団法人美術院(京都市)	全日本実業柔道連盟	水上不二研究会
神戸大学附属小学校	高橋英吉・フランク安田を語り継ぐ会	南三陸町ひころの里・シルク館
国書刊行会	東大寺(奈良市)	宮城県美術館
三養水産株式会社	東北大学資料館	宮城県佐沼高等学校
しばたの郷土館	登米市歴史博物館	吉野作造記念館
「慈愛」刊行委員会	名古屋大学医学部脳神経外科若林教授室	関係する各市町の教育委員会

【題字】 岩沼市立岩沼西中学校 第3学年 合川 礼菜